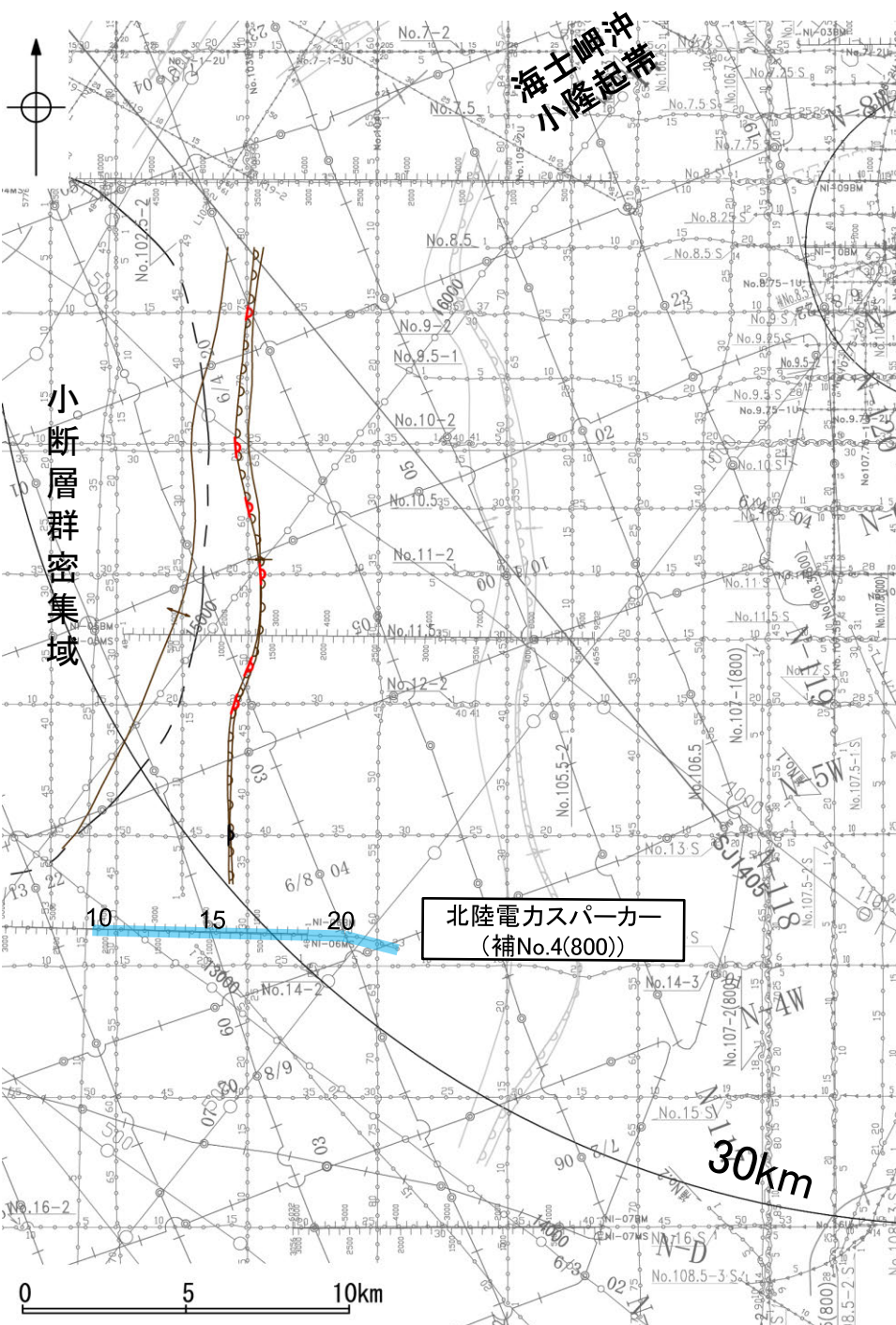
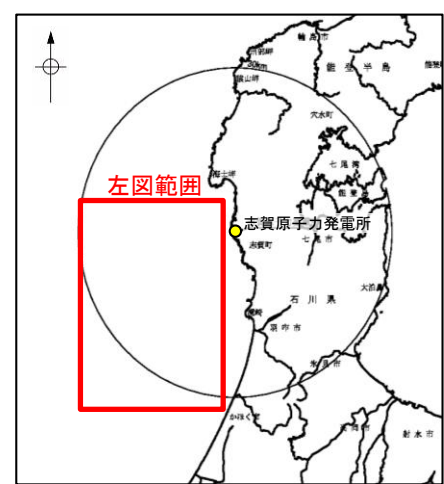


2.4.4 (4) 羽咋沖西撓曲の端部 —南端調査 補No.4(800)測線—

○No.13測線で推定した撓曲の南方延長にあたる補No.4(800)測線において、いずれの地層にも断層等を示唆するような変位、変形は認められない。



位置図

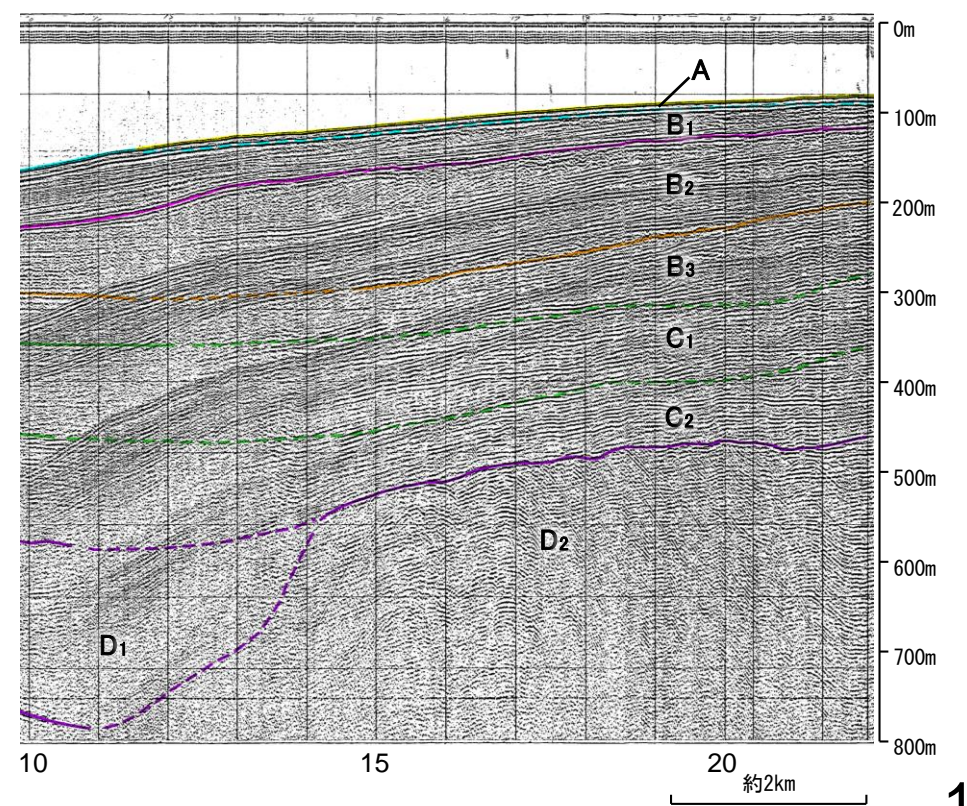
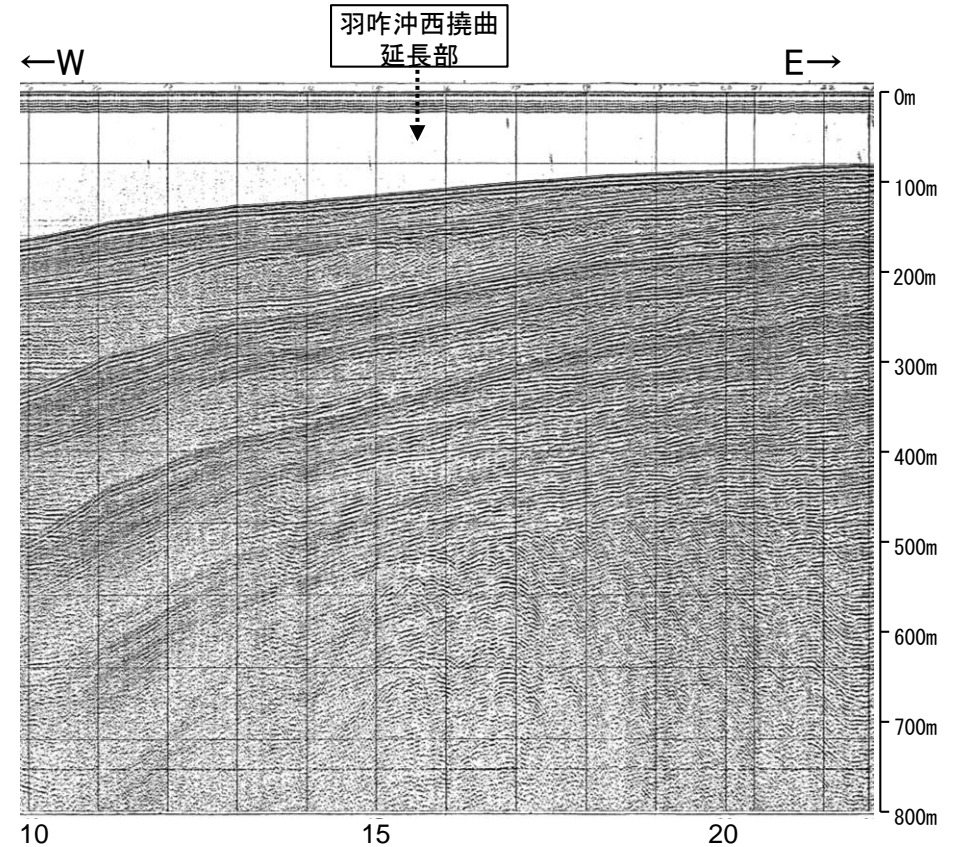
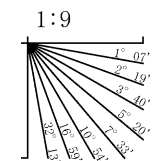


- 凡 例
- 対象断層: 撓曲 (curvature), 背斜軸 (anticline axis), 向斜軸 (syncline axis), 小断層群密集域 (area of dense small fault groups)
 - 対象外断層: 伏在断層 (blind fault), 撓曲 (curvature), 連続性のない伏在断層 (discontinuous blind fault), 右図記録範囲 (right figure recording range)
 - 背斜軸 (anticline axis), 向斜軸 (syncline axis)

- (測線位置における活動性)
- B層以上に変位、変形が認められる
 - B層以上に変位、変形の可能性が否定できない
- No. 8: 調査測線 (北陸電力: スパークー・シングルチャンネル・約2450ジュール)
 - No. 9-S: 調査測線 (北陸電力: スパークー・シングルチャンネル・約360ジュール)
 - No. 8U, No. 11B: 調査測線 (北陸電力: プーマー・マルチチャンネル・約200ジュール)
 - K17: 調査測線 (東京大学地震研究所: プーマー・マルチチャンネル)
 - L102: 調査測線 (産業技術総合研究所: プーマー・マルチチャンネル)
 - NI-06BM: 調査測線 (原子力安全・保安院: プーマー・マルチチャンネル)
 - NI-06MS: 調査測線 (原子力安全・保安院: ウォーターガン・マルチチャンネル)
 - N-118: 調査測線 (地質調査所: エアガン・シングルチャンネル)
 - I4: 調査測線 (文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)
 - H73-1: 調査測線 (エアガン・マルチチャンネル)
 - SJ1407: 調査測線 (海洋研究開発機構: エアガン・マルチチャンネル)

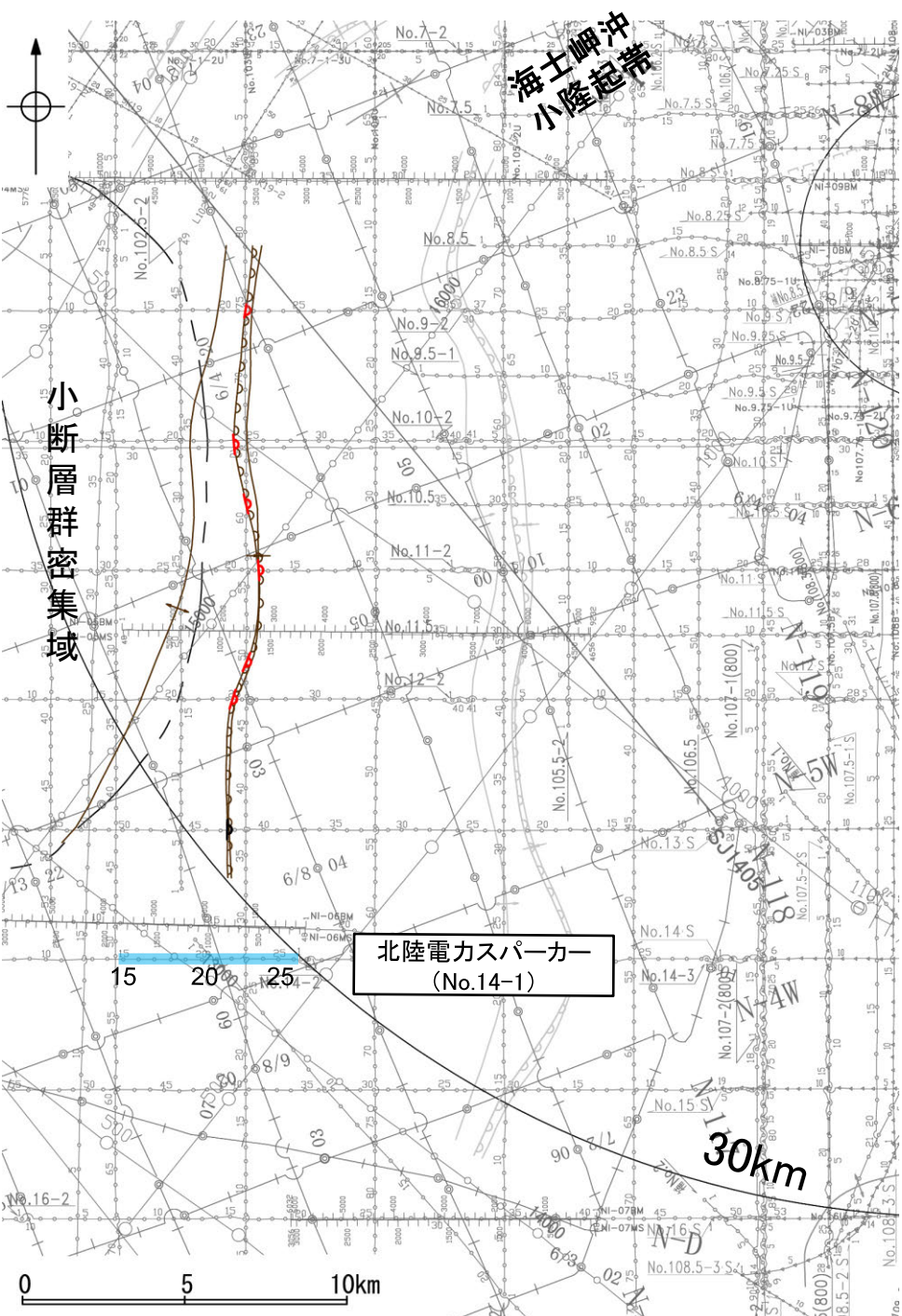
枠囲みの内容は機密事項に属しますので公開できません。

地質時代		地層名	
第四紀	完新世	A層	
	更新世	後期	B ₁ 層
		中期	B ₂ 層
		前期	B ₃ 層
	鮮新世	C層	C ₁ 層
第三紀	中新世	D ₁ 層	
	古第三紀	D ₂ 層	
先第三紀			



2.4.4 (4) 羽咋沖西撓曲の端部 —南端調査 No.14-1測線—

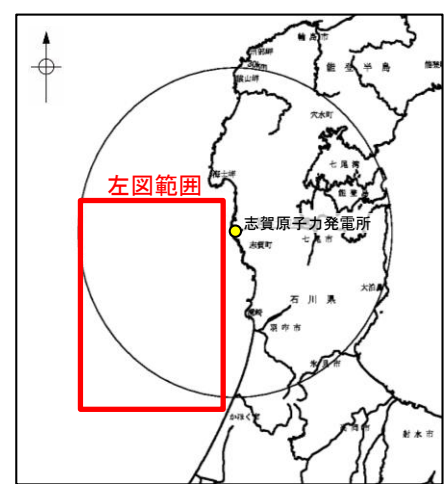
○補No.4(800)測線のさらに南方延長にあたるNo.14-1測線において、いずれの地層にも断層等を示唆するような変位、変形は認められない。



北陸電力スーパーカー
(No.14-1)

0 5 10km

位置図



左図範囲

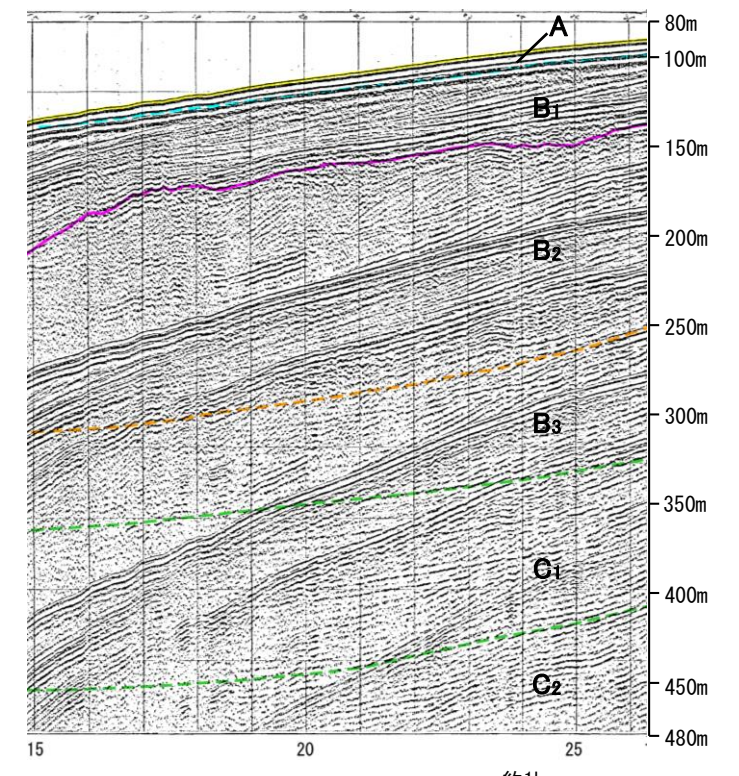
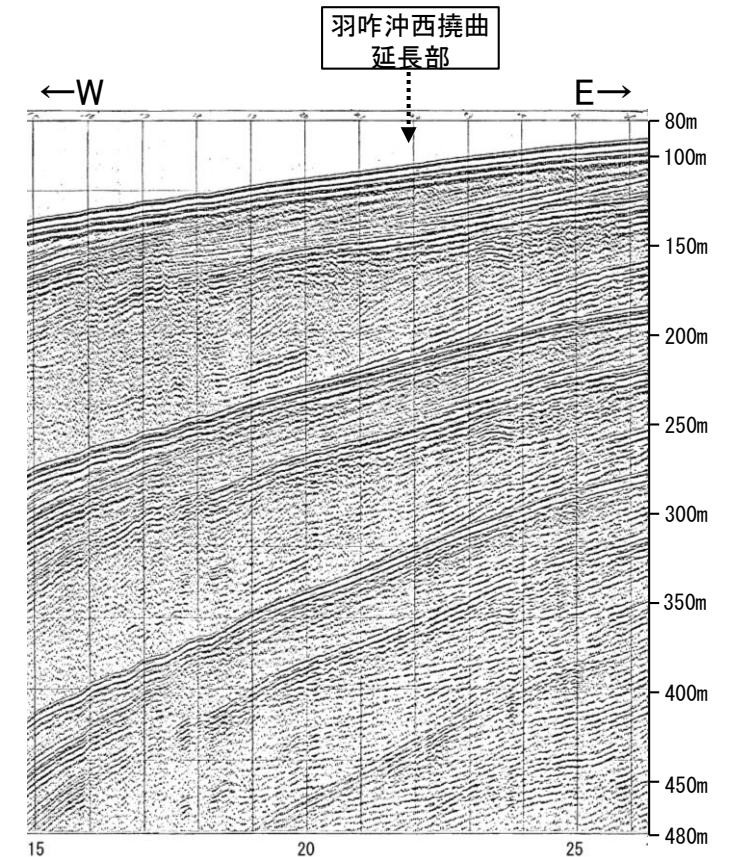
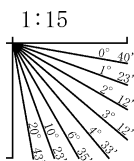
- 凡 例
- 対象断層: 撓曲, 背斜軸, 向斜軸
 - 対象外断層: 伏在断層, 撓曲, 連続性のない伏在断層
 - 小断層群密集域
 - 右図記録範囲

(測線位置における活動性)
 B層以上に変位、変形が認められる
 B層以上に変位、変形の可能性が否定できない

- No. 8 調査測線 (北陸電力: スーパーカー・シングルチャンネル・約2450ジュール)
- No. 9-S 調査測線 (北陸電力: スーパーカー・シングルチャンネル・約360ジュール)
- No. 8U No. 11B 調査測線 (北陸電力: プーマー・マルチチャンネル・約200ジュール)
- K17 調査測線 (東京大学地震研究所: プーマー・マルチチャンネル)
- L102 調査測線 (産業技術総合研究所: プーマー・マルチチャンネル)
- NI-06BM 調査測線 (原子力安全・保安院: プーマー・マルチチャンネル)
- NI-06MS 調査測線 (原子力安全・保安院: ウォーターガン・マルチチャンネル)
- N-118 調査測線 (地質調査所: エアガン・シングルチャンネル)
- 14 調査測線 (文部科学省研究開発局・国立大学法人東京大学地震研究所: エアガン・マルチチャンネル)
- H73-1 調査測線 (エアガン・マルチチャンネル)
- SJ1407 調査測線 (海洋研究開発機構: エアガン・マルチチャンネル)

枠囲みの内容は機密事項に
属しますので公開できません。

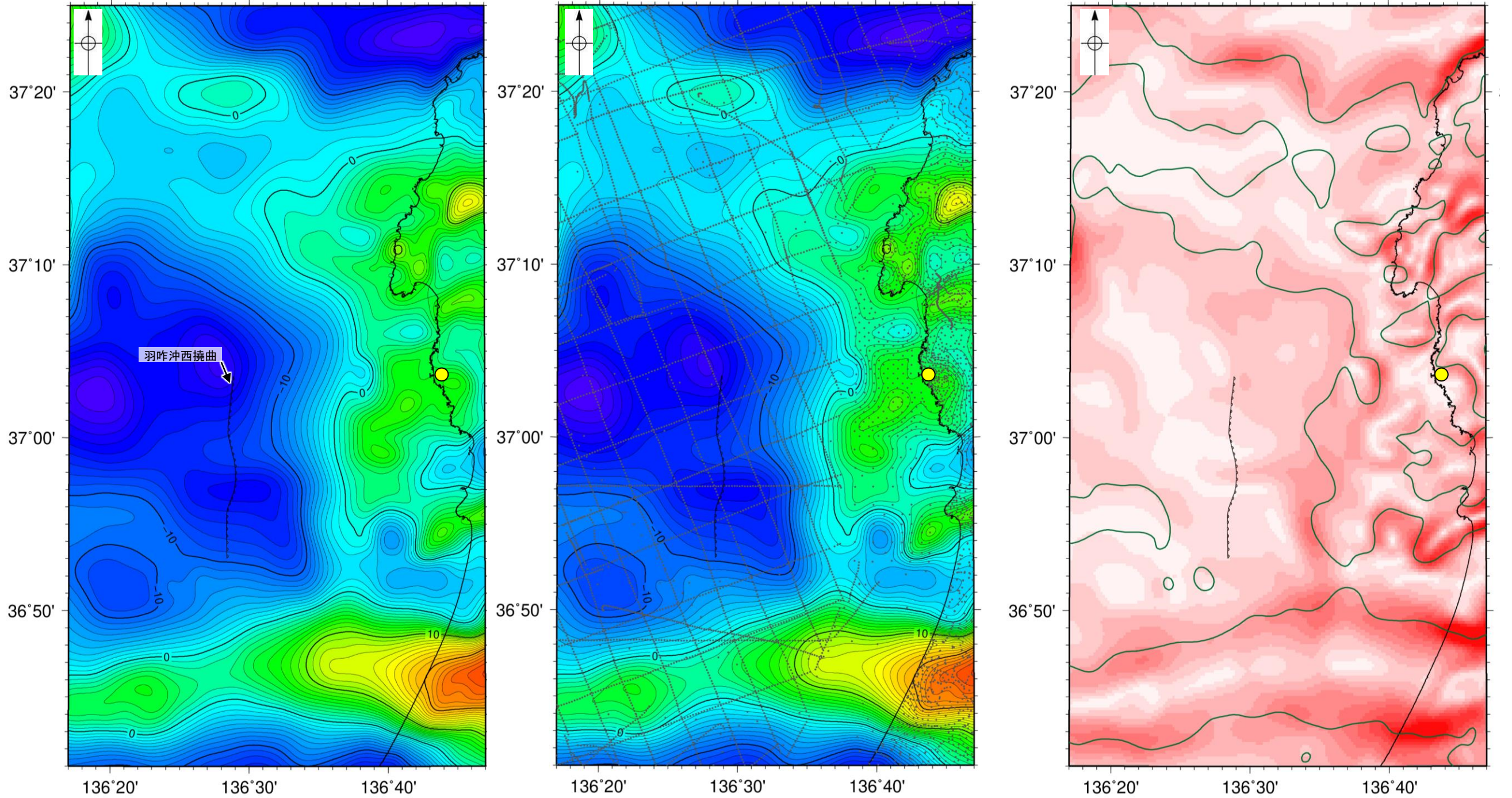
地質時代		地層名	
第四紀	完新世	A層	
	更新世	後期	B ₁ 層
		中期	B ₂ 層
		前期	B ₃ 層
	鮮新世	C層	C ₁ 層
		D層	C ₂ 層
古第三紀	D ₁ 層		
先第三紀	D ₂ 層		



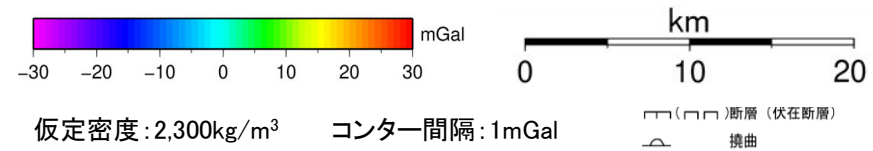
2.4.4 (5) 羽咋沖西撓曲周辺の重力異常

- 羽咋沖西撓曲の深部構造を確認するため、ブーゲー異常図、水平一次微分図を作成した。
- ブーゲー異常図及び水平一次微分図によれば、羽咋沖西撓曲に対応するN-S方向の重力異常急変部は認められない。

● 志賀原子力発電所

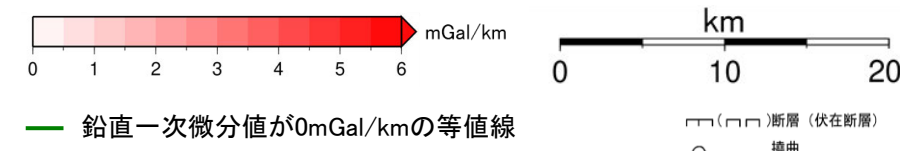


・上図は、陸域は本多ほか(2012), 国土地理院(2006), The Gravity Research Group in Southwest Japan (2001), Yamamoto et al. (2011), Hiramatsu et al. (2019), 澤田ほか(2021), 海域は産業技術総合研究所地質調査総合センター(2013), 石田ほか(2018)を用いて、金沢大学・当社が作成した。



ブーゲー異常図(左図:測定点なし, 右図:測定点あり)

・ブーゲー異常図は、対象とする断層の規模、調査密度を考慮し、平面トレンド成分の除去及び遮断波長4kmのローパスフィルター処理を行っている。

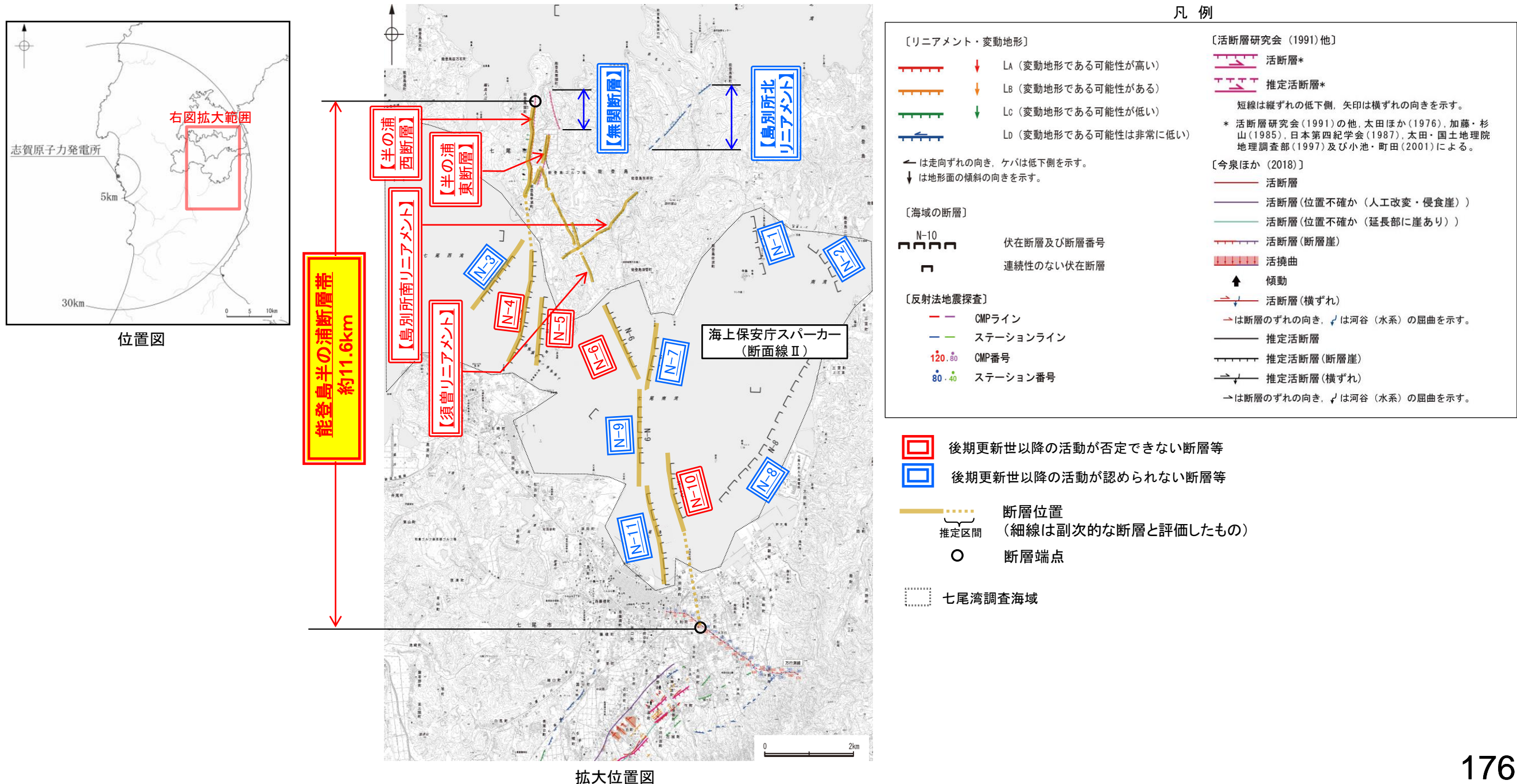


水平一次微分図

・水平一次微分図は、左のフィルター処理後のブーゲー異常図を基に作成した。

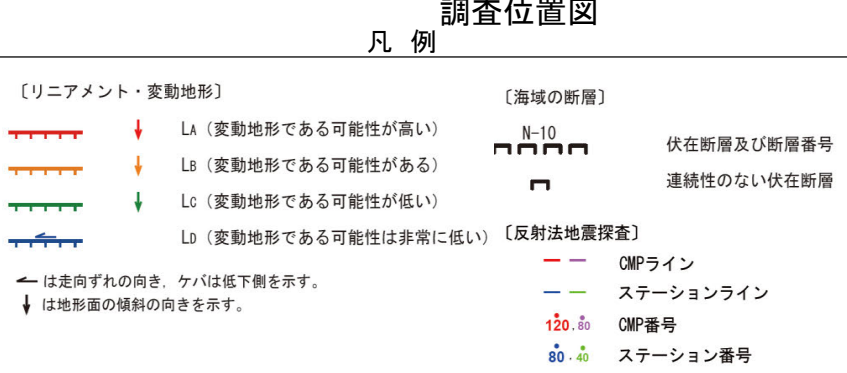
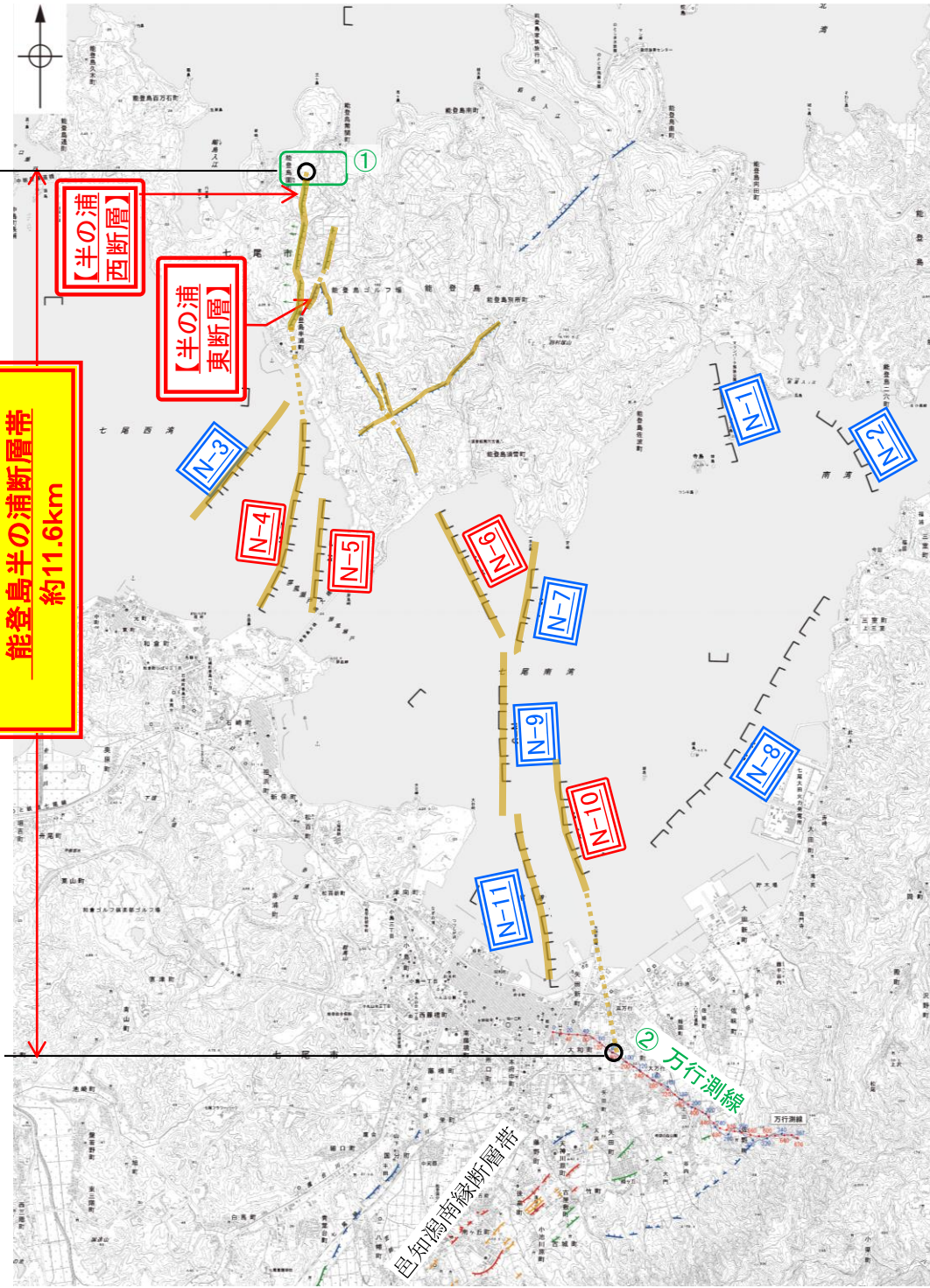
2.4.5 能登島半の浦断層帯・無関断層・島別所北リニアメント・ 七尾湾調査海域の断層

- 半の浦西断層, 半の浦東断層, 七尾湾調査海域の断層(N-1~N-11), 須曽リニアメント, 島別所北リニアメント, 島別所南リニアメント及び無関断層について, 評価を行った。
- 半の浦西断層及び半の浦東断層は, 後期更新世以降の活動が否定できないと評価した。
- 七尾湾調査海域の断層は, N-1~N-3, N-7~N-9及びN-11については後期更新世以降の活動は認められないものの, N-4~N-6及びN-10について後期更新世以降の活動が否定できないと評価した。
- 半の浦西断層及び半の浦東断層と, それらの南方延長の海域に分布し後期更新世以降の活動が否定できないN-4~N-6及びN-10と後期更新世以降の活動が認められないN-3, N-7, N-9及びN-11は, 走向及び落ちの方向が一致していることから, 安全側に判断し, 一連の構造(以下, 「能登島半の浦断層帯」)として, 約11.6km区間を後期更新世以降の活動が否定できないと評価した。
- 須曽リニアメントについては, 対応する断層が認められず, 島別所南リニアメントについては, その近傍で中新統がほぼ水平に分布し, また小尾根と小河川の屈曲については組織地形である可能性が高い。しかし, これらは能登島半の浦断層帯に近接し, さらに須曽リニアメントはN-6と同走向であることを踏まえ, 安全側に判断し, 能登島半の浦断層帯の断層活動に伴う副次的なものとして評価した。
- 無関断層及び島別所北リニアメントは, 後期更新世以降の活動が認められないと評価した。



2.4.5.1 能登島半の浦断層帯
(半の浦西断層, 半の浦東断層, 七尾湾調査海域の断層,
須曽リニアメント, 島別所南リニアメント)

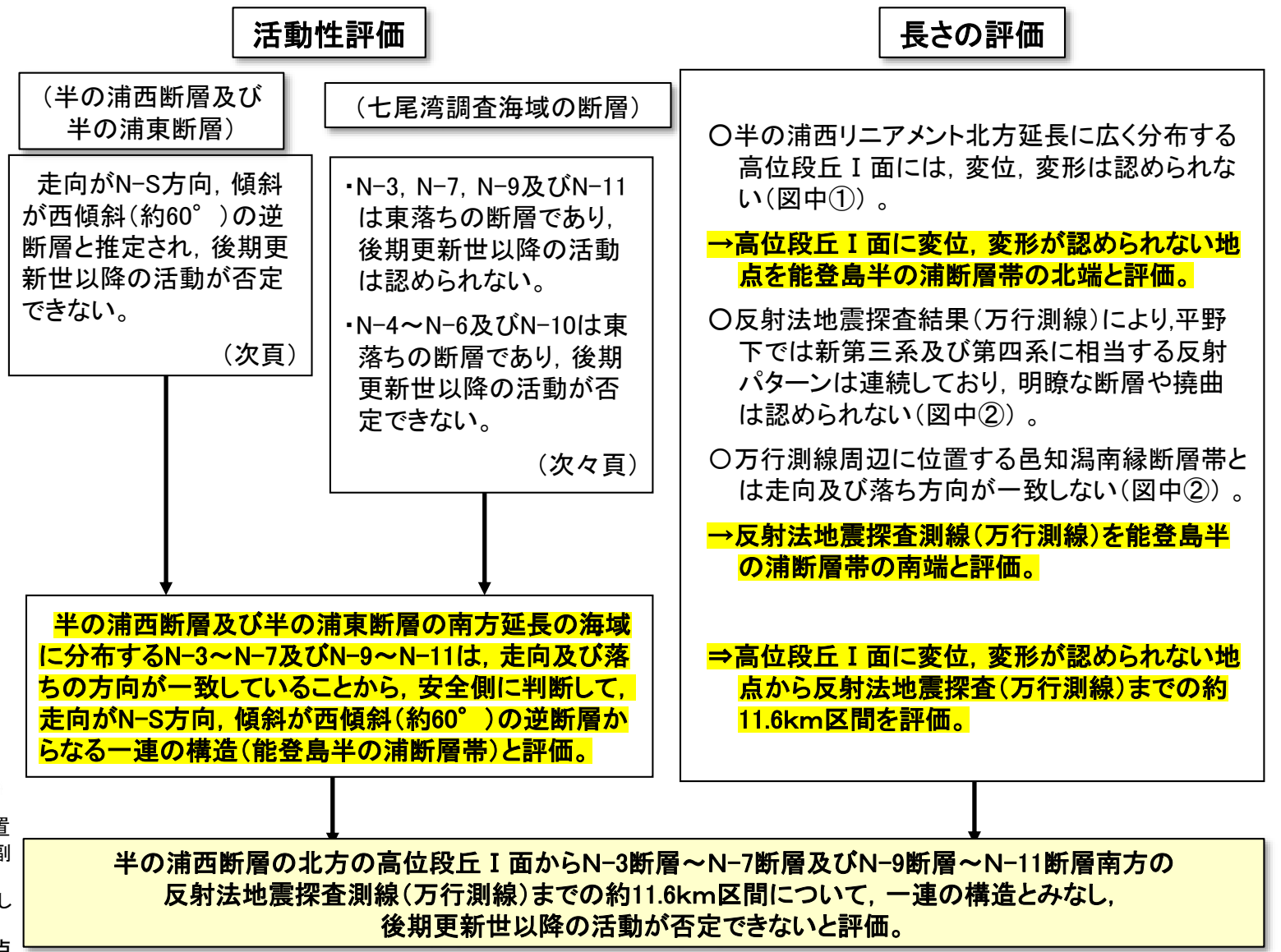
2.4.5.1 (1-1) 能登島半の浦断層帯の評価結果 ー半の浦西断層, 半の浦東断層, 七尾湾調査海域の断層ー



のとしまはん 浦
能登島半の浦断層帯に関する調査一覧表

内容	位置	目的	参照頁
① 段丘面調査	能登島半の浦断層帯北方	断層の連続性を確認	P.184, 185
② 反射法地震探査	能登島半の浦断層帯南方	断層の連続性を確認	P.212
③ 地表踏査	能登島半の浦断層帯周辺*	広域的な地質分布を確認	P.191
④ 海上音波探査	七尾湾調査海域	断層の有無を確認	P.202~210
⑤ 重力探査	能登島半の浦断層帯周辺*	断層の深部構造を確認	P.223

※:③, ⑤は断層周辺の全域で実施



・なお, 重力探査の結果, 半の浦西断層, 半の浦東断層及び七尾湾調査海域の断層に対応する重力異常急変部は認められない(P.223)

2.4.5.1 (1-2) 半の浦西断層及び半の浦東断層の評価結果

【文献調査】(P.183)

- 太田ほか(1976)は、半の浦西断層を図示し、長さ1.8km、西側の海成段丘H₃面が12m隆起、活動度C、西側傾斜の逆断層と記載している。また、半の浦東断層については、長さ1.4km、西側の海成段丘H₃面が8m隆起、活動度C、海成段丘堆積層の急傾斜露頭と安山岩溶岩を切る断層露頭(南北走向、60°で西傾斜)を記載している。
- 活断層研究会(1991)は、半の浦西断層(確実度I、東側低下)を図示し、N-S走向、長さ2km、活動度C、西側の海成段丘H₁面及びH₃面が12m隆起と記載している。また、半の浦東断層(確実度I、東側低下)を図示し、N-S走向、長さ1km、活動度C、西側の海成段丘H₂面が8m隆起と記載している。
- 今泉ほか(2018)は、半の浦西断層及び半の浦東断層とほぼ同じ位置に、推定活断層を図示している。

【空中写真判読】(P.184)

○文献が図示している半の浦西断層とほぼ同じ区間の約1.8km区間に、高位段丘Ⅲ面分布域の逆向き崖や高位段丘Ⅲ面の西側への増傾斜からなるCランクのリニアメント・変動地形(半の浦西リニアメント)を判読した。また、文献が図示している半の浦東断層とほぼ同じ区間の約1.1km区間に、高位段丘Ⅲ面分布域での逆向きの低崖及び直線状の谷からなるCランク及びDランクのリニアメント・変動地形(半の浦東リニアメント)を判読した。

活動性評価(半の浦西断層及び半の浦東断層)

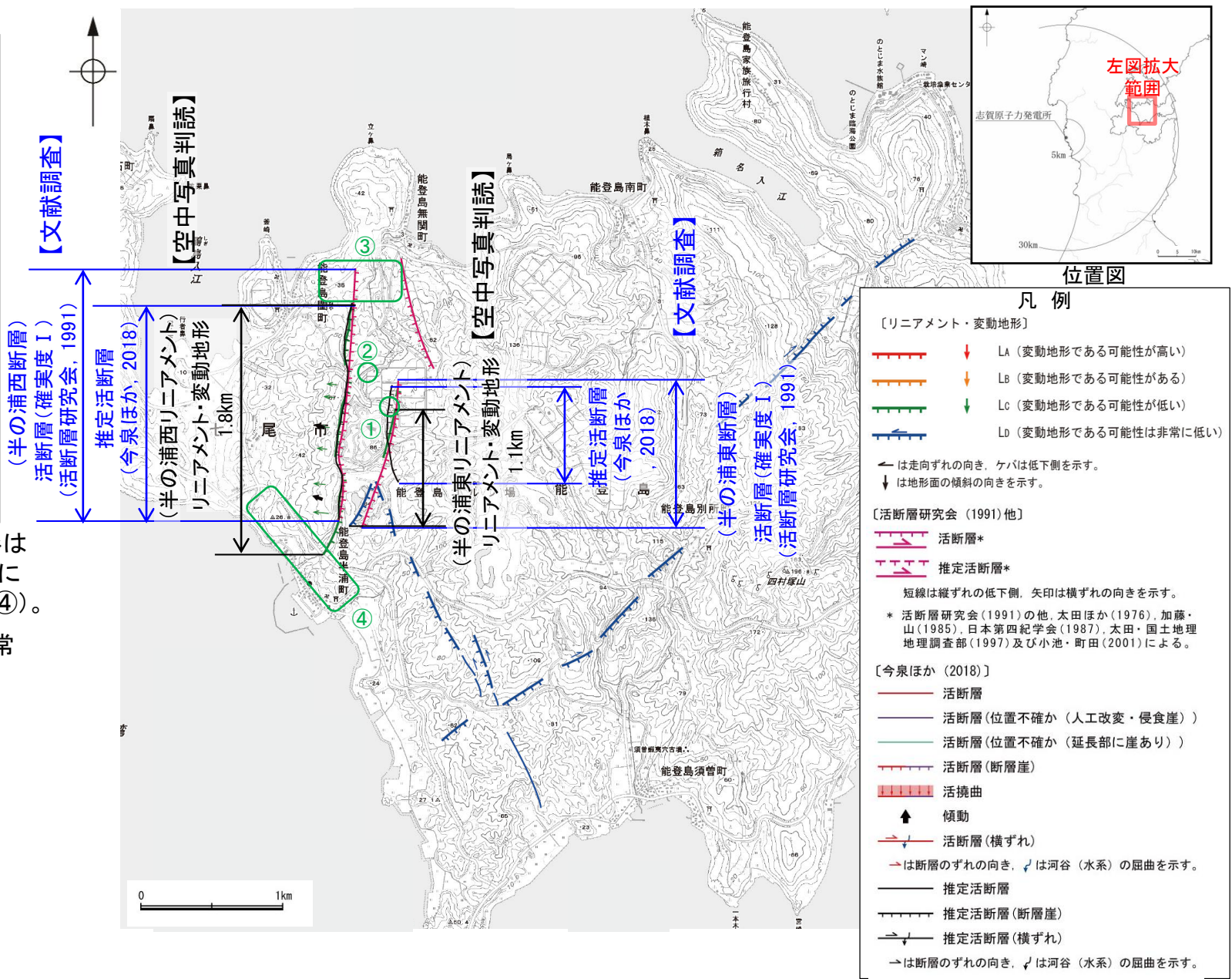
- 高位段丘Ⅲ面分布域の逆向き崖や高位段丘Ⅲ面の西側への増傾斜からなるリニアメント・変動地形が判読され、変動地形の可能性はある。
 - 太田ほか(1976)は半の浦東断層について安山岩溶岩を切る断層露頭(南北走向、60°で西傾斜)を記載している(図中①)。
 - 半の浦西リニアメント東方では、高位段丘Ⅱ面堆積層に変位を与える断層露頭が確認され、半の浦西リニアメントと関連する構造の可能性はある(図中②)。
- ⇒文献調査及び空中写真判読の結果、半の浦西断層及び半の浦東断層は、走向がN-S方向、傾斜が西傾斜(約60°)の逆断層と推定され、後期更新世以降の活動が否定できないと評価。

- ・半の浦西リニアメント北方延長に広く分布する高位段丘Ⅰ面には、変位、変形は認められず(図中③)、南方延長に分布する高位段丘Ⅰ面及び中位段丘Ⅰ面には、半の浦西リニアメントの延長位置を挟んで、高度差が認められない(図中④)。
- ・なお、重力探査の結果、半の浦西断層及び半の浦東断層に対応する重力異常急変部は認められない(P.223)。

半の浦西・半の浦東断層に関する調査一覧表

内容	位置	目的	参照頁
① 文献調査	はん うらひがし 半の浦東断層	断層の活動性評価	P.183
② 地表踏査	はん うらにし 半の浦西リニアメント東方	断層の活動性評価	P.192
③ 段丘面調査	はん うらにし 半の浦西リニアメント北方	断層の連続性を確認	P.184~185
④ 段丘面調査	はん うらにし 半の浦西リニアメント南方	断層の連続性を確認	P.184~185
⑤ 地表踏査	はん うらにし はん うらひがし 半の浦西・半の浦東断層周辺*	広域的な地質分布を確認	P.191
⑥ 重力探査	はん うらにし はん うらひがし 半の浦西・半の浦東断層周辺*	断層の深部構造を確認	P.223

※:⑤~⑥は断層周辺の全域で実施



2.4.5.1 (1-3) 七尾湾調査海域の断層の評価結果

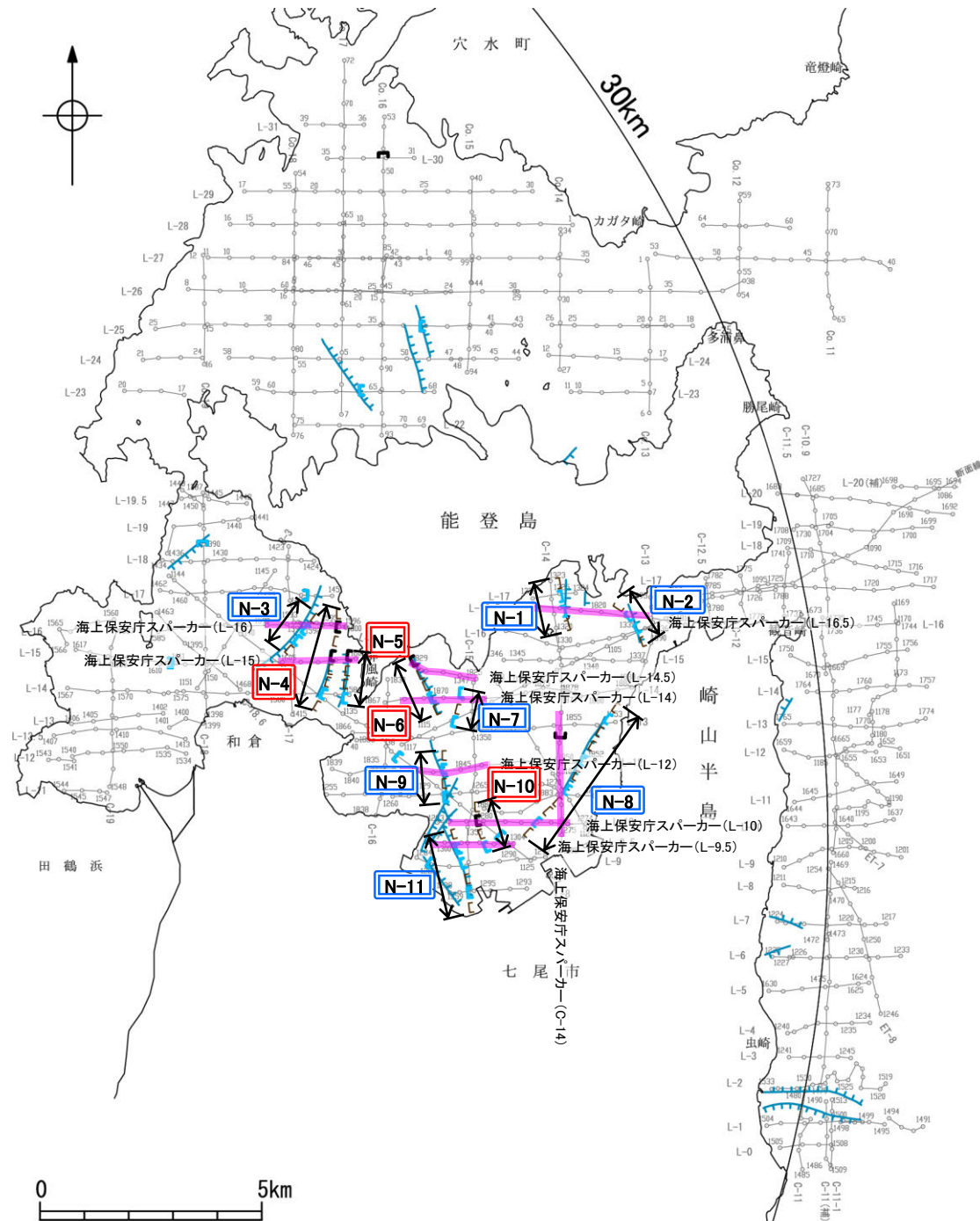
【文献調査】(P.200)

- 海上保安庁水路部(1982)は、七尾湾調査海域に24条の断層を図示しており、大部分を伏在断層としている。
- 岡村(2002)は、七尾湾調査海域に断層を図示していない。
- 国交省ほか(2014)は、七尾湾調査海域に断層トレースを記載していない。
- 文科省ほか(2015)は、七尾湾調査海域に震源断層モデルを設定していない。

活動性評価(七尾湾調査海域の断層)

- 海上音波探査の結果、主に東落ちの長さ5km以内の断層が11条(N-1~N-11)推定され、いずれもD層内に伏在している。
- N-1~N-3, N-7~N-9及びN-11はB層以上に変位、変形が認められないと判断したが、N-4~N-6及びN-10の一部では、後期更新世以降の活動の判定が可能な上載層が分布しないことから、B層以上に変位、変形の可能性が否定できないと判断した(P.202~210)。
 - ⇒文献調査及び海上音波探査の結果、N-1~N-3, N-7~N-9及びN-11は、後期更新世以降の活動は認められないと評価。
 - ⇒N-4~N-6及びN-10は、後期更新世以降の活動が否定できないと評価。

・なお、重力探査の結果、七尾湾調査海域の断層(N-1~N-11)に対応する重力異常急変部は認められない(P.223)。



位置図

七尾湾調査海域の断層の位置図

※: 以外の七尾湾調査海域の断層を確認した音波探査記録はデータ集2

2.4.5.1 (2) 能登島半の浦断層帯の評価結果 — 須曽リニアメント及び島別所南リニアメント —

【空中写真判読】(P.184)

○文献が図示している半の浦西断層及び半の浦東断層付近より南東方の約2.6km区間において、丘陵斜面における西側低下の崖、鞍部及び直線状の谷からなり、一部、小尾根と小河川にわずかな左方向への屈曲を伴うDランクのリニアメント・変動地形(須曽リニアメント)を判読した。また、さらにその東方の約2.2km区間に小起伏面における南側低下の崖、丘陵斜面における直線状の谷、鞍部からなり、一部、小尾根と小河川にわずかな右方向への屈曲を伴うDランクのリニアメント・変動地形(島別所南リニアメント)を判読した。

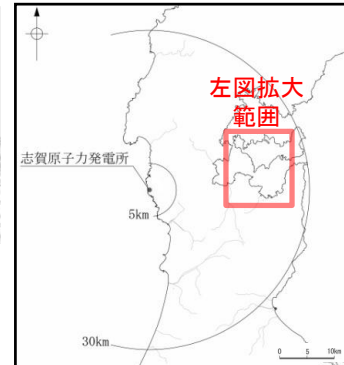
【文献調査】(P.183)

○活断層研究会(1991)及び今泉ほか(2018)は、須曽リニアメント及び島別所南リニアメントの位置に活断層等を図示していない。

すそしまべつしよみなみ
須曽・島別所南リニアメントに関する調査一覧表

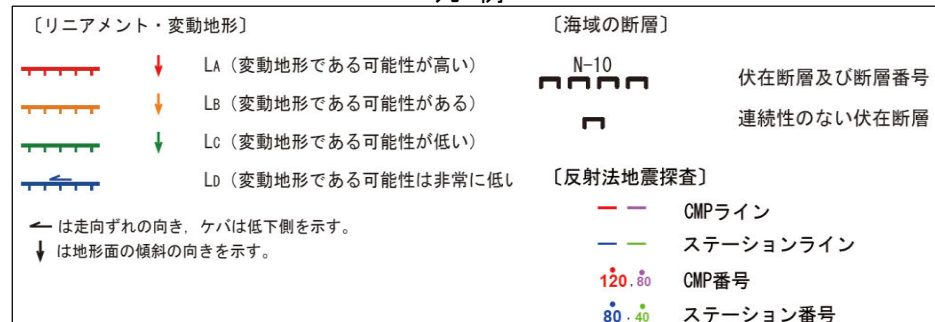
内容	位置	目的	参照頁
① 露頭調査	須曽リニアメント周辺	断層の活動性評価	P.193～196
② 露頭調査	島別所南リニアメント周辺	断層の活動性評価	P.197
③ 露頭調査	島別所南リニアメント周辺	断層の活動性評価	P.198
④ 地表踏査	須曽・島別所南リニアメント周辺*	広域的な地質分布を確認	P.187
⑤ 重力探査	須曽・島別所南リニアメント周辺*	断層の深部構造を確認	P.223

※:④, ⑤は断層周辺の全域で実施



位置図

凡例



活動性評価(須曽リニアメント)

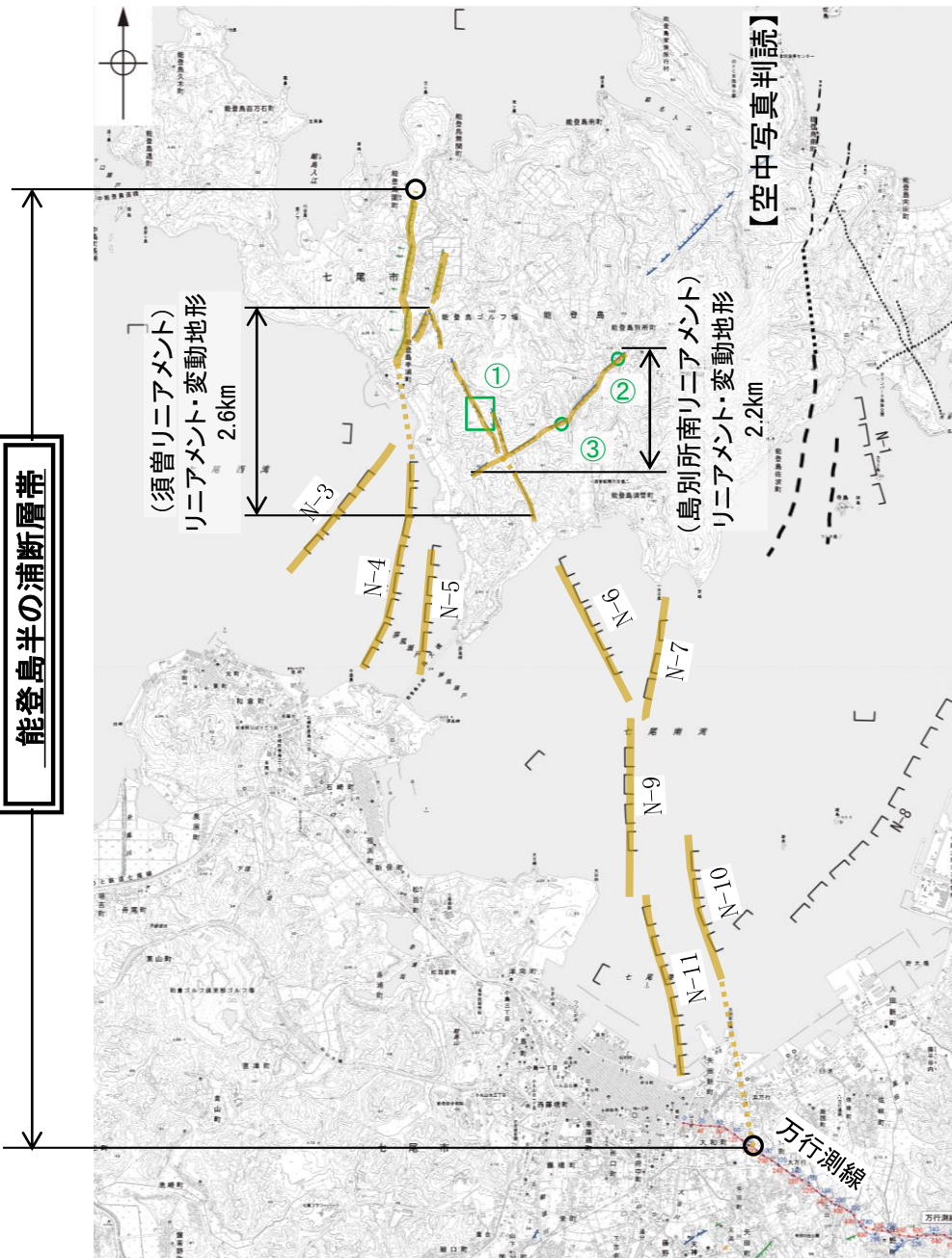
○須曽リニアメントを横断して中新世の別所岳安山岩類が連続して分布し、そこに断層は認められない(図中①)。

活動性評価(島別所南リニアメント)

○島別所南リニアメントの近傍では、中新世の和倉珪藻泥岩層がほぼ水平に分布している(図中②)。
○リニアメント・変動地形沿いの小河川の屈曲については、別所岳安山岩類中の岩質の差を反映したものであり、組織地形である可能性が大きい(図中③)。

・須曽リニアメントは、リニアメント・変動地形として判読した西側低下の崖等を横断して別所岳安山岩類が連続して分布し、そこに断層は認められない。
・また、島別所南リニアメントは、リニアメント・変動地形として判読した低崖の近傍では中新世の和倉珪藻泥岩がほぼ水平に分布し、また小尾根と小河川の屈曲については別所岳安山岩類中の岩質の差を反映した組織地形である可能性が大きい。
・しかし、これらは能登島半の浦断層帯に近接し、さらに須曽リニアメントはN-6と同走向であることを踏まえ、安全側に判断し、能登島半の浦断層帯の断層活動に伴う副次的なものとして評価した。

・なお、重力探査の結果、島別所南リニアメント、須曽リニアメントに対応する重力異常急変部は認められない(P.223)。



調査位置図



断層位置
(細線は副次的な断層と評価したもの)
断層端点

2.4.5.1.1 半の浦西断層・半の浦東断層・須曽リニアメント・ 島別所南リニアメント

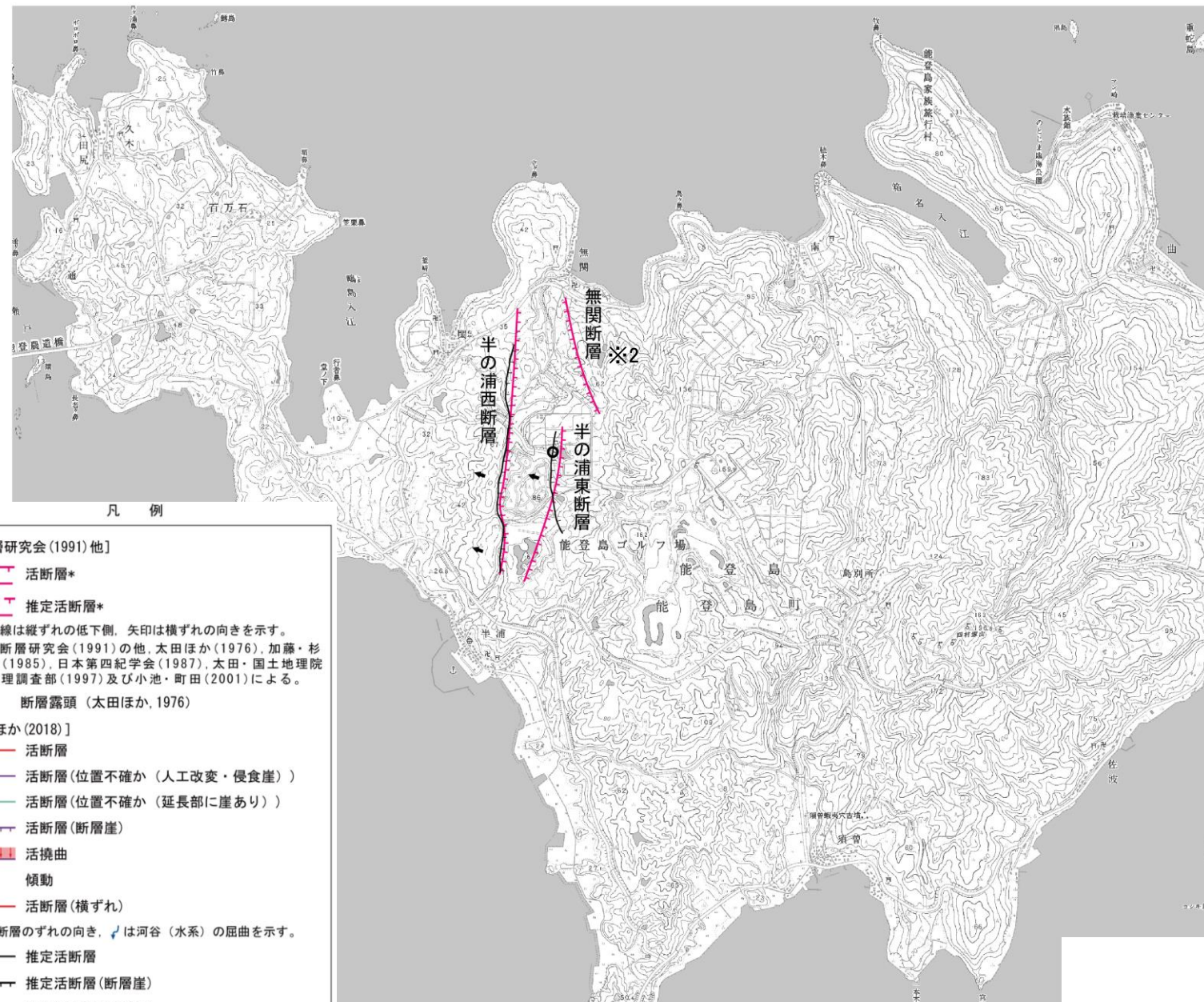
2.4.5.1.1 (1) 半の浦西断層・半の浦東断層・須曽リニアメント・島別所南リニアメントの文献調査

- 太田ほか(1976)は、半の浦西断層を図示し、長さ1.8km、西側の海成段丘H₃面※1が12m隆起、活動度C、西側傾斜の逆断層と記載している。また、半の浦東断層については、長さ1.4km、西側の海成段丘H₃面※1が8m隆起、活動度C、海成段丘堆積層の急傾斜露頭と安山岩溶岩を切る断層露頭(南北走向、60°で西傾斜、下図に露頭位置を図示)を記載している。
- 「新編 日本の活断層」(活断層研究会, 1991)は、敷地から約21km北東に、半の浦西断層(確実度 I, 東側低下)を図示し、N-S走向、長さ2km、活動度C、西側の海成段丘H₁面及びH₃面※1が12m隆起と記載している。また、半の浦東断層(確実度 I, 東側低下)を図示し、N-S走向、長さ1km、活動度C、西側の海成段丘H₂面※1が8m隆起と記載している。
- 「活断層詳細デジタルマップ[新編]」(今泉ほか, 2018)は、半の浦西断層及び半の浦東断層とほぼ同じ位置に推定活断層を図示している。
- その他、加藤・杉山(1985)は、半の浦西断層及び半の浦東断層とほぼ同じ位置に、主として第四紀後期に活動した活断層を図示し、東側落下、平均変位速度1m/10³年未満としている。日本第四紀学会(1987)は、半の浦西断層とほぼ同じ位置に第四紀後期に活動した活断層を図示し、南東側落下としている。太田・国土地理院地理調査部(1997)は、半の浦西断層及び半の浦東断層とほぼ同じ位置に活断層を図示している。小池・町田(2001)は、半の浦西断層及び半の浦東断層とほぼ同じ位置に東側落下の活断層を図示している。
- 「活断層データベース」(産業技術総合研究所地質調査総合センター)は、半の浦西断層、半の浦東断層、須曽リニアメント及び島別所南リニアメントを起震断層・活動セグメントとして示していない。

※1 太田ほか(1976)ではM₁面を下末吉面(最終間氷期)に対比して12万年前、H₃面をM₁面のもう一つ前の間氷期として22万年前、H₁面、H₂面、T₁面などのそれより古い面は>22万年前としている。



位置図



※2 無関断層の詳細は「2.4.5.2 無関断層・島別所北リニアメント」

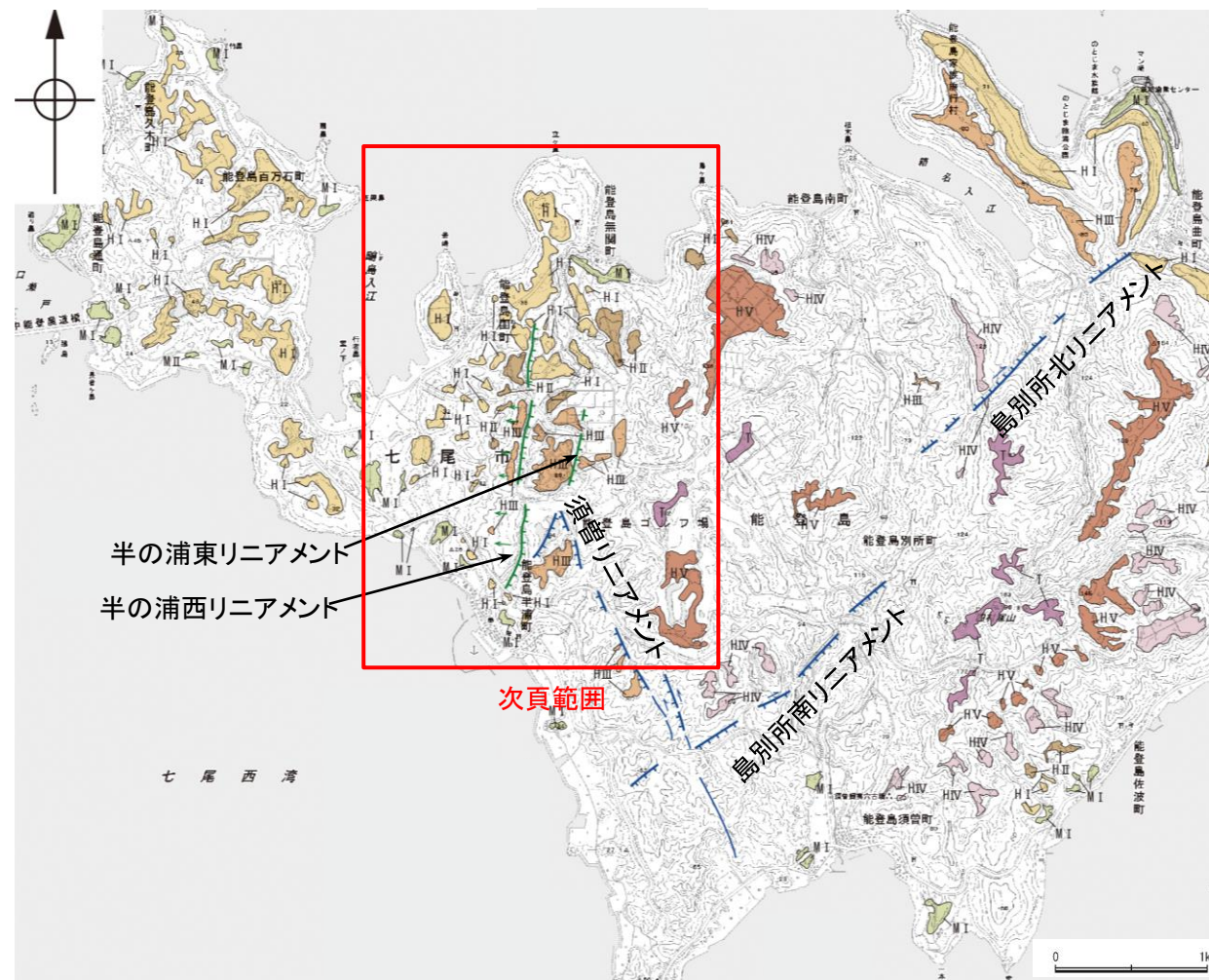
位置図

2.4.5.1.1 (2) 半の浦西断層・半の浦東断層・須曽リニアメント・島別所南リニアメントの地形調査

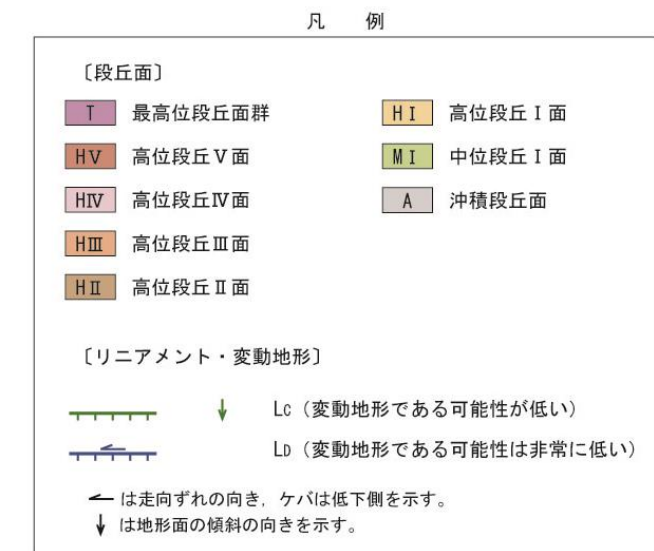
- 半の浦西リニアメント及び半の浦東リニアメントは約1.8km区間にほぼ平行して判読され、半の浦西リニアメントは高位段丘Ⅲ面分布域の逆向き崖や高位段丘Ⅲ面の西側への増傾斜からなるCランクのリニアメント・変動地形であり、半の浦西断層にほぼ対応する(次頁, 次々頁)。ただし、半の浦西リニアメント北方延長に広く分布する高位段丘Ⅰ面には変位・変形が認められず、南方延長に分布する高位段丘Ⅰ面及び中位段丘Ⅰ面には、半の浦西リニアメントの延長位置を挟んでそれぞれに高度差が認められない(次頁)。
- 半の浦東リニアメントは、高位段丘Ⅲ面分布域での逆向きの低崖及び直線状の谷からなるCランク及びDランクのリニアメント・変動地形であり、半の浦東断層にほぼ対応する(次頁, 次々頁)。
- 以上より、半の浦西リニアメント及び半の浦東リニアメントについて、後期更新世以降の活動の可能性があるものと評価する。
- 須曽リニアメントは約2.6km区間に判読され、これは丘陵斜面において西側低下の崖、鞍部及び直線状の谷からなり、一部、小尾根と小河川にわずかな左方向への屈曲を伴うDランクのリニアメント・変動地形である(P.187, 188, 190)。
- 島別所南リニアメントは約2.2km区間に判読され、これは小起伏面において南側低下の崖、丘陵斜面において直線状の谷、鞍部からなり、一部、小尾根と小河川にわずかな右方向への屈曲を伴うDランクのリニアメント・変動地形である(P.187, 189, 190)。



位置図

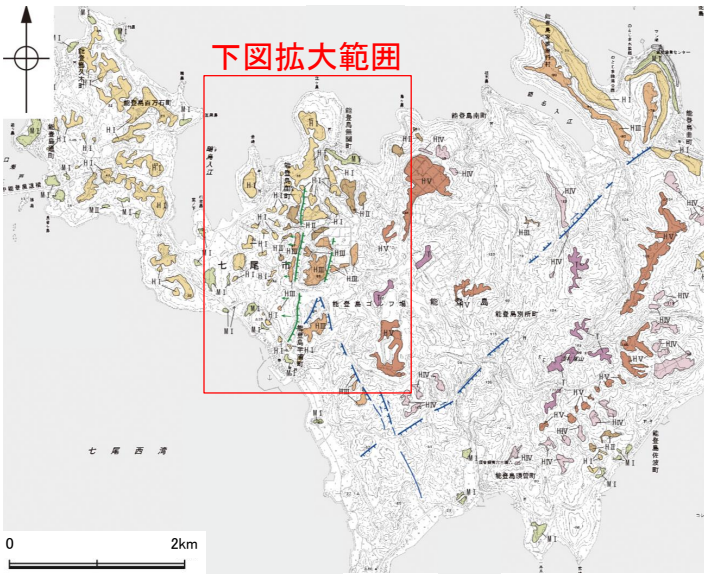


リニアメント・変動地形分布図

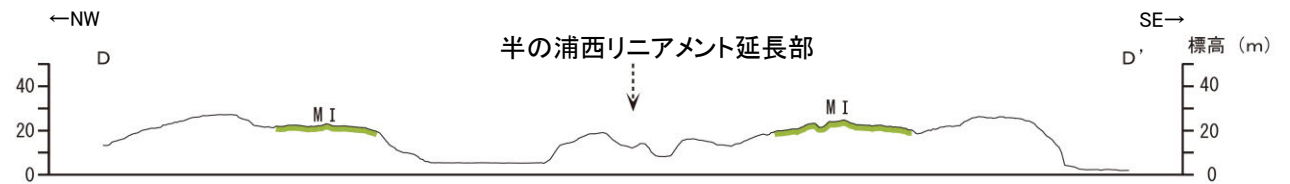
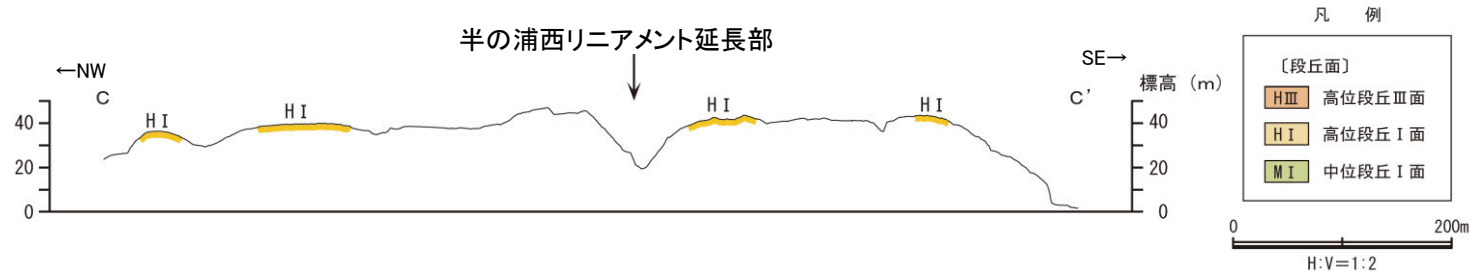
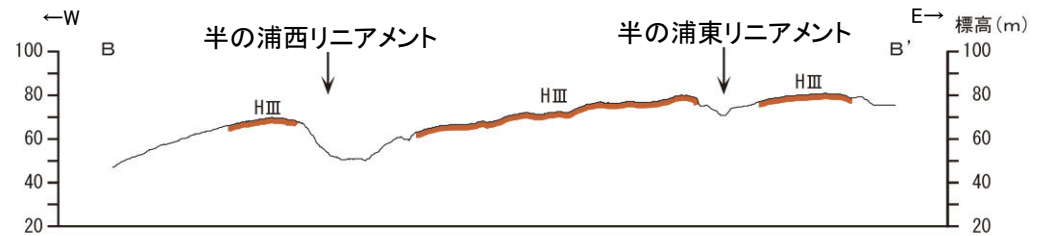
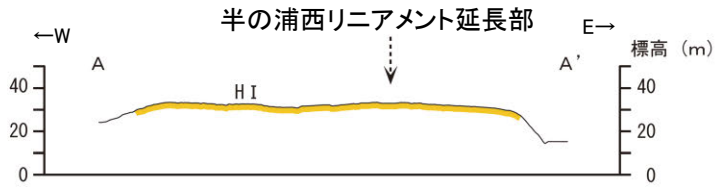
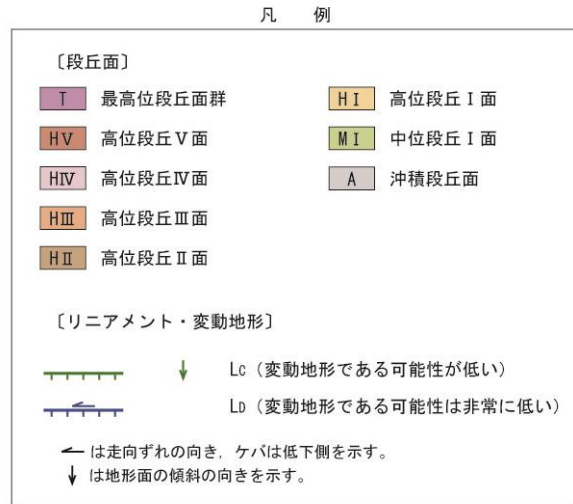


半の浦西リニアメント
半の浦東リニアメント

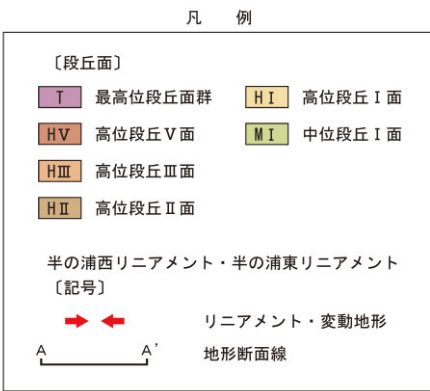
【半の浦西リニアメント・半の浦東リニアメント周辺の赤色立体地図，地形断面図】



位置図



地形断面図
(航空レーザー計測データにより作成)



この図は、航空レーザー計測データから作成した赤色立体地図（等高線は1m間隔）を使用したものである。

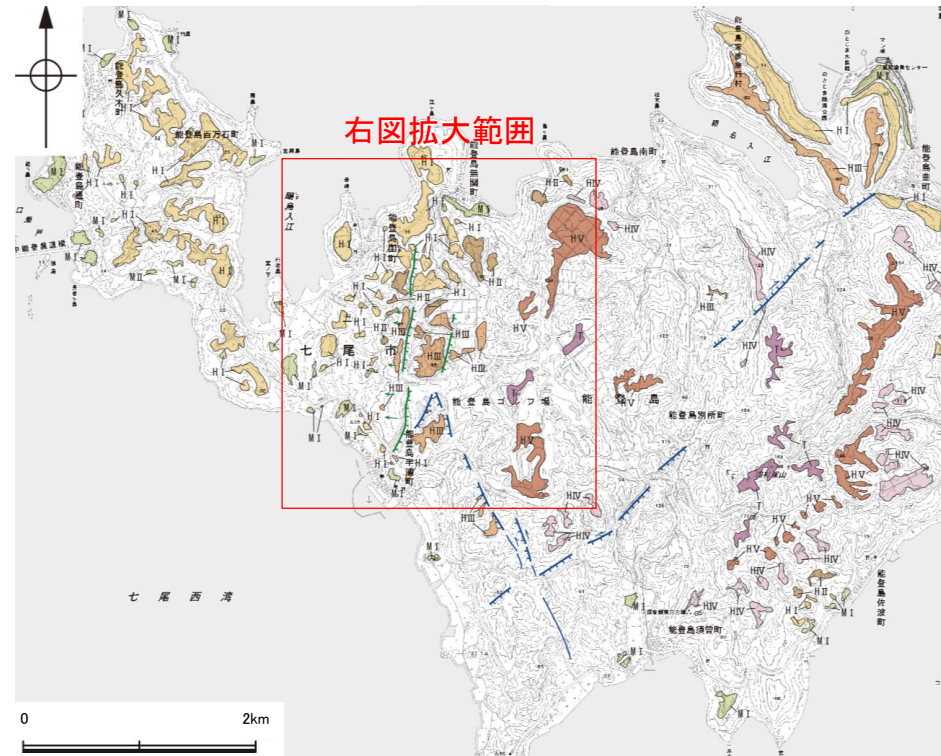


赤色立体地図(航空レーザー計測データにより作成)

半の浦西リニアメント
半の浦東リニアメント

【半の浦西リニアメント・半の浦東リニアメント周辺の地形の特徴】

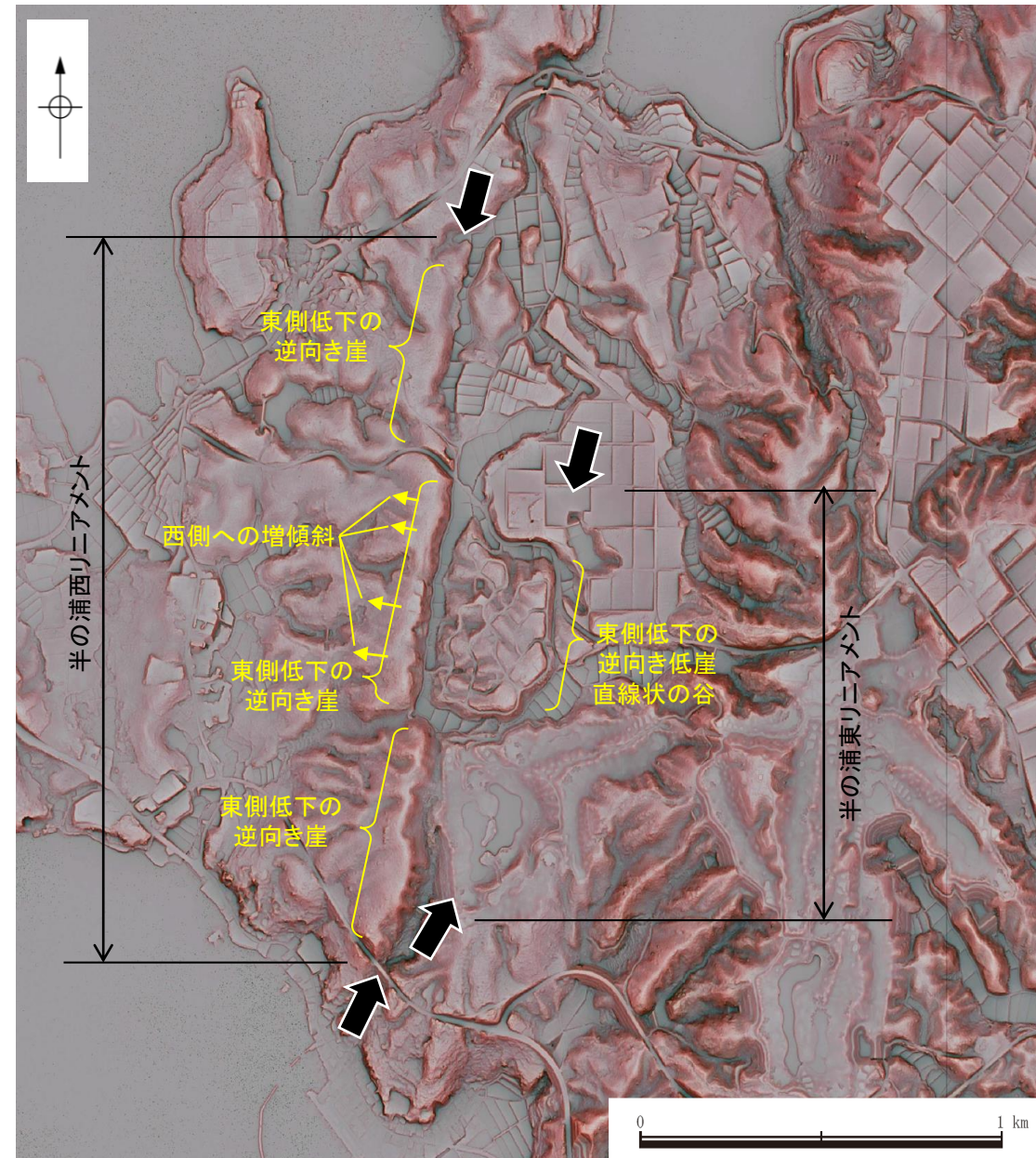
- 半の浦西リニアメント周辺の地形について、空中写真判読及び航空レーザ計測データによれば、逆向き崖や西側への増傾斜が認められる。
- 半の浦東リニアメント周辺の地形について、空中写真判読及び航空レーザ計測データによれば、逆向きの低崖及び直線状の谷が認められる。



位置図

凡 例

〔段丘面〕	
最高位段丘面群	高位段丘 I 面
高位段丘 V 面	中位段丘 I 面
高位段丘 IV 面	沖積段丘面
高位段丘 III 面	
高位段丘 II 面	
〔リニアメント・変動地形〕	
Lc (変動地形である可能性が低い)	
Ld (変動地形である可能性は非常に低い)	
← は走向ずれの向き、ケバは低下側を示す。	
↓ は地形面の傾斜の向きを示す。	



リニアメント・変動地形の地形要素

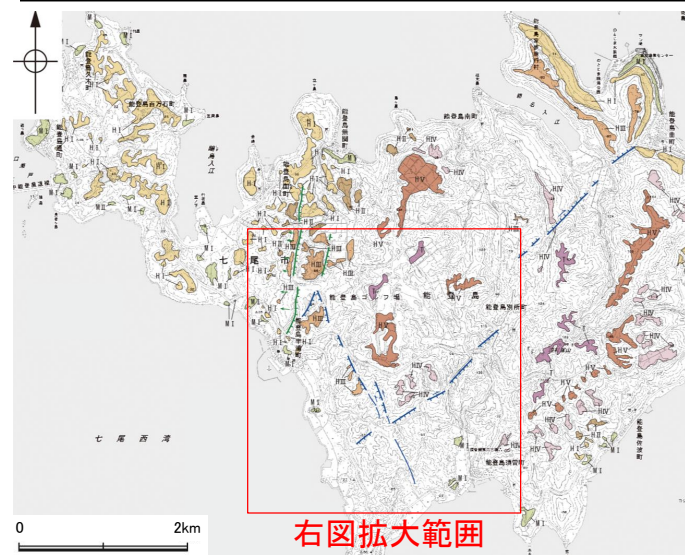
➡ ← リニアメント・変動地形

島別所南リアメント
須曽リアメント

【島別所南リアメント・須曽リアメント周辺の赤色立体地図】

○須曽リアメントは約2.6km区間に判読され、これは丘陵斜面において西側低下の崖、鞍部及び直線状の谷からなり、一部、小尾根と小河川にわずかな左方向への屈曲を伴うDランクのリアメント・変動地形である(本頁, 次頁, P.190)。

○島別所南リアメントは約2.2km区間に判読され、これは小起伏面において南側低下の崖、丘陵斜面において直線状の谷、鞍部からなり、一部、小尾根と小河川にわずかな右方向への屈曲を伴うDランクのリアメント・変動地形である(本頁, 次々頁, P.190)。

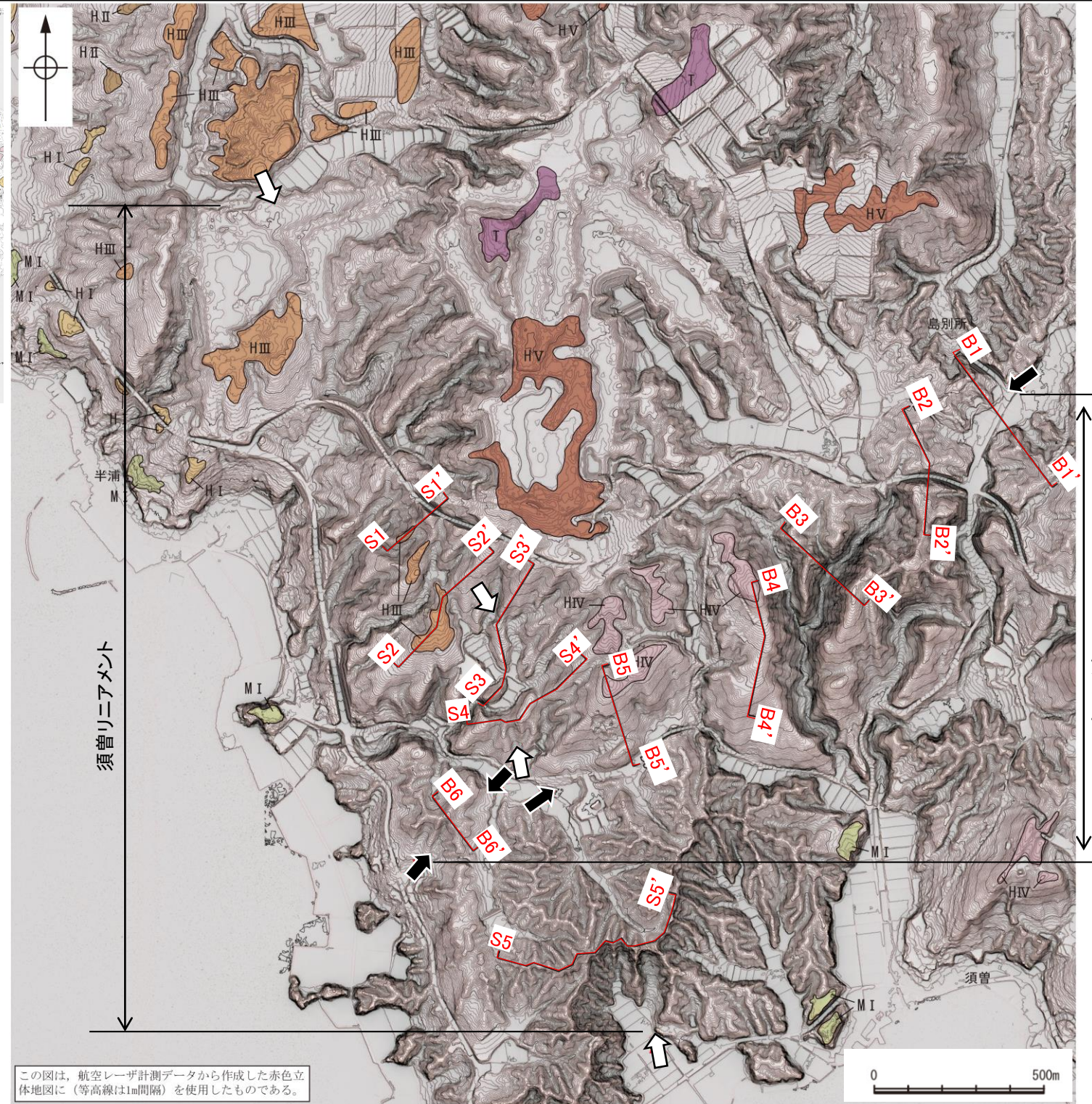


位置図

凡例

- 〔段丘面〕
- T 最高位段丘面群
 - HV 高位段丘V面
 - HIV 高位段丘IV面
 - HIII 高位段丘III面
 - HII 高位段丘II面
 - HI 高位段丘I面
 - MI 中位段丘I面
 - A 沖積段丘面

- 〔リアメント・変動地形〕
- ↓ Lc (変動地形である可能性が低い)
 - ↓ Ld (変動地形である可能性は非常に低い)
 - ← は走向ずれの向き, ケバは低下側を示す。
 - ↓ は地形面の傾斜の向きを示す。



島別所南リアメント

須曽リアメント

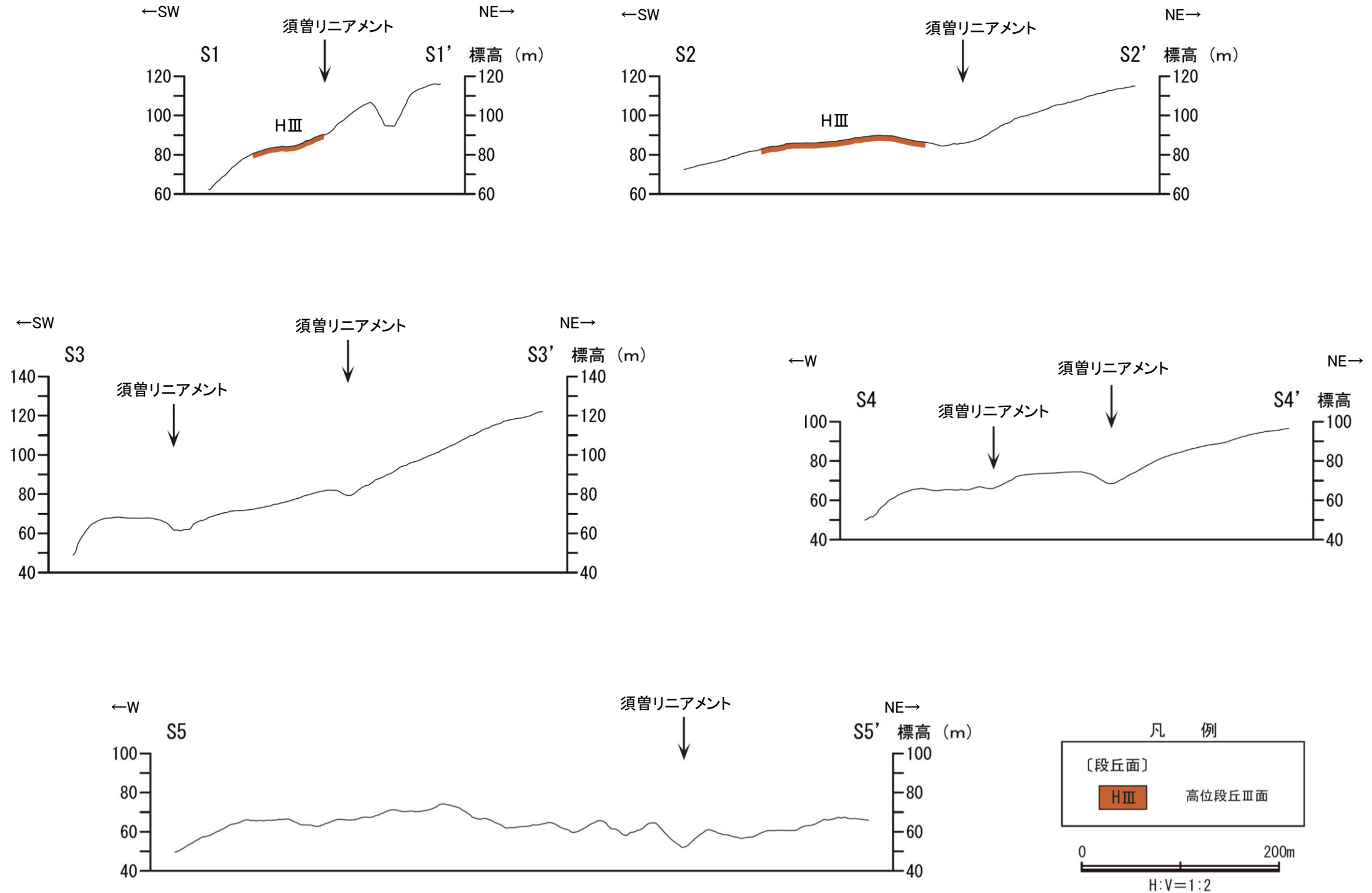
- 凡例
- 〔段丘面〕
- T 最高位段丘面群
 - HV 高位段丘V面
 - HIV 高位段丘IV面
 - HIII 高位段丘III面
 - HII 高位段丘II面
 - HI 高位段丘I面
 - MI 中位段丘I面
 - A 沖積段丘面
- 〔記号〕
- ← 島別所南リアメント
 - ⇨ ⇩ 須曽リアメント
 - A A' 地形断面線

この図は、航空レーザ計測データから作成した赤色立体地図に(等高線は1m間隔)を使用したものである。



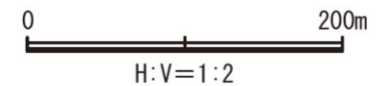
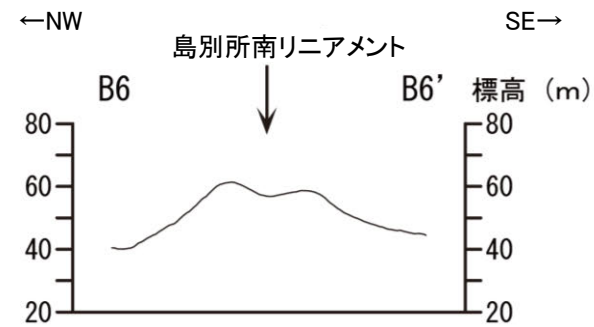
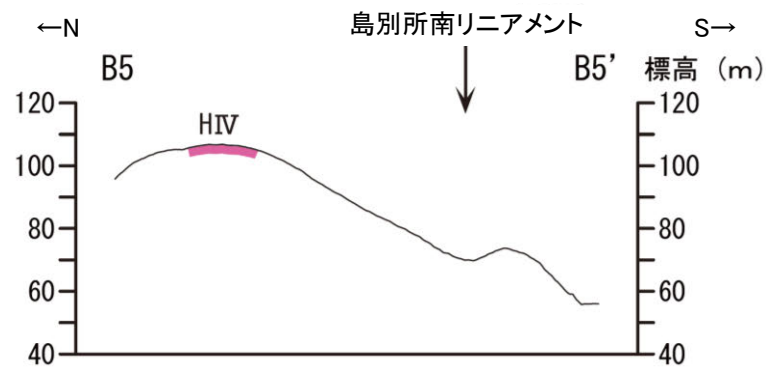
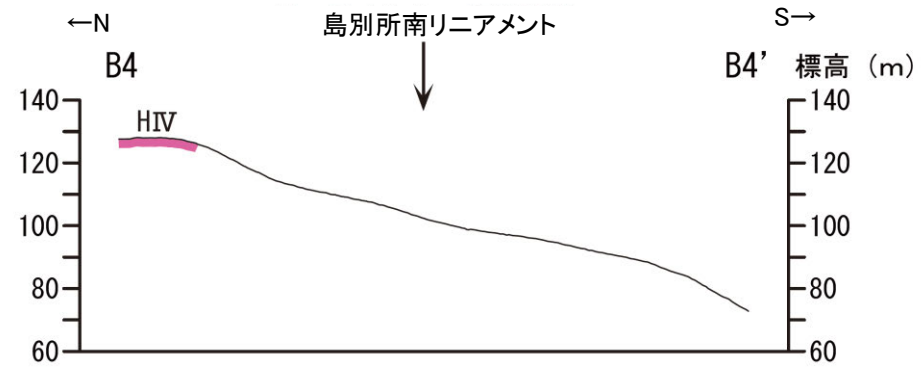
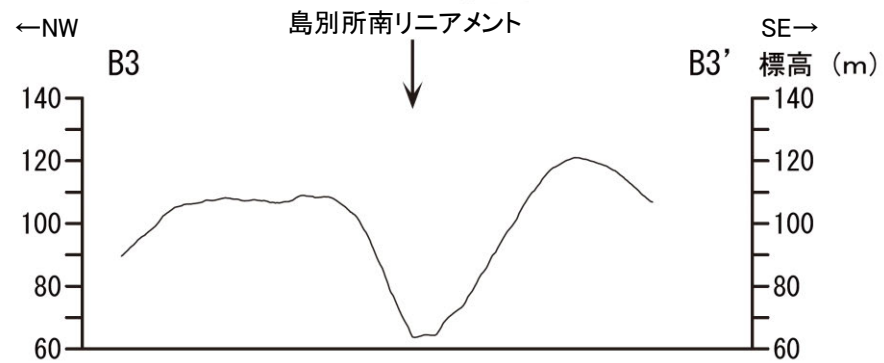
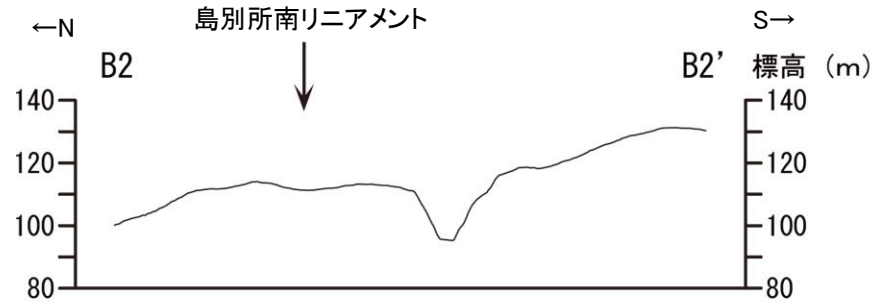
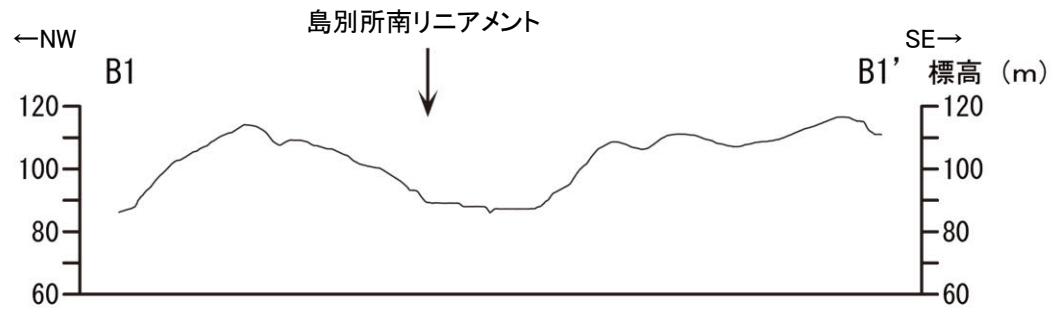
赤色立体地図(航空レーザ計測データにより作成)

【須曽リニアメント周辺の地形断面図】



地形断面図(航空レーザ計測データにより作成)

【島別所南リニアメント周辺の地形断面図】

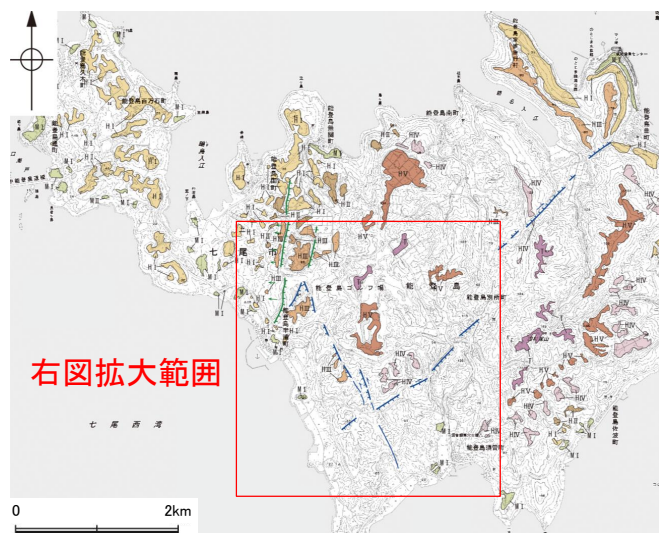


地形断面図(航空レーザ計測データにより作成)

島別所南リニアメント
須曽リニアメント

【島別所南リニアメント・須曽リニアメント周辺の地形の特徴】

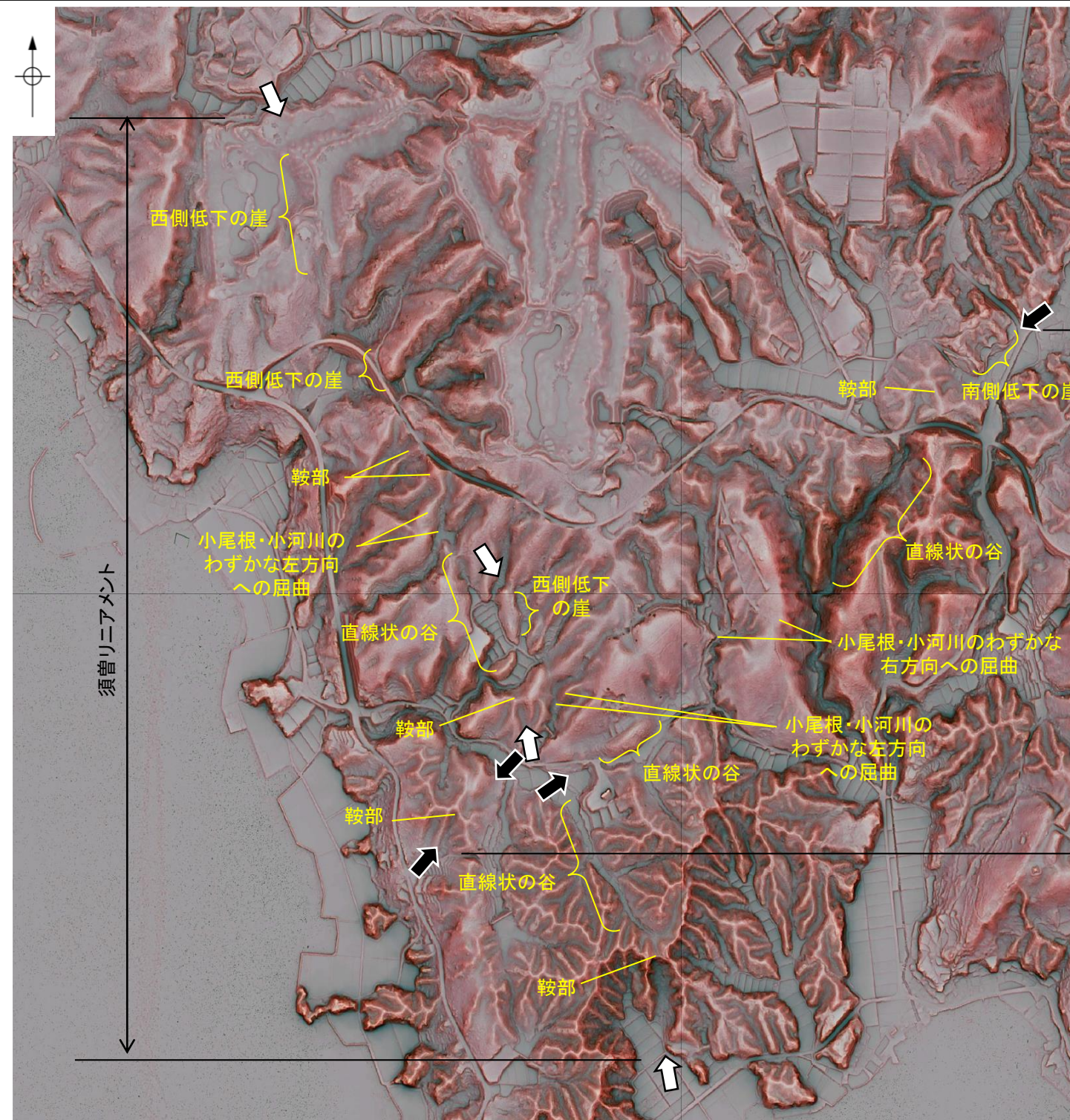
- 島別所南リニアメント周辺の地形について、空中写真判読及び航空レーザ計測データによれば、小起伏面において南側低下の崖、丘陵斜面において直線状の谷、鞍部が判読され、一部、小尾根と小河川にわずかな右方向への屈曲を伴う。
- 須曽リニアメント周辺の地形について、空中写真判読及び航空レーザ計測データによれば、丘陵斜面において西側低下の崖、鞍部及び直線状の谷が判読され、一部、小尾根と小河川にわずかな左方向への屈曲を伴う。



位置図

凡 例

〔段丘面〕	
T 最高位段丘面群	HI 高位段丘I面
HV 高位段丘V面	MI 中位段丘I面
HIIV 高位段丘IV面	A 沖積段丘面
HIII 高位段丘III面	
HI 高位段丘II面	
〔リニアメント・変動地形〕	
Lc (変動地形である可能性が低い)	
Ld (変動地形である可能性は非常に低い)	
← は走向ずれの向き、ケバは低下側を示す。 ↓ は地形面の傾斜の向きを示す。	



島別所南リニアメント

0 500m

島別所南リニアメント
 須曽リニアメント

- 地表踏査の結果、本地域周辺には、岩稻階の別所岳安山岩類の安山岩及び安山岩質火砕岩(凝灰角礫岩)、音川階の和倉珪藻泥岩層、更新世の中位段丘堆積層、上部更新統～完新統の沖積層が分布する。
- 半の浦西リニアメントから約100m東方では、高位段丘Ⅱ面堆積層に変位を与える断層露頭を確認した。断層は幅約5cmの破碎部を有し、西側の別所岳安山岩類安山岩を約80cm隆起させる逆断層である。半の浦西リニアメントと近接することや、リニアメント・変動地形と整合的な西上がりの変位を示すことを踏まえると、これは半の浦西リニアメントと関連する構造の可能性がある(次頁)。
- 須曽リニアメント沿いには、これに対応する断層は認められず、リニアメント・変動地形として判読した崖地形を横断して別所岳安山岩類の安山岩質火砕岩(凝灰角礫岩)が連続して分布し、そこに断層は認められない(P.193～196)。
- 島別所南リニアメント沿いには、これに対応する断層は認められず、リニアメント・変動地形として判読した小起伏面の低崖の近傍では、和倉珪藻泥岩がほぼ水平に分布している(P.197)。また、安山岩質火砕岩分布域中の小河川が南方に分布する安山岩との境界で西方に屈曲しており、その境界は島別所南リニアメントとほぼ一致している(P.198)。



位置図

凡例

【地質】		地層・岩石名
地質時代	数地周辺の層序	
第四紀	完新世	AL 沖積層
	更新世	MI 中位段丘Ⅰ面堆積層
新第三紀	音川階	OMd 和倉珪藻泥岩層
	岩稻階	IAa 別所岳安山岩類 安山岩
		IAt 別所岳安山岩類 安山岩質火砕岩(凝灰角礫岩)

【記号】

20/43 地層の走向・傾斜

20/43 節理の走向・傾斜

地質断面線

【リニアメント・変動地形】

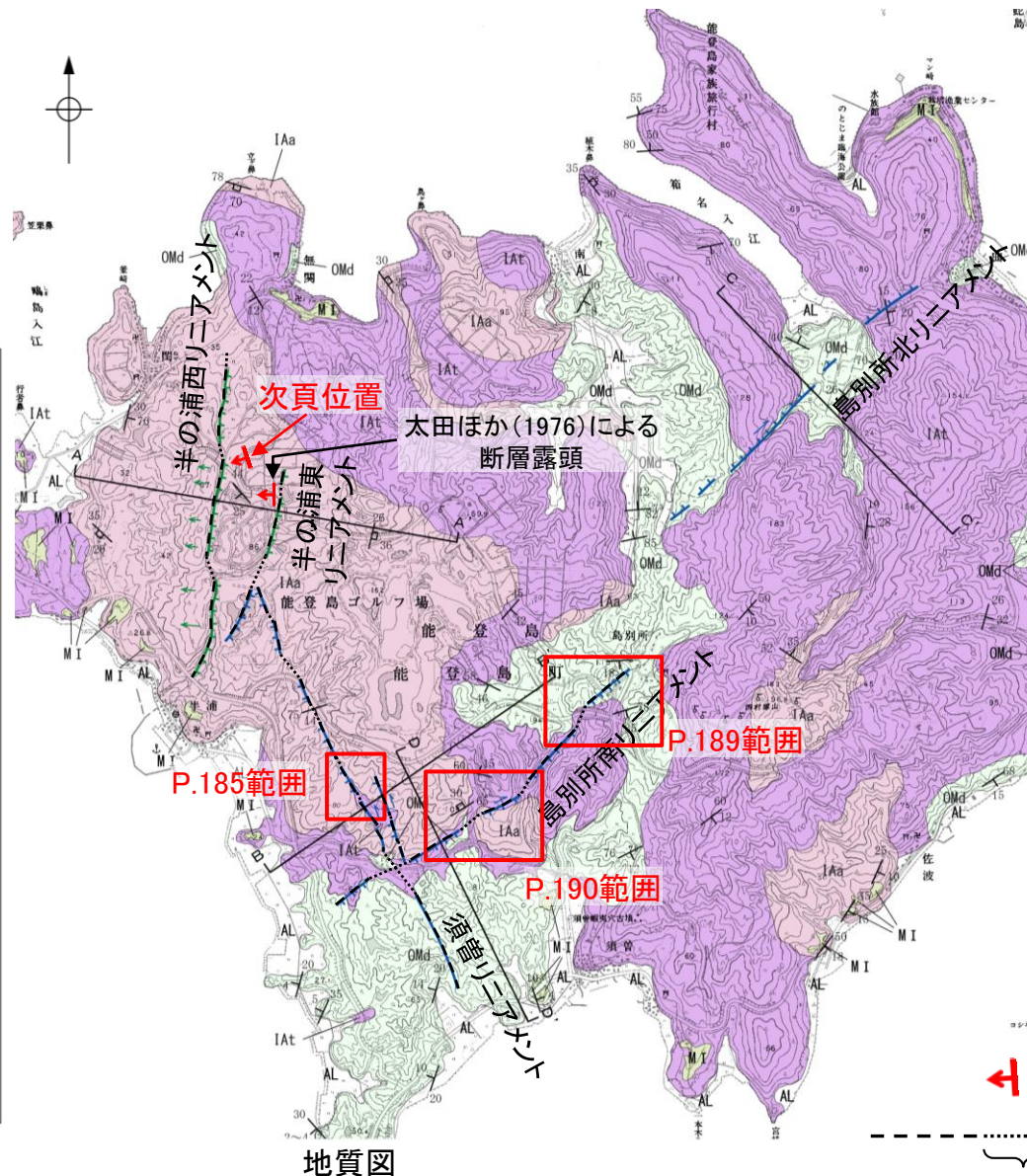
↓ Lc (変動地形である可能性が低い)

↓ LD (変動地形である可能性は非常に低い)

← は走向ずれの向き、ケバは低下側を示す。

↓ は地形面の傾斜の向きを示す。

0 1km

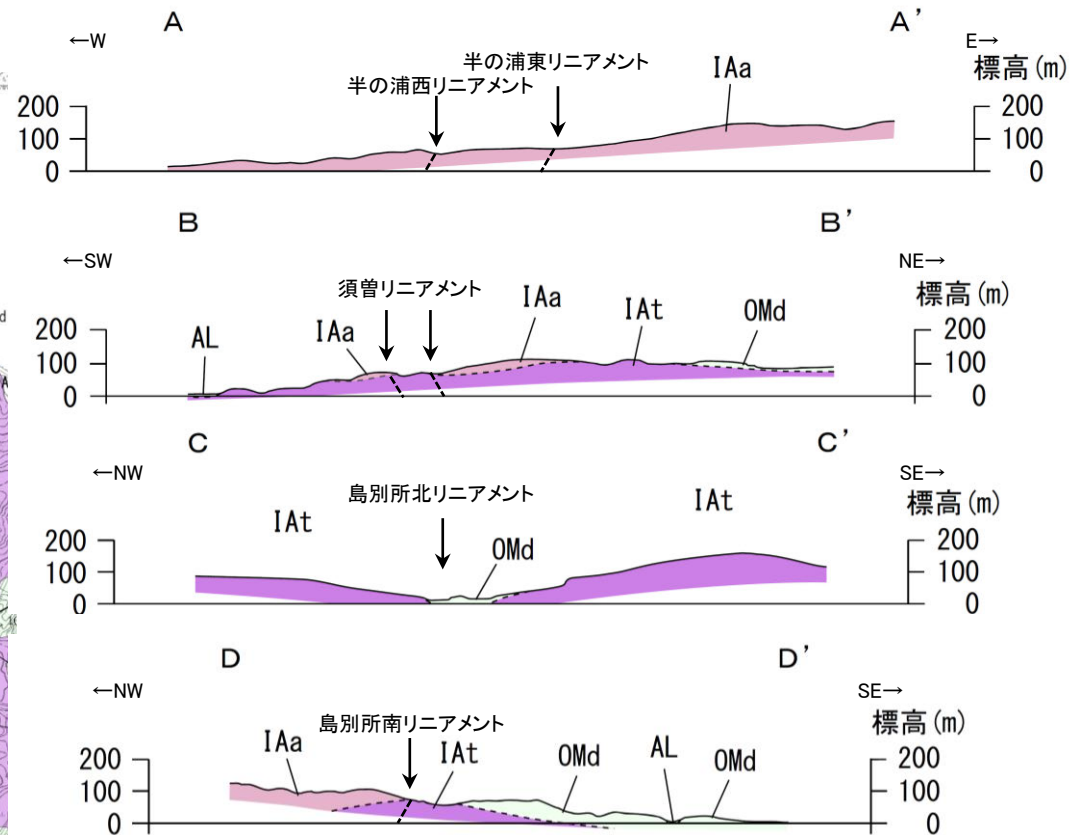


地質図

断層確認位置

断層位置

推定区間



地質断面図

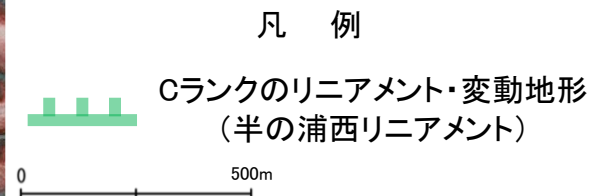
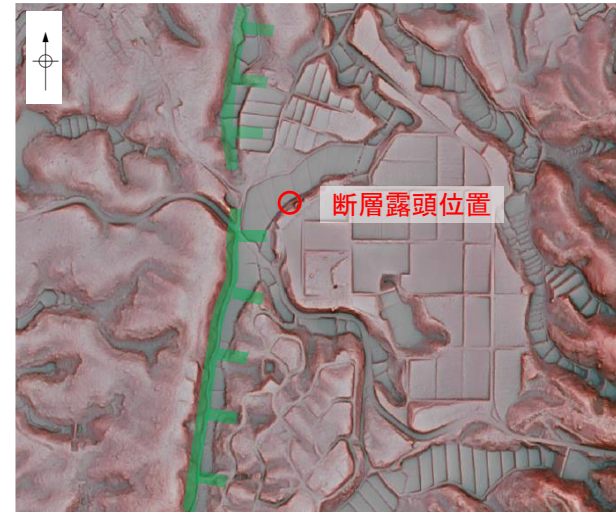
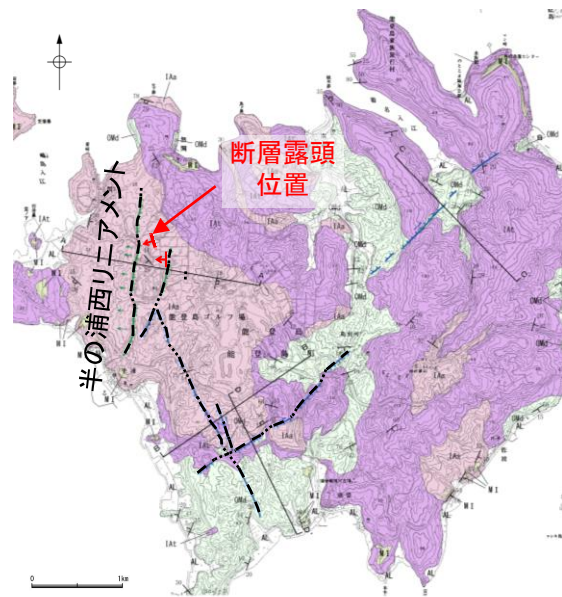
凡例

【地質】		地層・岩石名
地質時代	数地周辺の層序	
第四紀	完新世	AL 沖積層
	更新世	
新第三紀	音川階	OMd 和倉珪藻泥岩層
	岩稻階	IAa 別所岳安山岩類 安山岩
		IAt 別所岳安山岩類 安山岩質火砕岩(凝灰角礫岩)

半の浦西リニアメント

【半の浦西リニアメント付近の断層露頭】

○半の浦西リニアメントから約100m東方では、高位段丘Ⅱ面堆積層に変位を与える断層露頭を確認した。断層は幅約5cmの破碎部を有し、西側の別所岳安山岩類安山岩を約80cm隆起させる逆断層である。半の浦西リニアメントと近接することや、リニアメント・変動地形と整合的な西上がりの変位を示すことを踏まえると、これは半の浦西リニアメントと関連する構造の可能性がある。



詳細位置図



断層位置

断層露頭写真(1979~1980年撮影)
(半の浦西リニアメントから約100m東方)

- ・断層の走向傾斜はN18° W50° SW
- ・写真左手の灰色還元脱色帯の上に段丘礫、赤褐色粘土があるが、ハンマー上方の位置で切られている。
- ・変位量は西上がり約80cm
- ・断層は幅5cmの破碎部を有する。

地質図

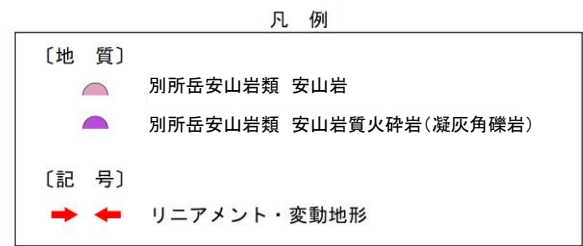
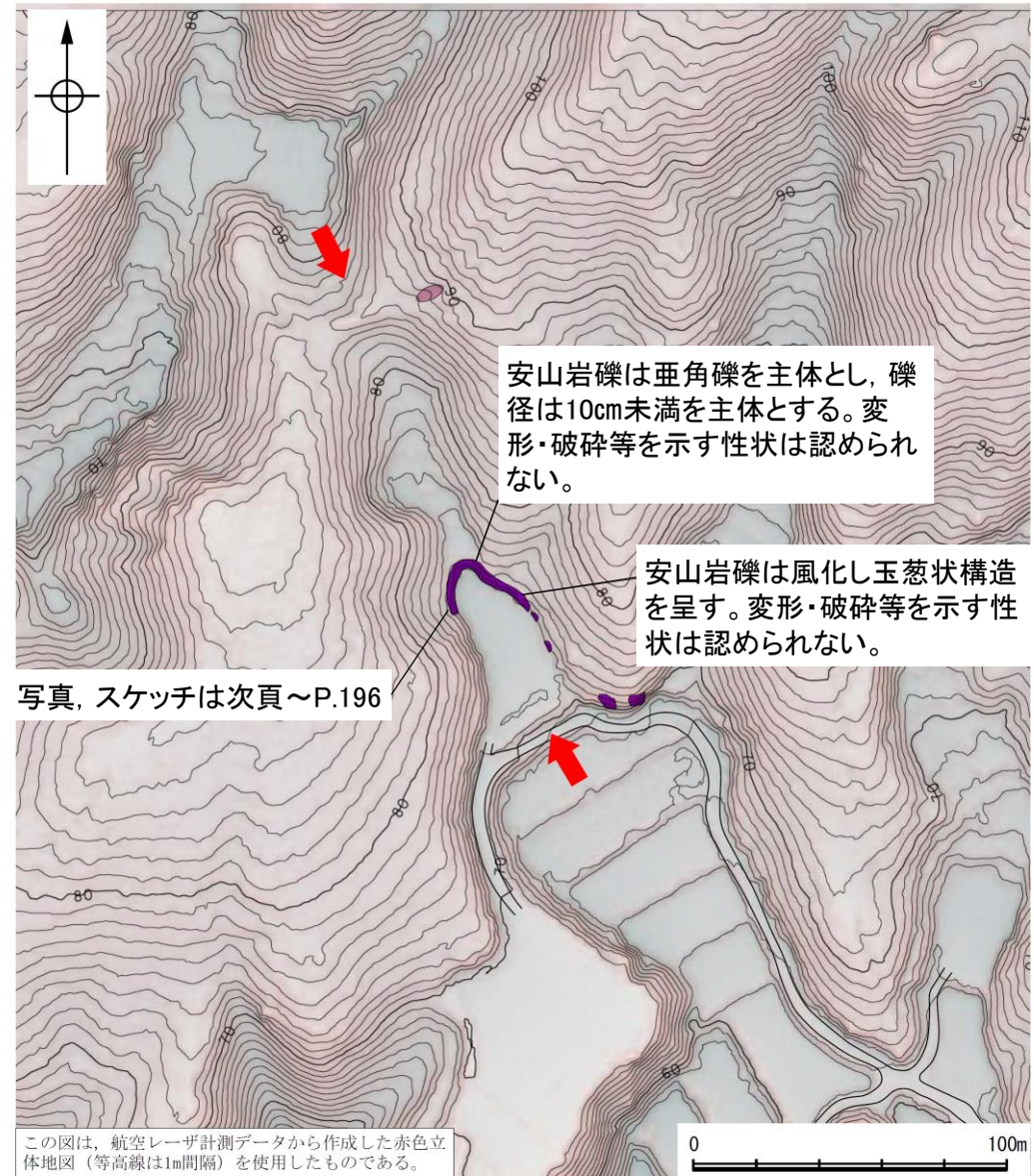
----- 断層位置
推定区間

【地質】		地層・岩石名
地質時代	数地周辺の層序	
第四紀更新世	AL	沖積層
	MI	中位段丘Ⅰ面堆積層
新第三紀	音川階	OMd 和倉珪藻泥岩層
	岩稲階	IAa 別所岳安山岩類 安山岩
		IAt 別所岳安山岩類 安山岩質火砕岩(凝灰角礫岩)

【記号】	
	地層の走向・傾斜
	節理の走向・傾斜
【リニアメント・変動地形】	
	Lc (変動地形である可能性が低い)
	Ld (変動地形である可能性は非常に低い)
← は走向ずれの向き、ケバは低下側を示す。 ↓ は地形面の傾斜の向きを示す。	

【須曽リニアメント周辺地形・地質状況】

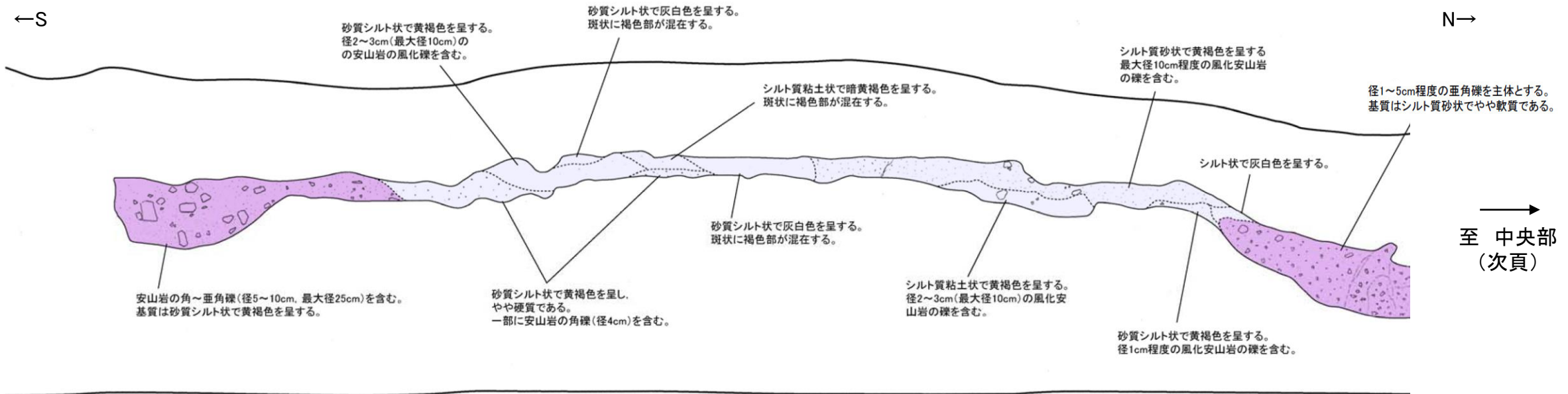
○リニアメント・変動地形として判読した崖地形を横断して別所岳安山岩類の安山岩質火砕岩(凝灰角礫岩)が連続して分布し、そこに断層は認められない。



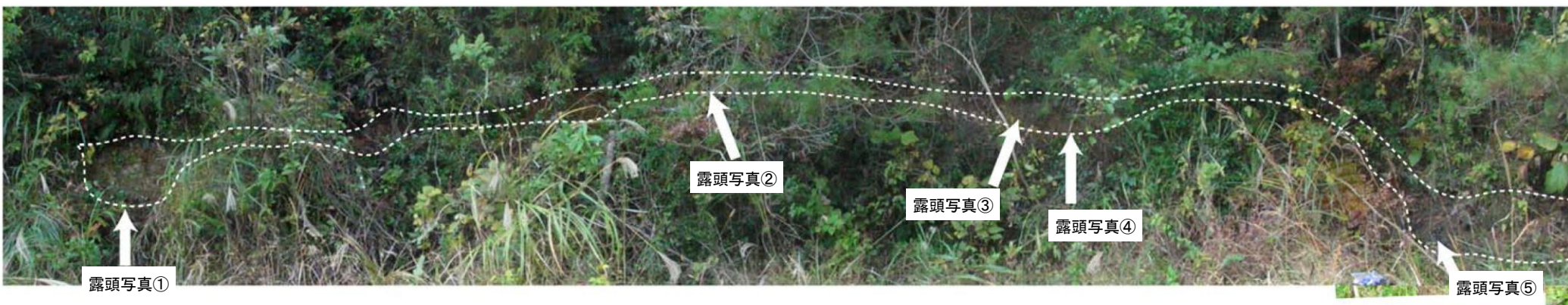
露頭分布図(須曽リニアメント)

須曽リニアメント

○リニアメント・変動地形として判読した崖地形を横断して別所岳安山岩類の安山岩質火砕岩(凝灰角礫岩)が連続して分布し、そこに断層は認められない。



→
至 中央部
(次頁)



- 凡例
- [別所岳安山岩類 安山岩質火砕岩(凝灰角礫岩)]**
- 弱風化部
礫と基質の境界は明瞭。
礫は安山岩の垂角礫を主体とし、礫径は一定しないが10cm未満を主体とする。
基質は砂質シルト~シルト質砂状を呈するが、一部は硬質である。
 - 風化部
礫は風化程度の低いもののみ保存されており、多くは基質との境界が不明瞭である。また、一部には球状風化を受け、玉葱状構造を呈するものがある。
基質は砂質シルト~シルト質砂状で黄褐色を呈する。
 - 強風化部
礫と基質の境界は不明瞭である。
基質はシルト質粘土~シルト質砂状で黄褐色、一部灰白色を呈する。

表土はぎ写真, スケッチ(西側)



露頭写真①

露頭写真②

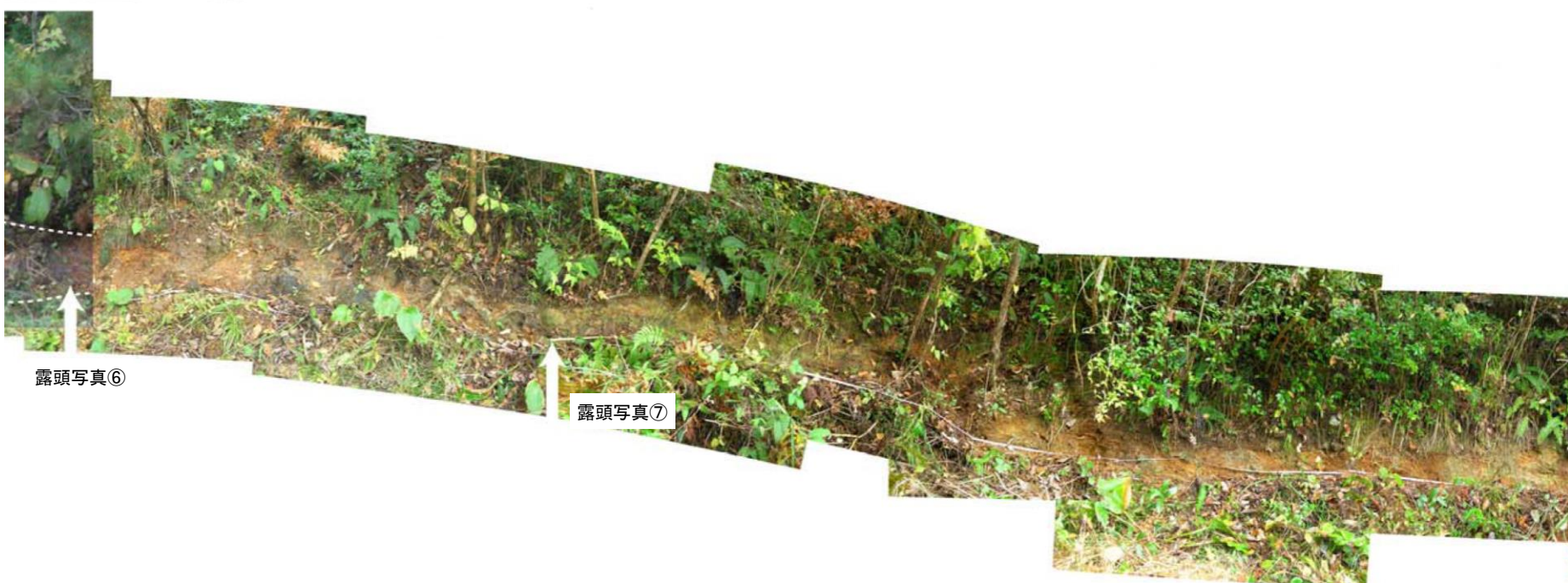
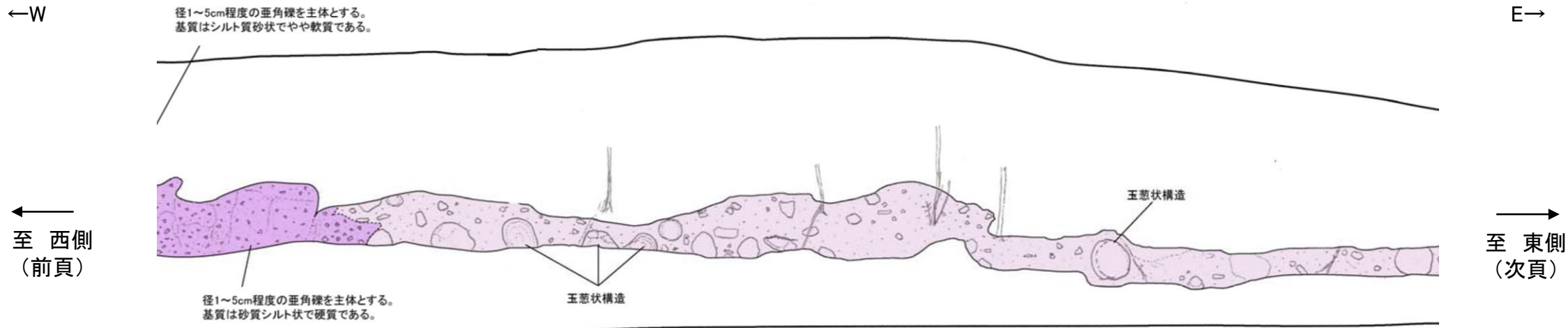
露頭写真③

露頭写真④

露頭写真⑤

須曽リニアメント

○リニアメント・変動地形として判読した崖地形を横断して別所岳安山岩類の安山岩質火砕岩(凝灰角礫岩)が連続して分布し、そこに断層は認められない。



表土はぎ写真, スケッチ(中央部)

- 凡例
- [別所岳安山岩類 安山岩質火砕岩(凝灰角礫岩)]**
- 弱風化部**
 礫と基質の境界は明瞭。
 礫は安山岩の亜角礫を主体とし、礫径は一定しないが10cm未満を主体とする。
 基質は砂質シルト～シルト質砂状を呈するが、一部は硬質である。
 - 風化部**
 礫は風化程度の低いもののみ保存されており、多くは基質との境界が不明瞭である。また、一部には球状風化を受け、玉葱状構造を呈するものがある。
 基質は砂質シルト～シルト質砂状で黄褐色を呈する。
 - 強風化部**
 礫と基質の境界は不明瞭である。
 基質はシルト質粘土～シルト質砂状で黄褐色、一部灰白色を呈する。



露頭写真⑥

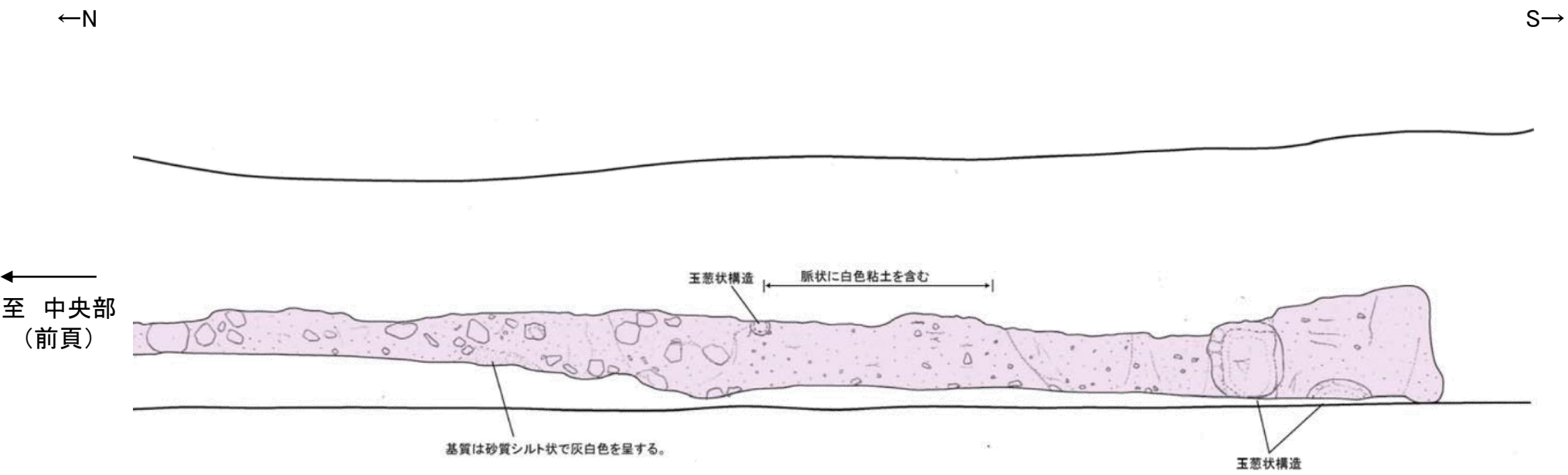


露頭写真⑦



須曽リニアメント

○リニアメント・変動地形として判読した崖地形を横断して別所岳安山岩類の安山岩質火砕岩(凝灰角礫岩)が連続して分布し、そこに断層は認められない。



←N
至 中央部
(前頁)



表土はぎ写真, スケッチ(東側)

凡例

[別所岳安山岩類 安山岩質火砕岩(凝灰角礫岩)]

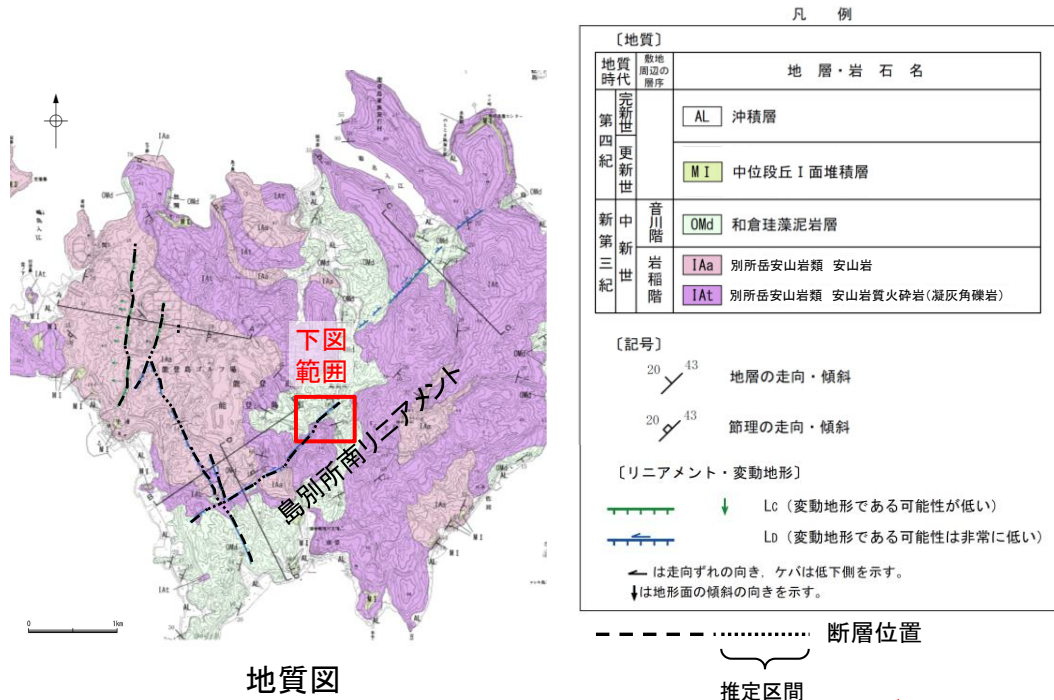
- 弱風化部**
 礫と基質の境界は明瞭。
 礫は安山岩の垂角礫を主体とし、礫径は一定しないが10cm未満を主体とする。
 基質は砂質シルト～シルト質砂状を呈するが、一部は硬質である。
- 風化部**
 礫は風化程度の低いもののみ保存されており、多くは基質との境界が不明瞭である。また、一部には球状風化を受け、玉葱状構造を呈すものがある。
 基質は砂質シルト～シルト質砂状で黄褐色を呈する。
- 強風化部**
 礫と基質の境界は不明瞭である。
 基質はシルト質粘土～シルト質砂状で黄褐色、一部灰白色を呈する。



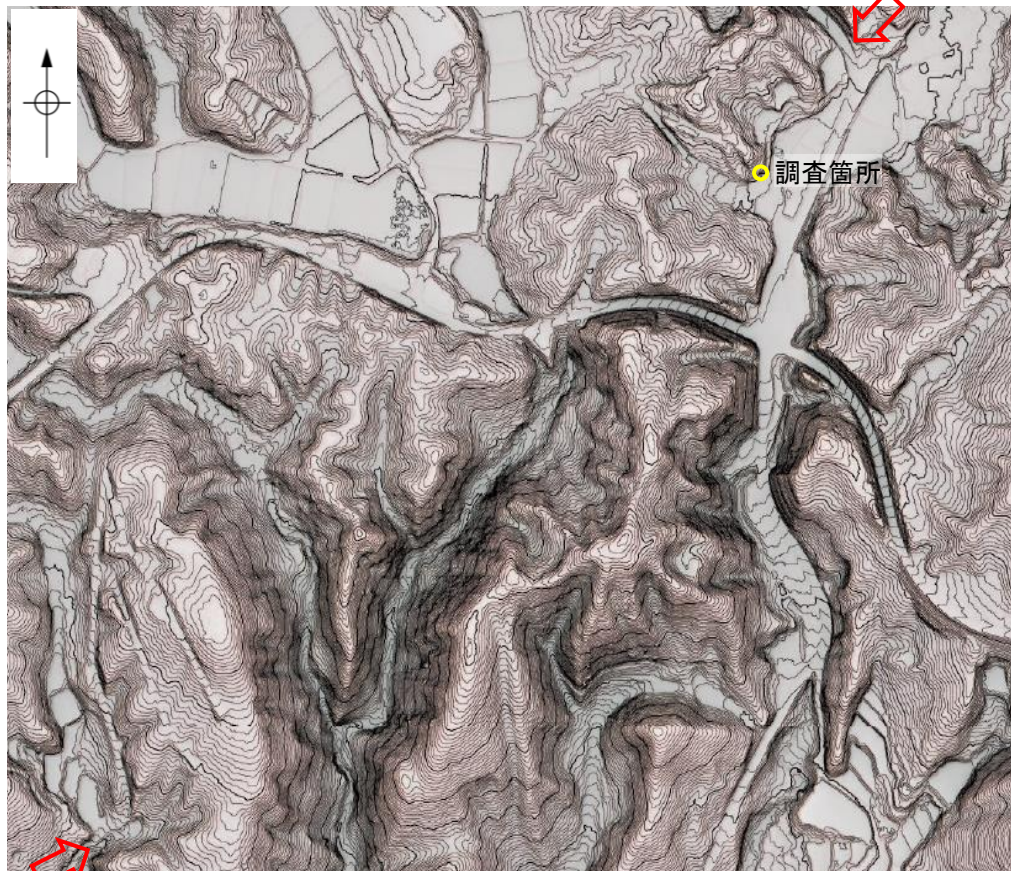
島別所南リニアメント

【島別所南リニアメント周辺地形・地質状況】

○リニアメント・変動地形として判読した小起伏面の急崖直下及び近傍では、和倉珪藻泥岩層がほぼ水平に分布している。

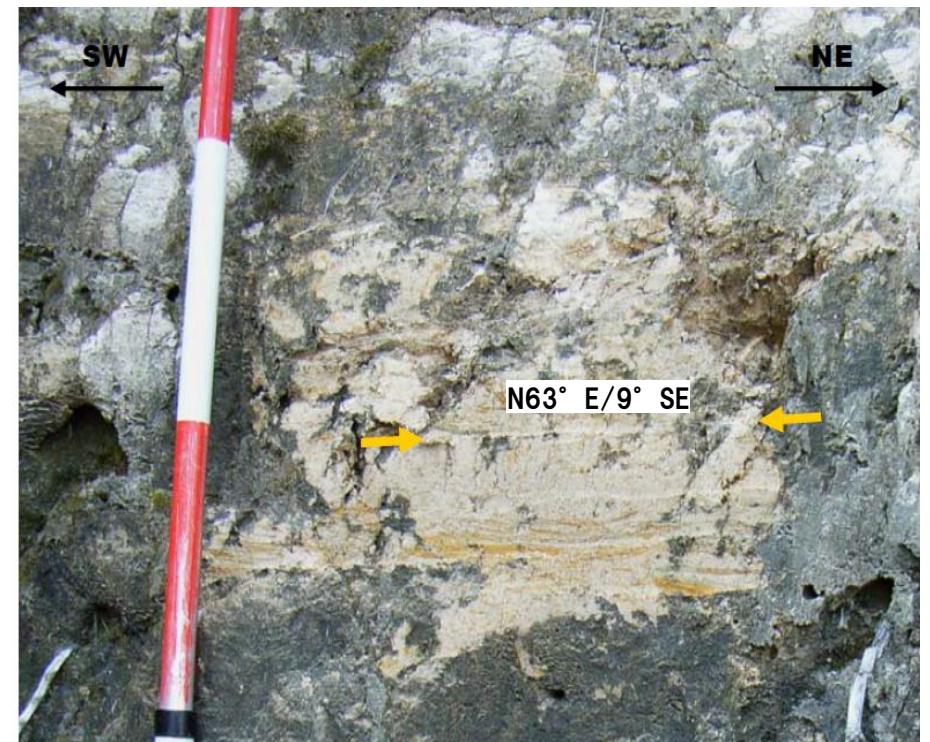


地質図



位置図

⇔ リニアメント・変動地形



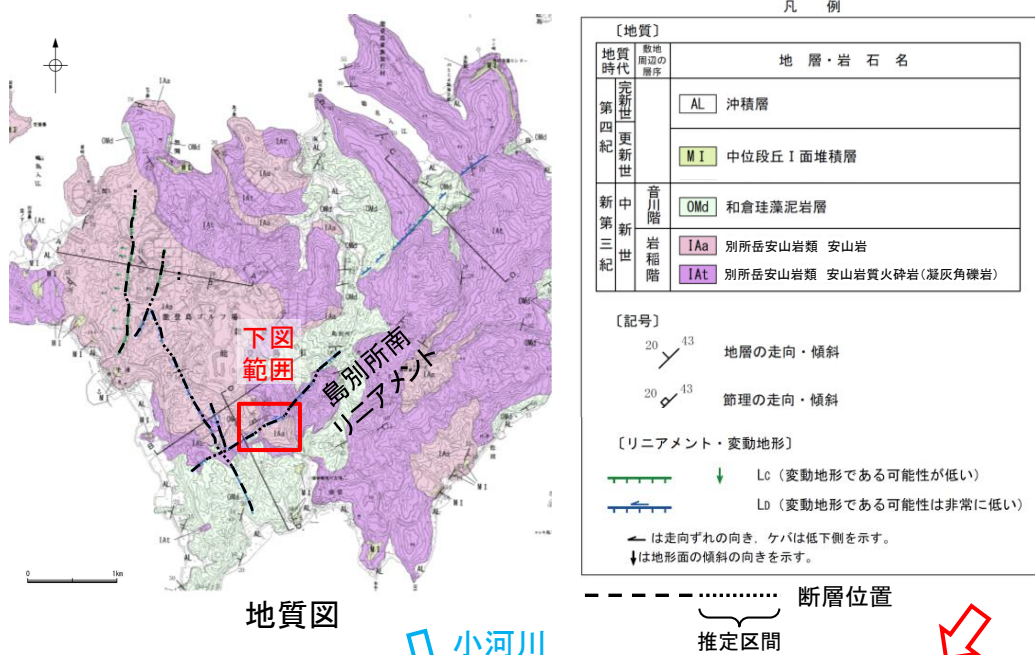
露頭写真

和倉珪藻泥岩層がほぼ水平に確認される

島別所南リニアメント

【島別所南リニアメント周辺地形・地質状況】

○安山岩質火砕岩分布域中の小河川が南方に分布する安山岩との境界で西方に屈曲しており、その境界は島別所南リニアメントとほぼ一致していることから、別所岳安山岩類中の岩質の差を反映した組織地形である可能性が大きい。



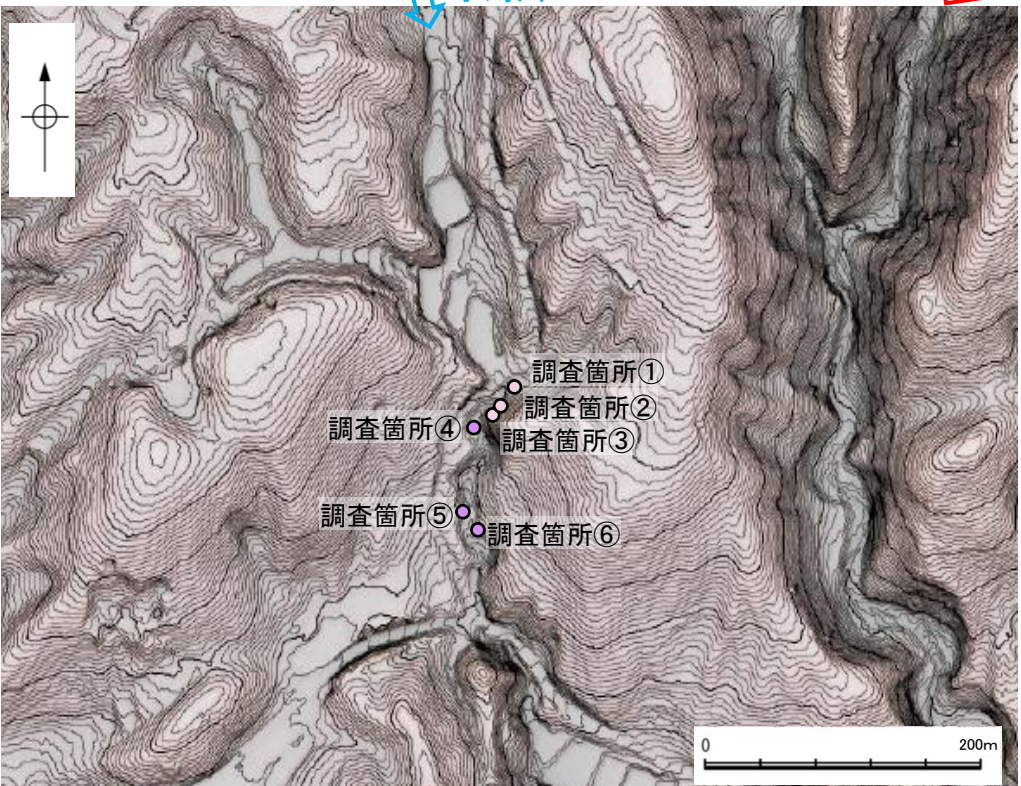
調査箇所① 写真
安山岩が確認される



調査箇所② 写真
安山岩が確認される



調査箇所③ 写真
安山岩が確認される



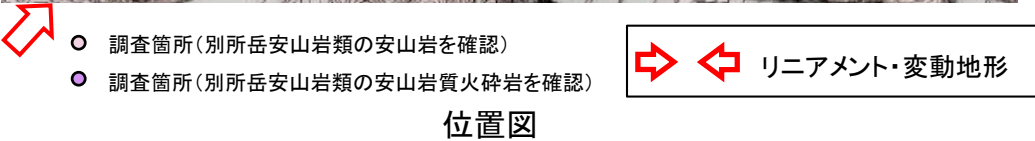
調査箇所④ 写真
安山岩質火砕岩が確認される



調査箇所⑤ 写真
安山岩質火砕岩が確認される



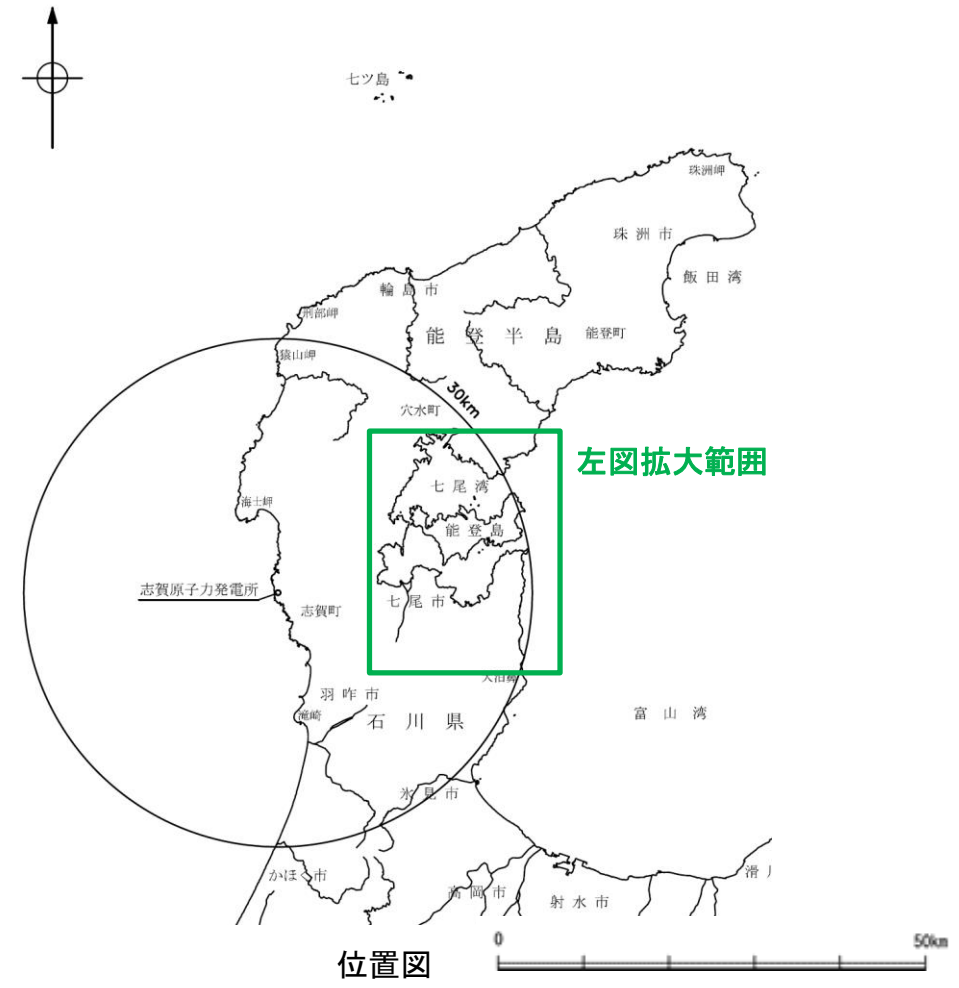
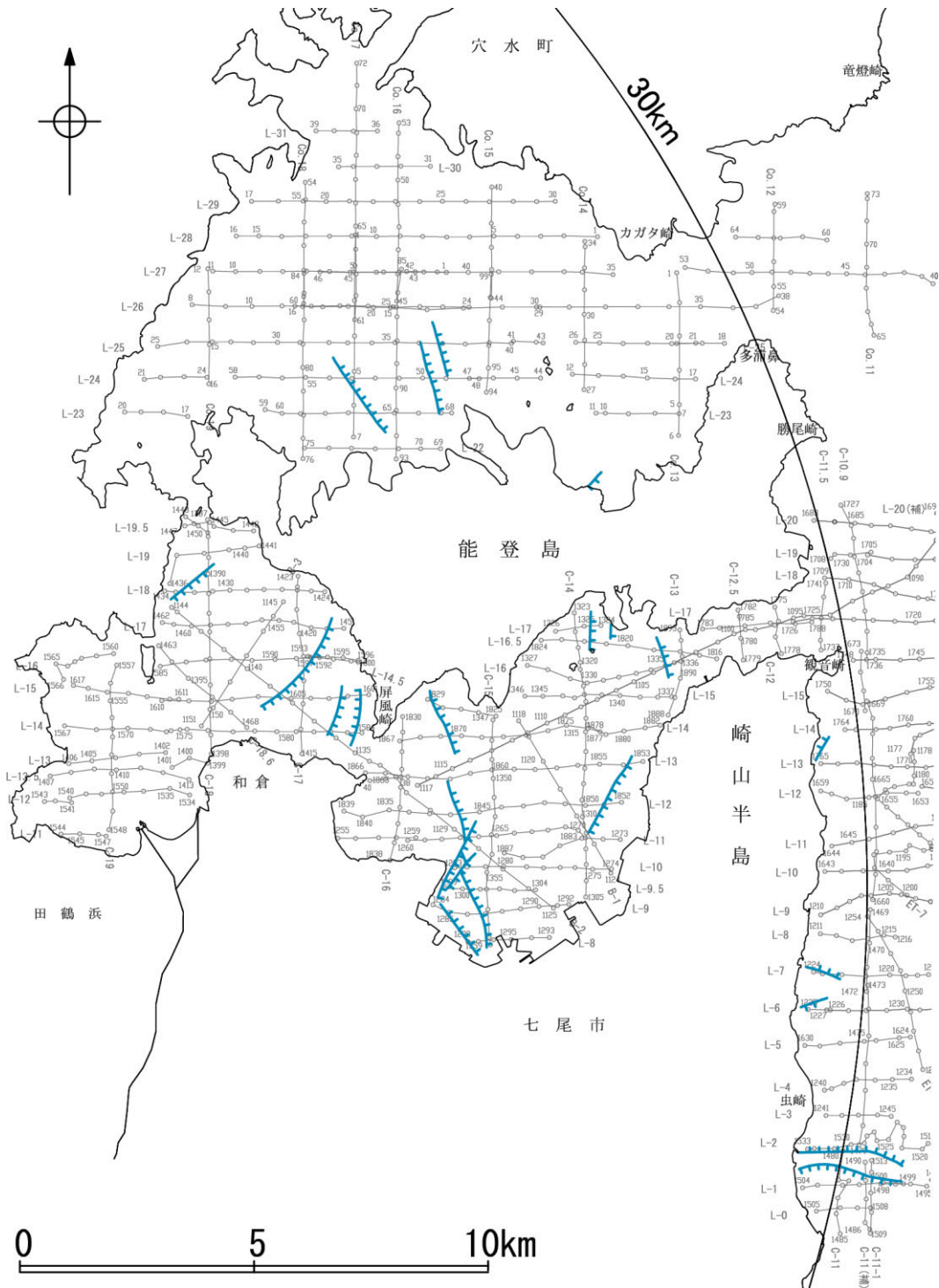
調査箇所⑥ 写真
安山岩質火砕岩が確認される



2.4.5.1.2 七尾湾調査海域の断層

2.4.5.1.2 (1) 七尾湾調査海域の断層の文献調査

- 海上保安庁水路部(1982)は、海上保安庁水路部によって実施された反射法地震探査(調査測線①)の反射断面の解釈から、七尾湾調査海域において24条の断層を図示し、大部分を伏在断層としている。
- 岡村(2002)は、調査範囲外のため七尾湾調査海域に断層等を図示していない。
- 国交省ほか(2014)は、調査範囲外のため七尾湾調査海域に海底断層を記載していない。
- 文科省ほか(2015)は、調査範囲外のため七尾湾調査海域に震源断層モデルを設定していない。



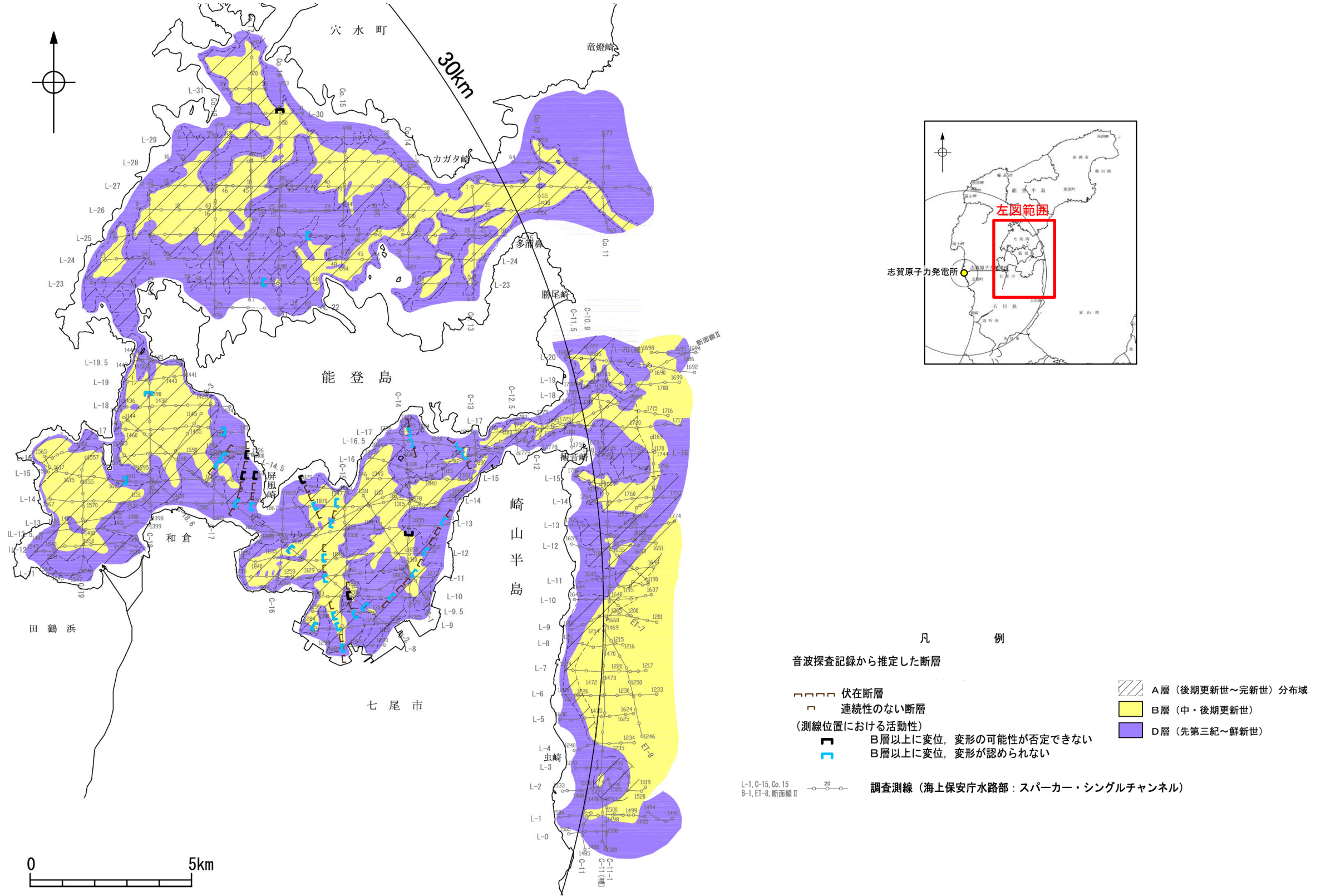
凡例

文献による断層
 海上保安庁水路部(1982)による断層

L-1, C-15, Co. 15
 調査測線(海上保安庁水路部: スーパー・シングルチャンネル) : 調査測線①

2.4.5.1.2 (2) 七尾湾調査海域の断層の活動性－七尾湾調査海域の地質図－

○七尾湾調査海域の断層は、大部分が能登島南方に分布し、いずれもD層内に伏在している。

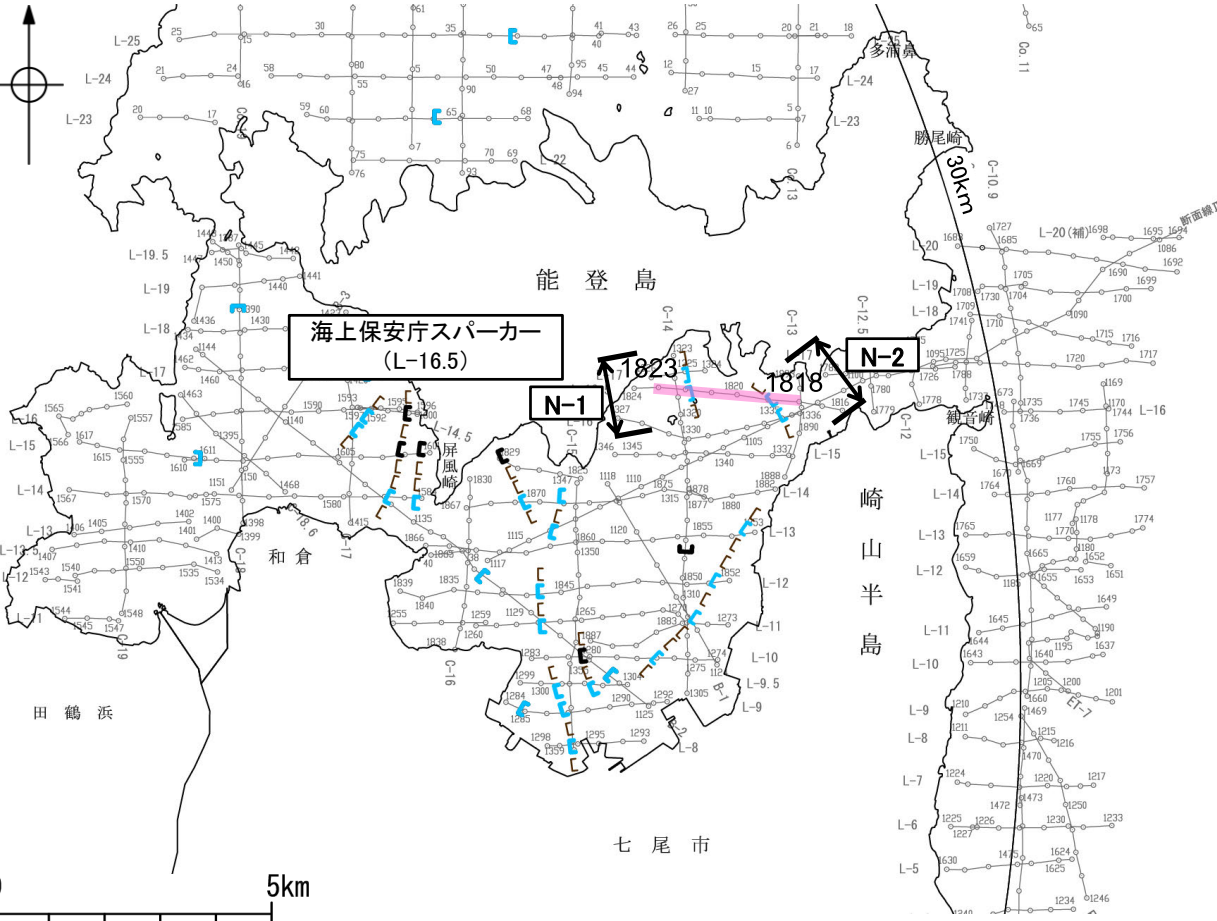


七尾湾調査海域の断層周辺の地質図

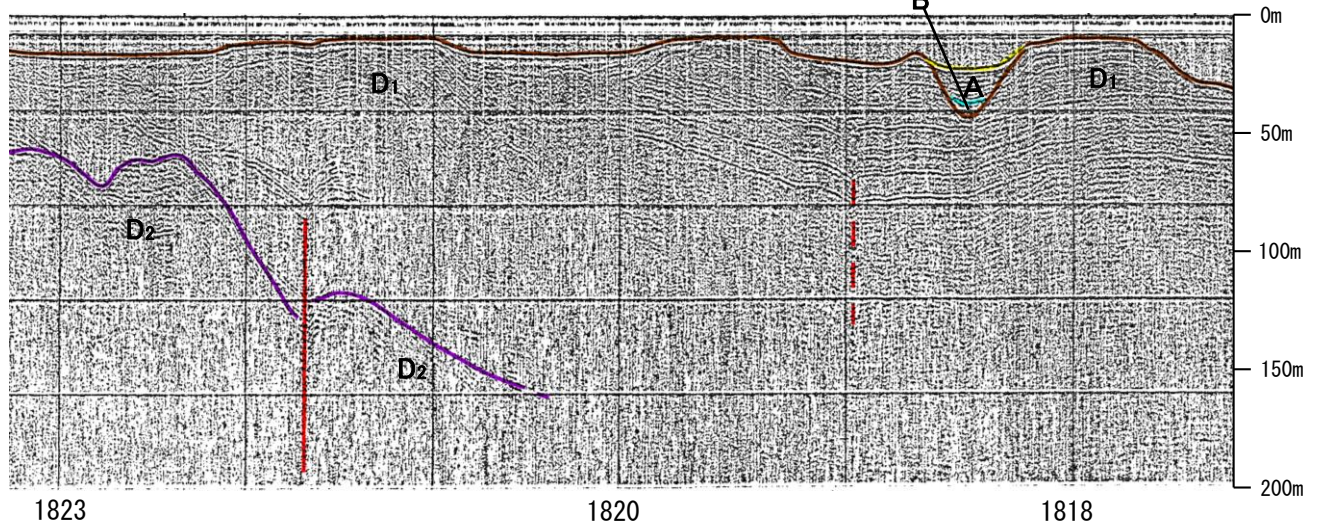
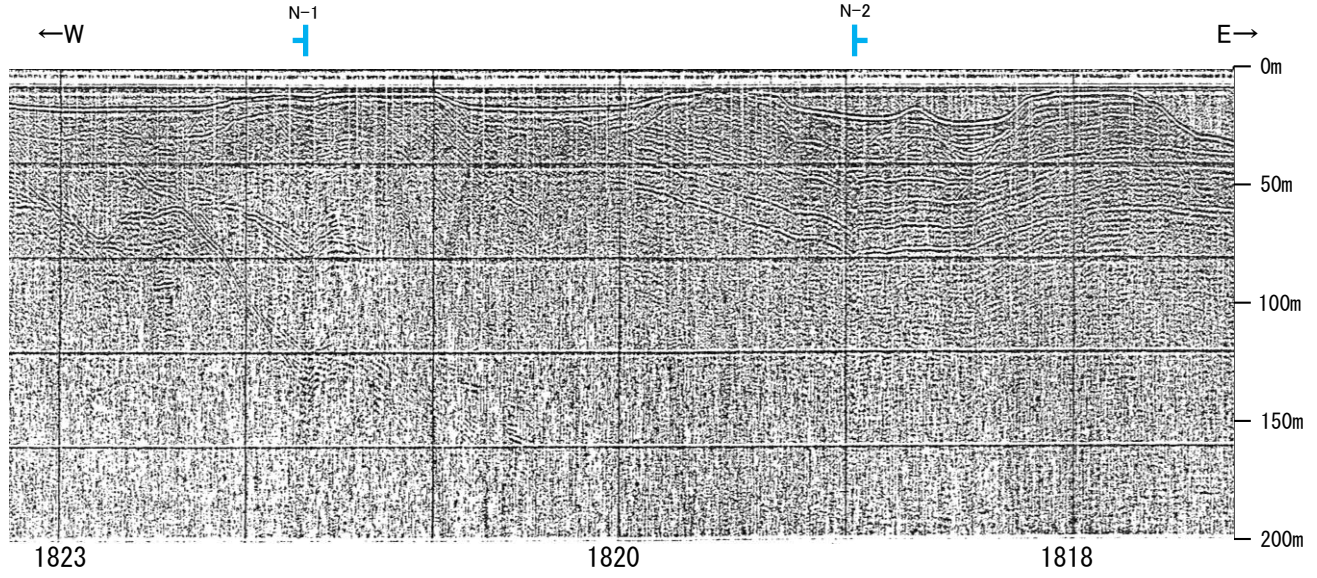
2.4.5.1.2 (2) 七尾湾調査海域の断層の活動性 -L-16.5測線-

○L-16.5測線において、測点1822付近でD₁層下部及びD₂層に西落ちの変位が認められることから断層(N-1)を推定した。変位、変形はD₁層上部に及んでいないことから、B層以上に変位、変形が認められないと判断した。

○また、測点1819付近でD₁層下部に東落ちの変位が推定されることから断層(N-2)を推定した。変位、変形はD₁層上部に及んでいないことから、B層以上に変位、変形が認められないと判断した。



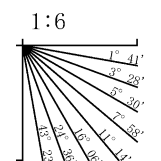
位置図



- 凡 例
- 音波探査記録から推定した断層
 - 伏在断層
 - 連続性のない断層
 - (測線位置における活動性)
 - B層以上に変位、変形の可能性が否定できない
 - B層以上に変位、変形が認められない
 - 調査測線(海上保安庁水路部: スパーカー・シングルチャンネル)
 - 右図記録範囲
- L-1, C-15, C-15
B-1, E1-8, 断面線II

地質時代		地層名
第四紀	完新世	A層
	後期	B層
	中期	C層
更新世	前期	D ₁ 層
	鮮新世	D ₂ 層
新第三紀	中新世	D層
古第三紀		D層
	先第三紀	D層

・この図面は海上保安庁水路部(現、海上保安庁海洋情報部)の海上音波探査の記録を北陸電力が独自に解析・作成したものである

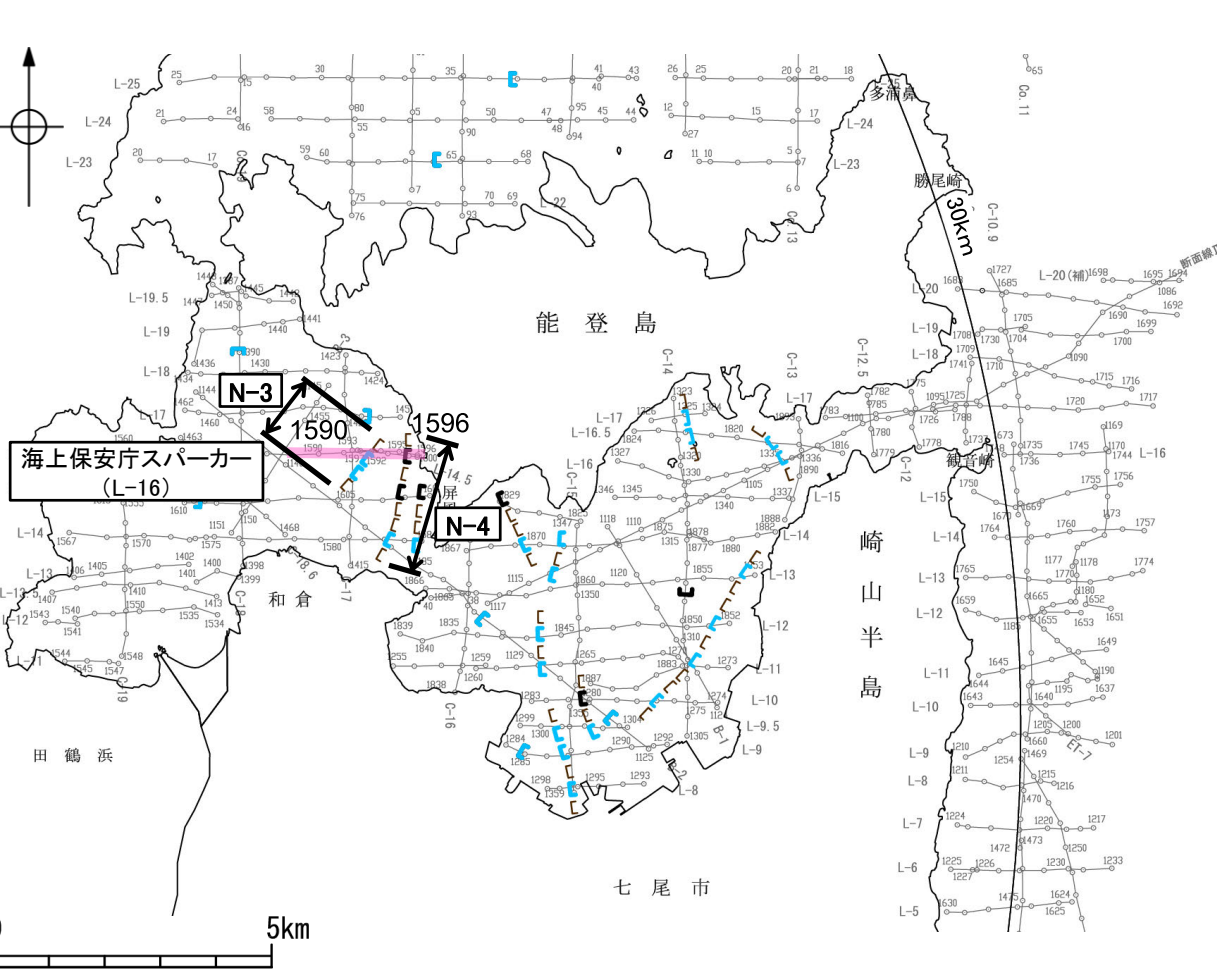


断層(破線は推定)

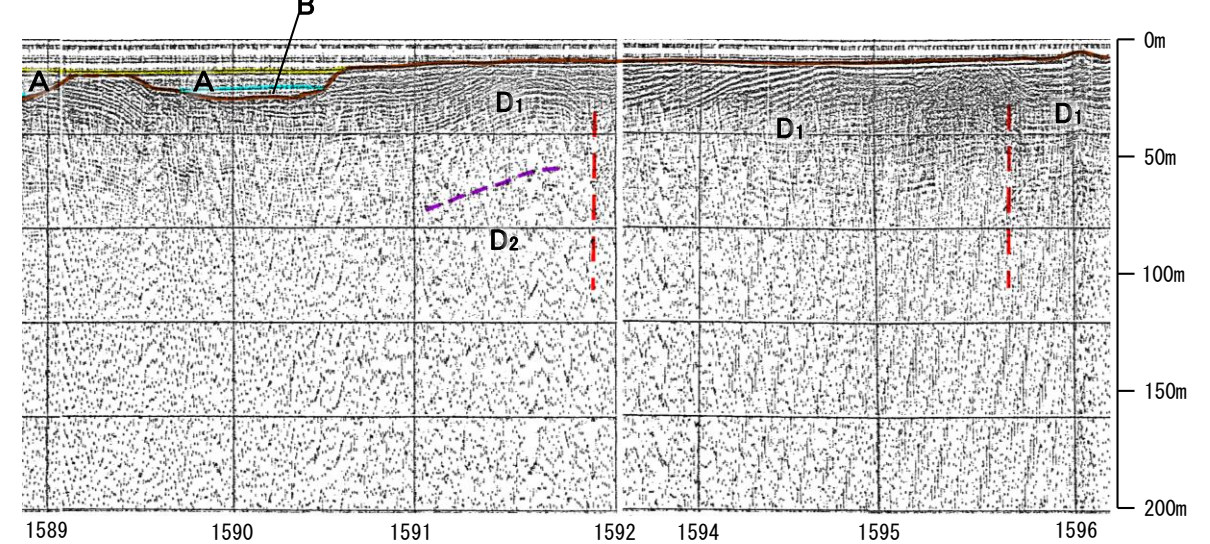
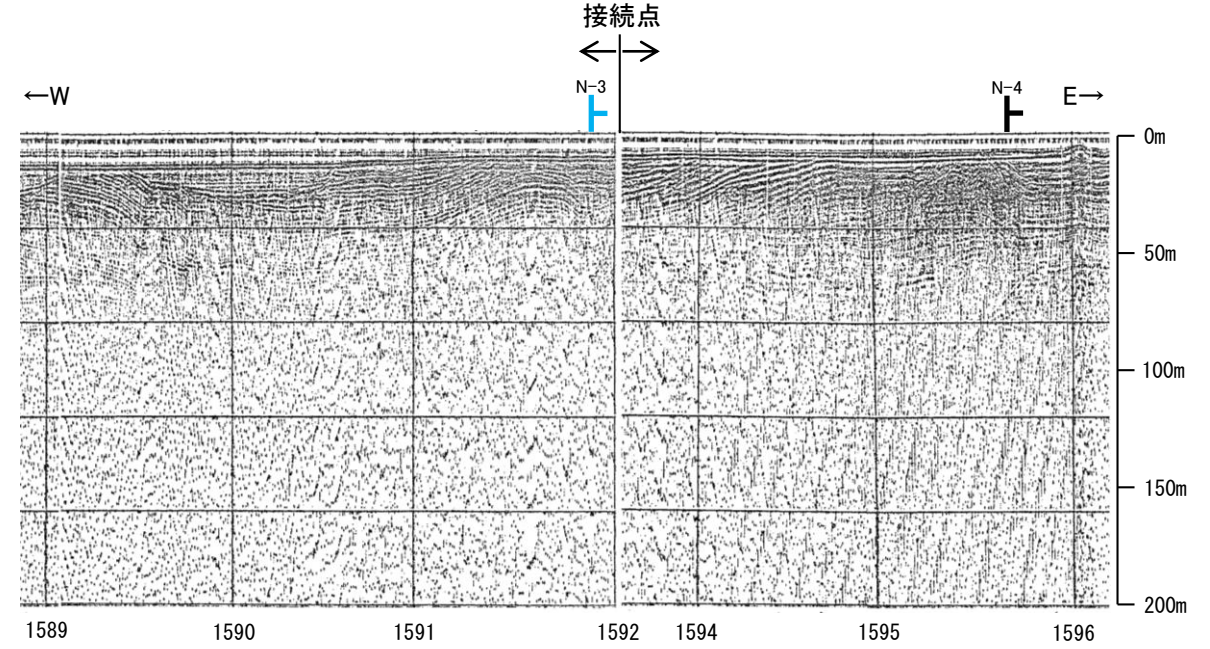
2.4.5.1.2 (2) 七尾湾調査海域の断層の活動性 -L-16測線-

○L-16測線において、測点1592付近でD₁層下部及びD₂層に東落ちの変位が推定されることから断層(N-3)を推定した。変位、変形はD₁層上部に及んでいないことから、B層以上に変位、変形が認められないと判断した。

○また、測点1596付近でD₁層に東落ちの変位、変形が推定されることから断層(N-4)を推定した。推定位置に、後期更新世以降の活動の判定が可能な上載層が分布しないことから、B層以上に変位、変形の可能性が否定できないと判断した。



位置図



- 凡 例
- 音波探査記録から推定した断層
 - 伏在断層
 - 連続性のない断層
 - (測線位置における活動性)
 - B層以上に変位、変形の可能性が否定できない
 - B層以上に変位、変形が認められない
 - 調査測線 (海上保安庁水路部: スパーク・シングルチャンネル)
 - 右図記録範囲

地質時代	地層名	
第四紀	完新世	A層
	後期	B層
	中期	C層
更新世	前期	D ₁ 層
	鮮新世	D ₂ 層
新第三紀	中新世	D層
古第三紀		D層
先第三紀		D層

・この図面は海上保安庁水路部(現、海上保安庁海洋情報部)の海上音波探査の記録を北陸電力が独自に解析・作成したものである

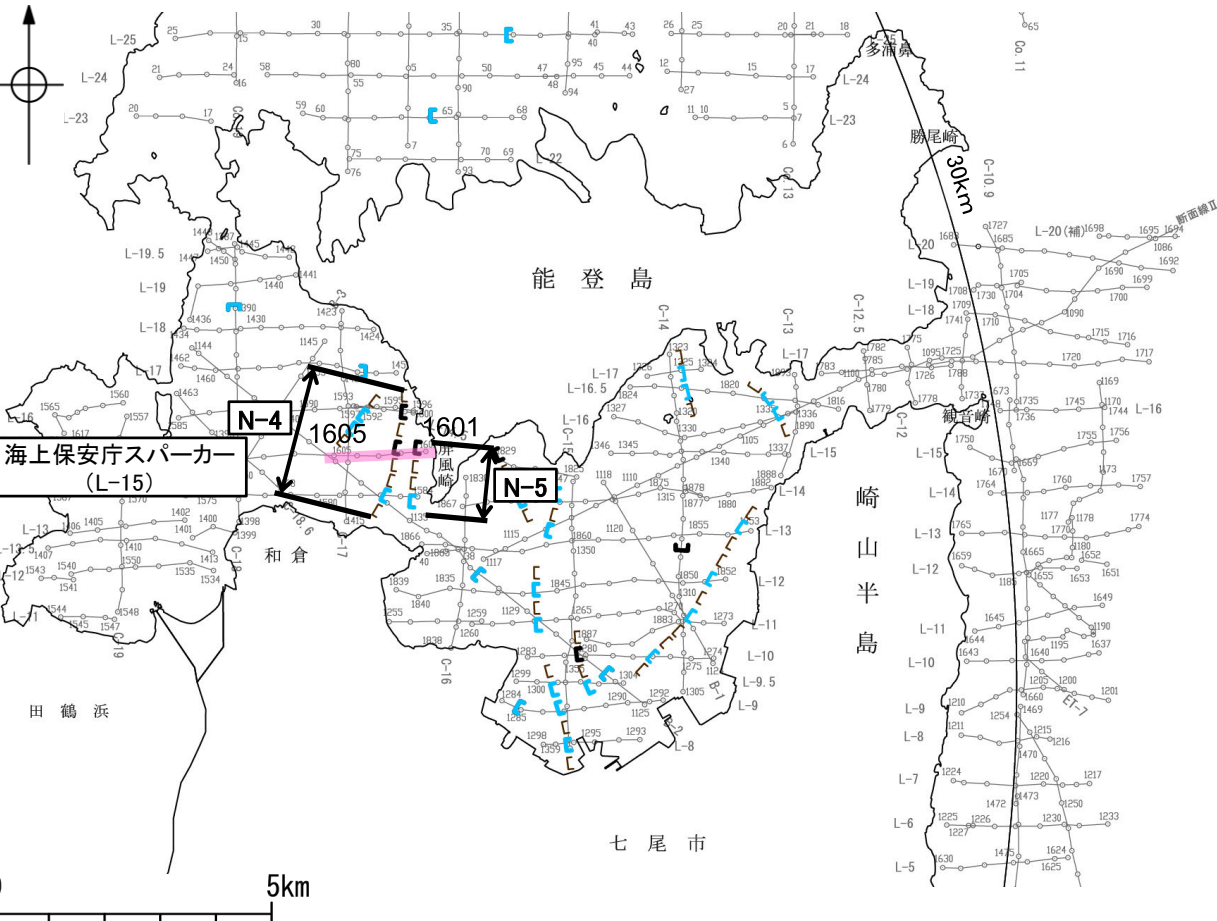
1:6

断層(破線は推定)

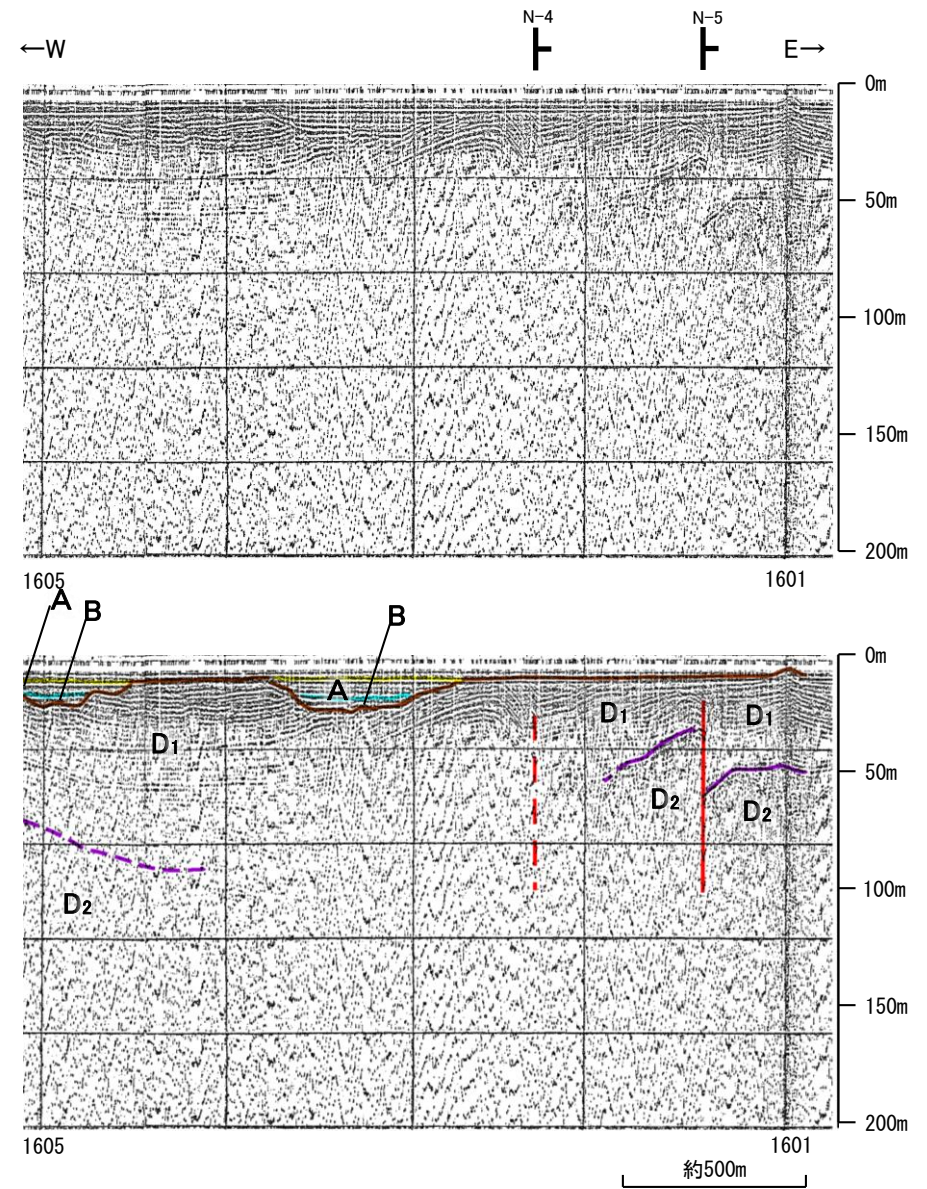
2.4.5.1.2 (2) 七尾湾調査海域の断層の活動性 -L-15測線-

○L-15測線において、測点1602付近でD₁層上部に東落ちの変形が認められ、D₁層下部に東落ちの変位が推定されることから断層(N-4)を推定した。推定位置に、後期更新世以降の活動の判定が可能な上載層が分布しないことから、B層以上に変位、変形の可能性が否定できないと判断した。

○また、測点1601.5付近でD₁層上部に東落ちの変形が認められ、D₁層下部及びD₂層に東落ちの変位が認められることから断層(N-5)を推定した。推定位置に、後期更新世以降の活動の判定が可能な上載層が分布しないことから、B層以上に変位、変形の可能性が否定できないと判断した。



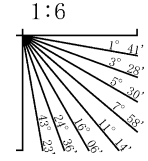
位置図



- 凡 例
- 音波探査記録から推定した断層
 - 伏在断層
 - 連続性のない断層
 - (測線位置における活動性)
 - B層以上に変位、変形の可能性が否定できない
 - B層以上に変位、変形が認められない
 - 調査測線(海上保安庁水路部: スーパー・シングルチャンネル)
 - 右図記録範囲

地質時代		地層名
第四紀	完新世	A層
	後期	B層
	中期	C層
新第三紀	鮮新世	D ₁ 層
	中新世	D ₂ 層
古第三紀		D層
先第三紀		D ₂ 層

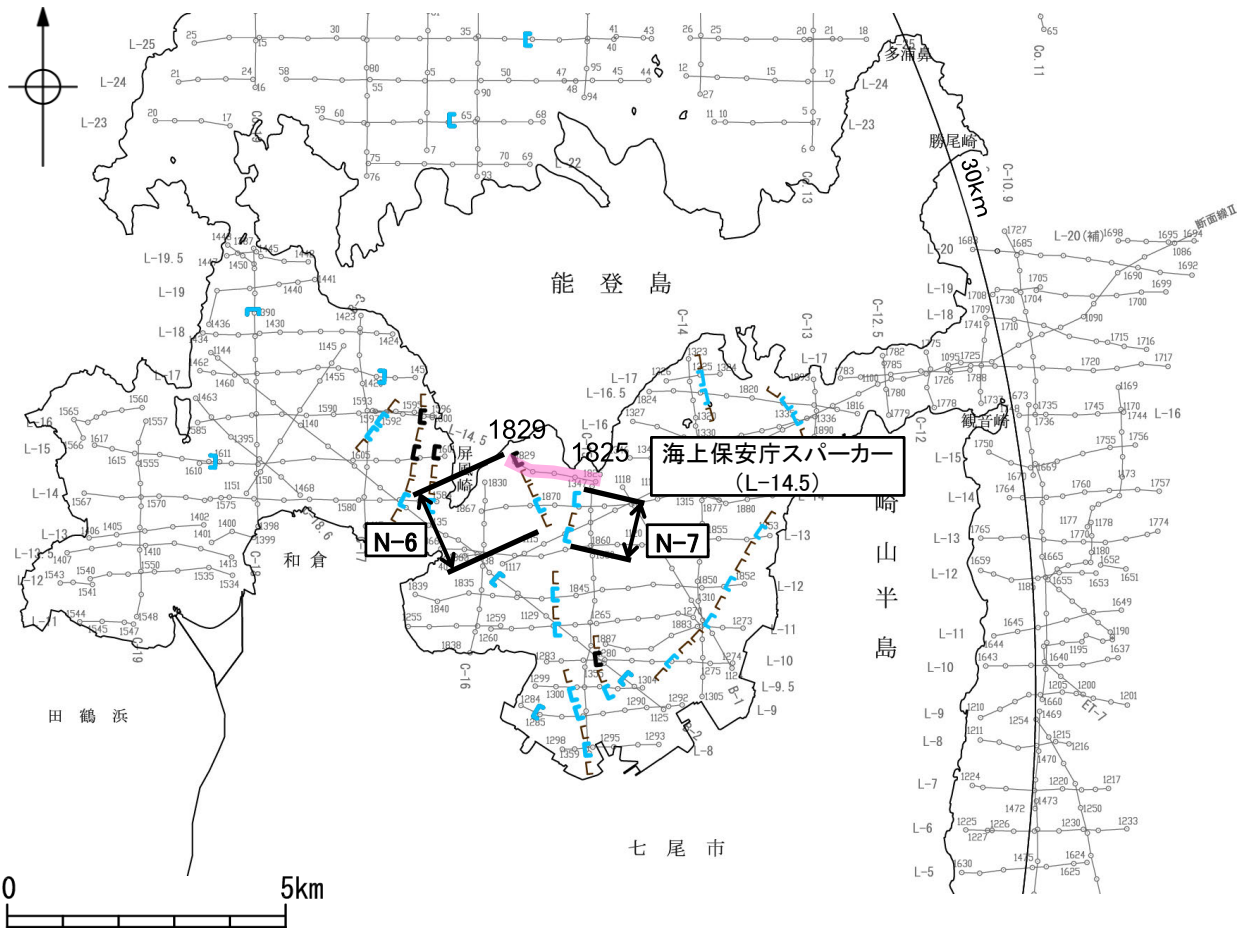
・この図面は海上保安庁水路部(現、海上保安庁海洋情報部)の海上音波探査の記録を北陸電力が独自に解析・作成したものである



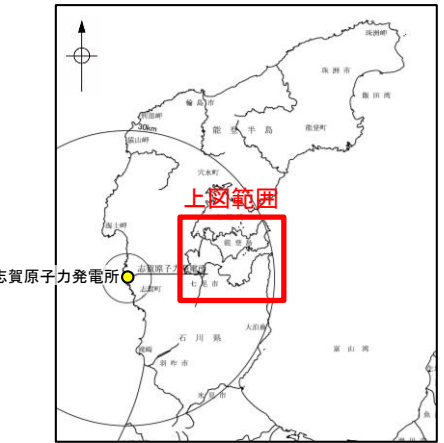
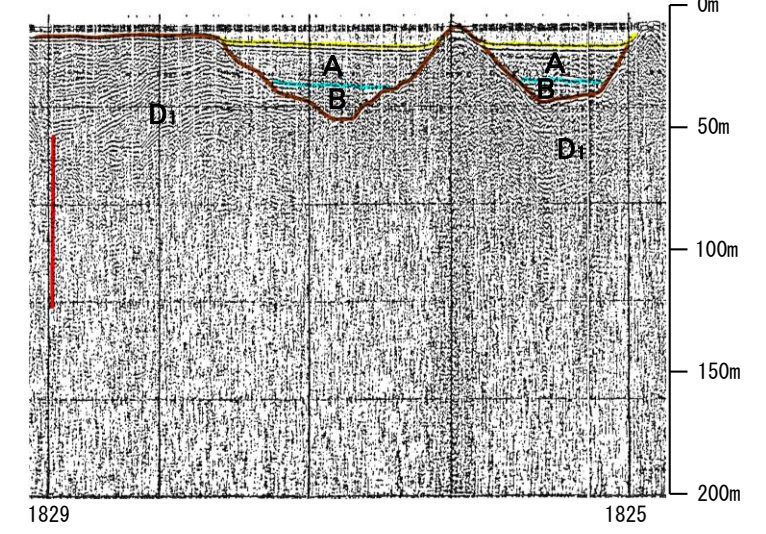
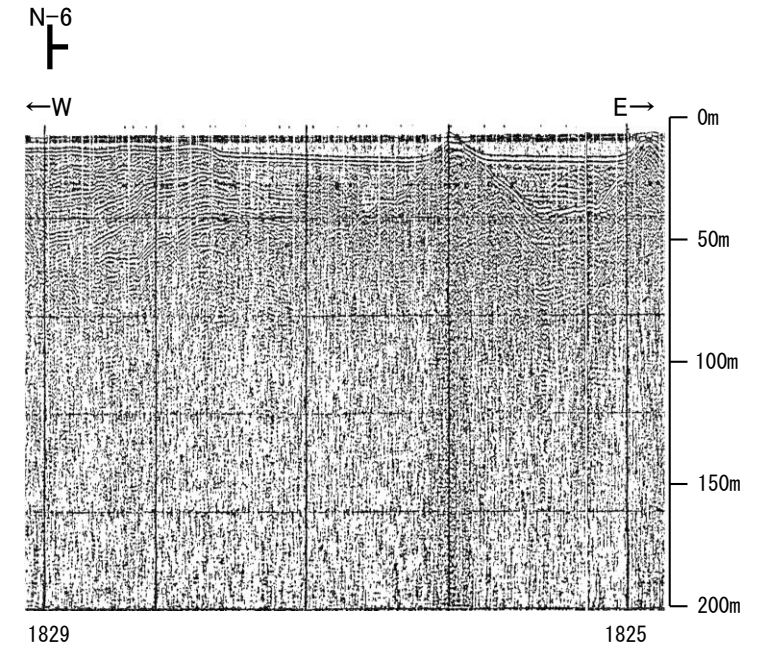
断層(破線は推定)

2.4.5.1.2 (2) 七尾湾調査海域の断層の活動性 -L-14.5測線-

○L-14.5測線において、測点1829付近でD₁層上部に東落ちの変形が認められ、D₁層下部に東落ちの変位が認められることから断層(N-6)を推定した。推定位置に、後期更新世以降の活動の判定が可能な上載層が分布しないことから、B層以上に変位、変形の可能性が否定できないと判断した。



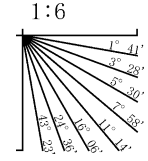
位置図



- 凡 例
- 音波探査記録から推定した断層
 - 伏在断層
 - 連続性のない断層
 - (測線位置における活動性)
 - B層以上に変位、変形の可能性が否定できない
 - B層以上に変位、変形が認められない
 - 調査測線 (海上保安庁水路部：スーパー・シングルチャンネル)

地質時代		地層名
第四紀	完新世	A層
	後期	B層
	中期	C層
新第三紀	鮮新世	D ₁ 層
	中新世	D ₂ 層
古第三紀		D層
先第三紀		D層

・この図面は海上保安庁水路部(現、海上保安庁海洋情報部)の海上音波探査の記録を北陸電力が独自に解析・作成したものである

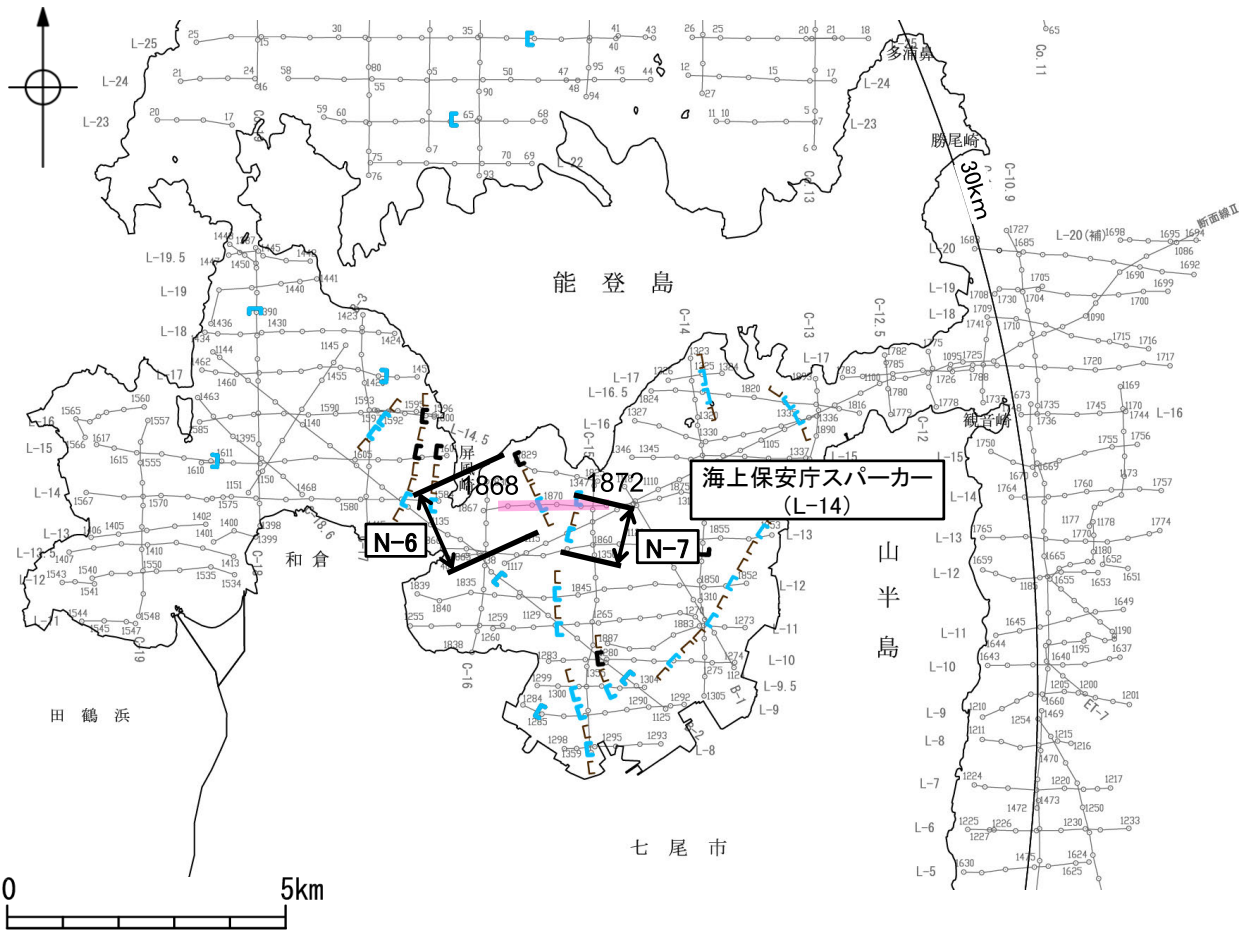


断層

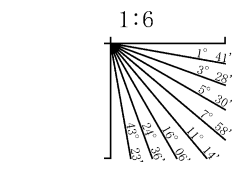
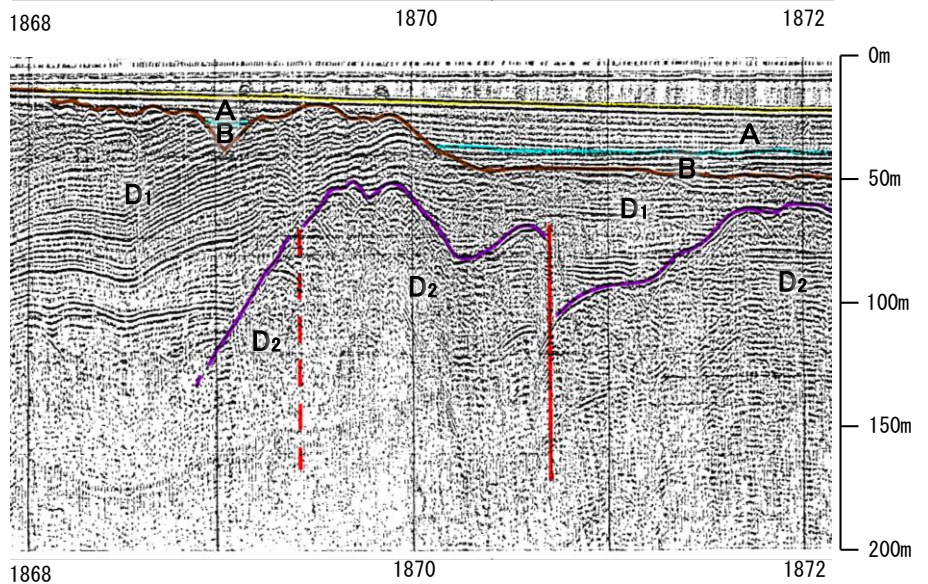
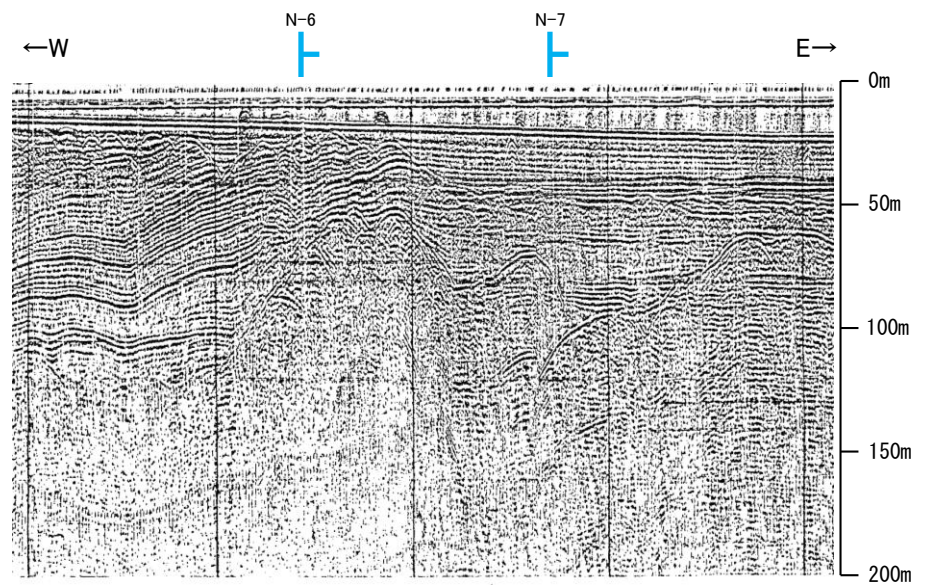
2.4.5.1.2 (2) 七尾湾調査海域の断層の活動性 -L-14測線-

○L-14測線において、測点1869.5付近でD₁層下部に東落ちの変形が認められ、D₁層基底及びD₂層に東落ちの変位が推定されることから断層(N-6)を推定した。変位、変形はA層及びD₁層上部に及んでいないことから、B層以上に変位、変形が認められないと判断した。

○また、測点1871付近でD₁層下部及びD₂層に東落ちの変位が認められることから断層(N-7)を推定した。変位、変形はA層、B層及びD₁層上部に及んでいないことから、B層以上に変位、変形が認められないと判断した。

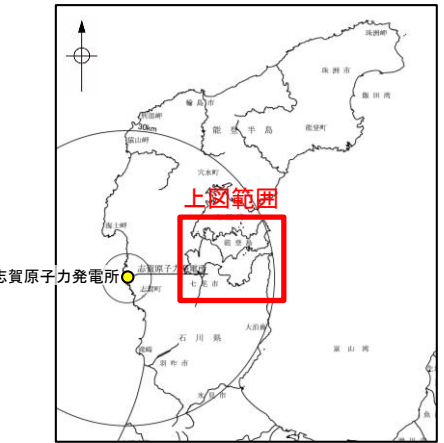


位置図



地質時代		地層名
第四紀	完新世	A層
	後期	B層
	中期	C層
	前期	D層
第三紀	鮮新世	D ₁ 層
	中新世	D ₂ 層
古第三紀		D層
先第三紀		D層

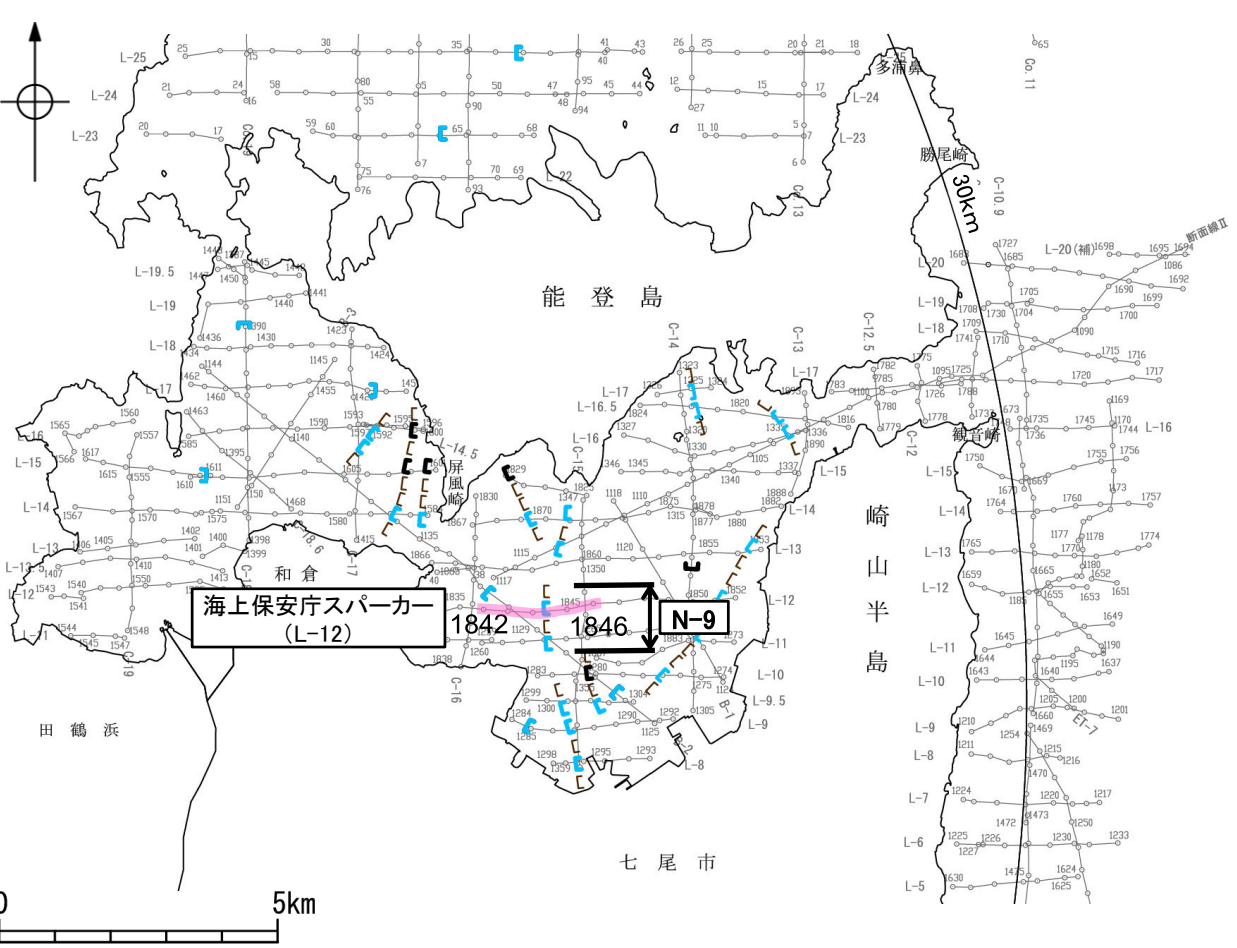
- 凡 例
- 音波探査記録から推定した断層
 - 伏在断層
 - 連続性のない断層
 - 断層(破線は推定)
 - 右図記録範囲
 - (測線位置における活動性)
 - B層以上に変位、変形の可能性が否定できない
 - B層以上に変位、変形が認められない
 - 調査測線(海上保安庁水路部: スパーカー・シングルチャンネル)



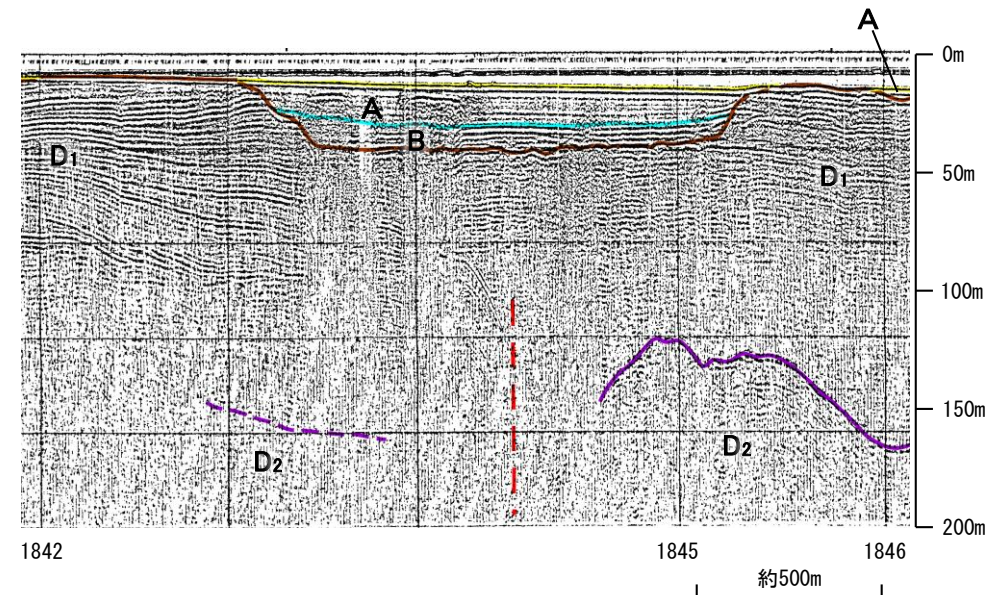
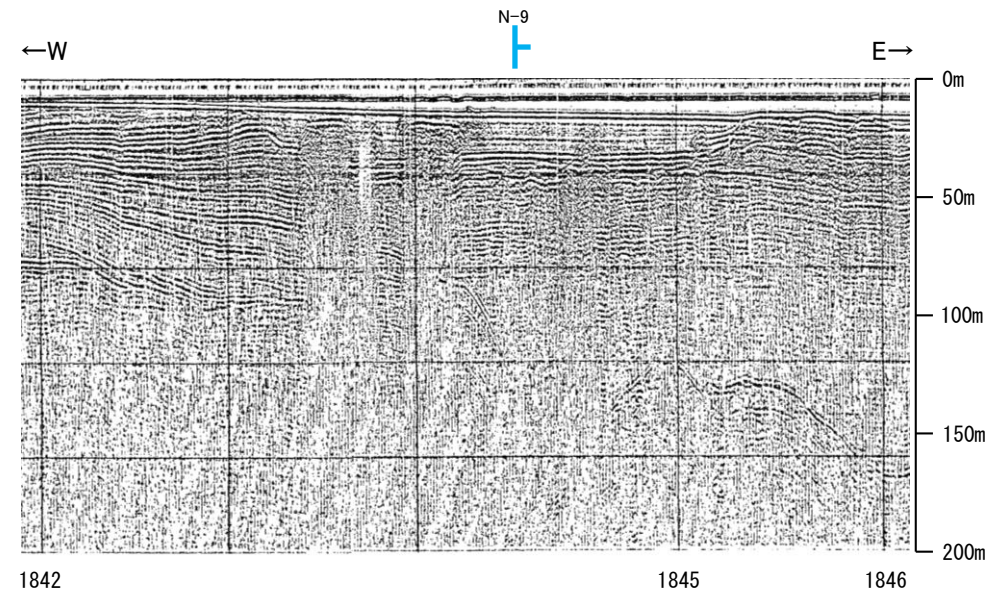
・この図面は海上保安庁水路部(現、海上保安庁海洋情報部)の海上音波探査の記録を北陸電力が独自に解析・作成したものである

2.4.5.1.2 (2) 七尾湾調査海域の断層の活動性 -L-12測線-

○L-12測線において、測点1844.5付近でD₁層下部に東落ちの変位が推定されることから断層(N-9)を推定した。変位、変形はA層、B層及びD₁層上部に及んでいないことから、B層以上に変位、変形が認められないと判断した。



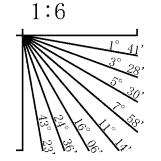
位置図



- 凡 例
- 音波探査記録から推定した断層
 - 伏在断層
 - 連続性のない断層
 - (測線位置における活動性)
 - B層以上に変位、変形の可能性が否定できない
 - B層以上に変位、変形が認められない
 - 調査測線 (海上保安庁水路部: スパーカー・シングルチャンネル)
 - 右図記録範囲

地質時代		地層名	
第四紀	完新世	A層	
	更新世	後期	B層
		前期	C層
新第三紀	鮮新世	D層	
	中新世	D層	
古第三紀		D ₁ 層	
先第三紀		D ₂ 層	

・この図面は海上保安庁水路部(現、海上保安庁海洋情報部)の海上音波探査の記録を北陸電力が独自に解析・作成したものである

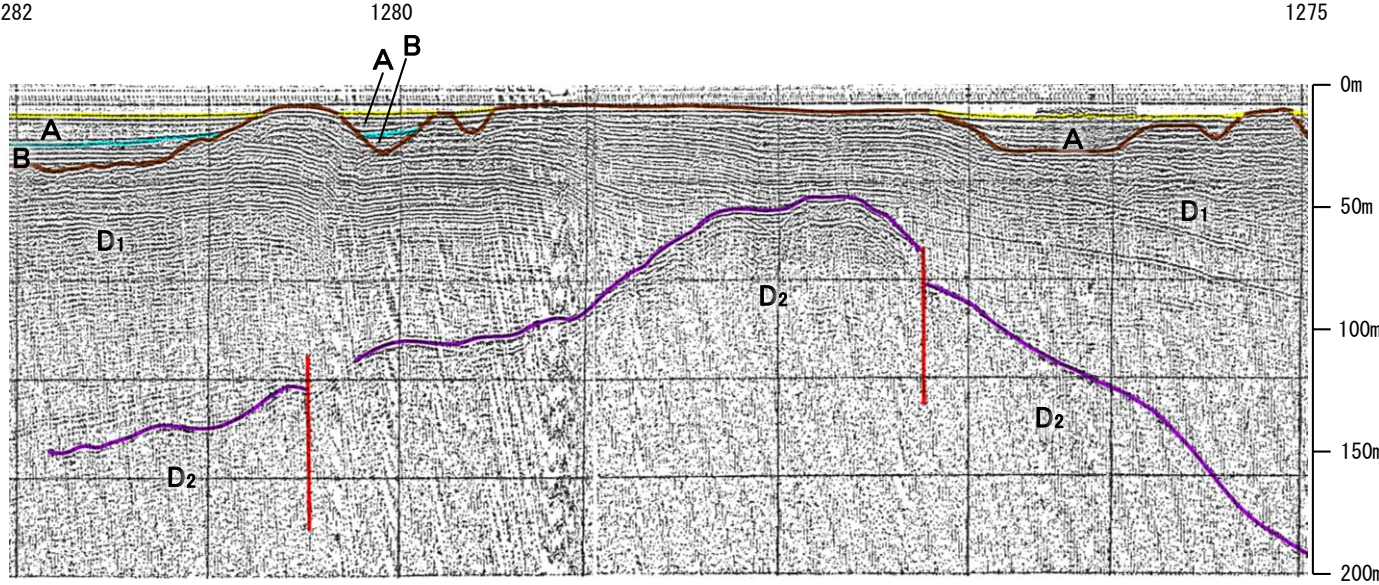
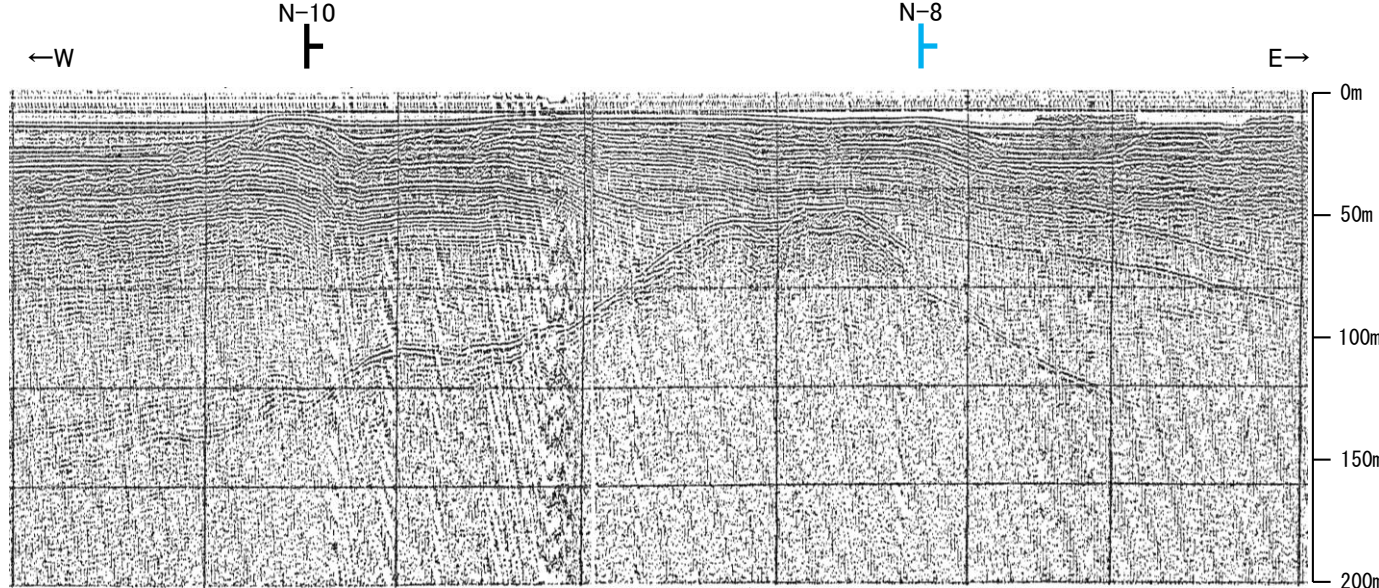
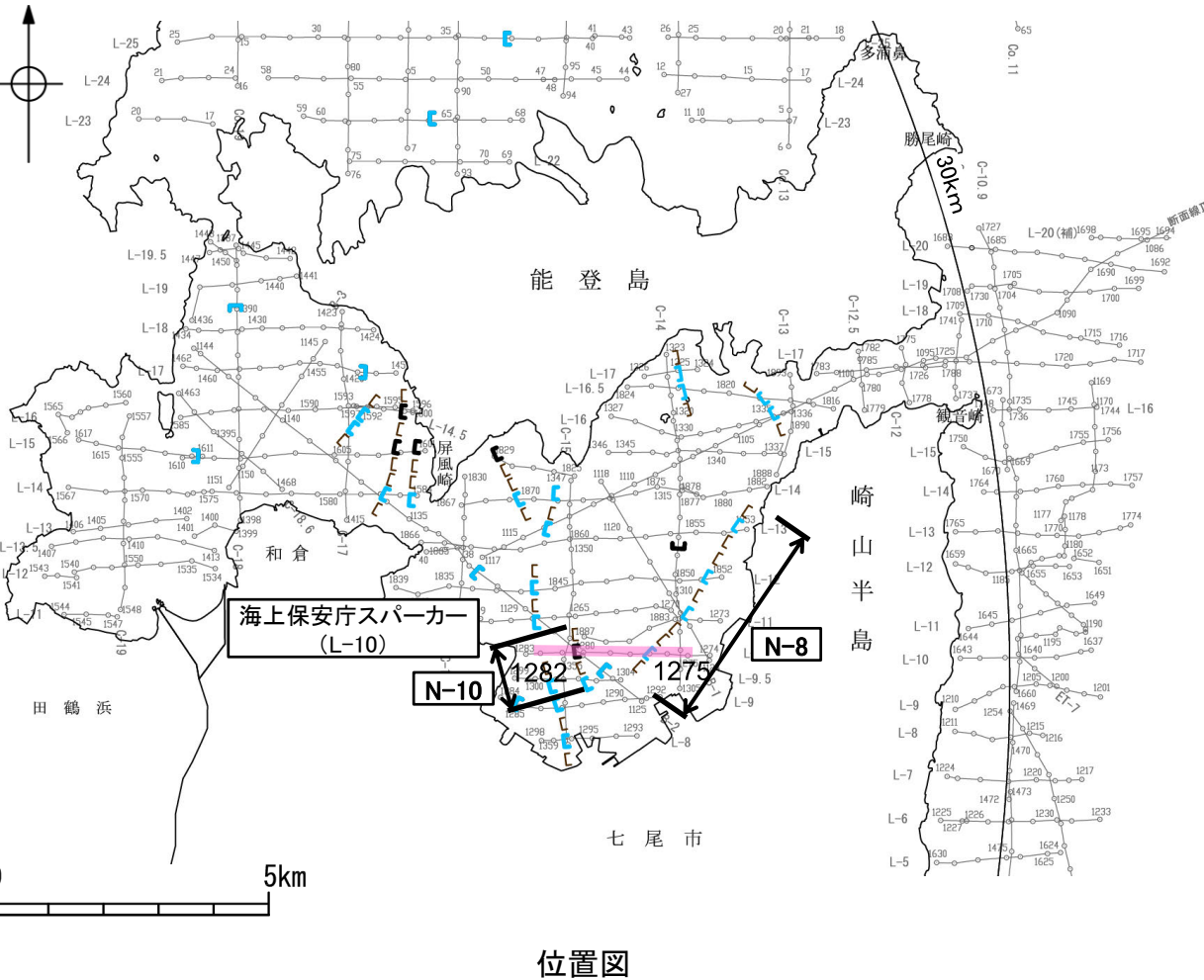


断層(破線は推定)

2.4.5.1.2 (2) 七尾湾調査海域の断層の活動性 -L-10測線-

○L-10測線において、測点1277付近でD₁層下部及びD₂層に東落ちの変位が認められることから断層(N-8)を推定した。変位、変形はD₁層上部に及んでいないことから、B層以上に変位、変形が認められないと判断した。

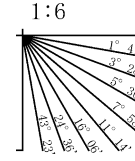
○また、測点1280.5付近でD₁層上部に東落ちの変形が認められ、D₁層下部及びD₂層に東落ちの変位が認められることから断層(N-10)を推定した。推定位置には、後期更新世以降の活動の判定が可能な上載層が分布しないことから、B層以上に変位、変形の可能性が否定できないと判断した。



- 凡 例
- 音波探査記録から推定した断層
 - 伏在断層
 - 連続性のない断層
 - (測線位置における活動性)
 - B層以上に変位、変形の可能性が否定できない
 - B層以上に変位、変形が認められない
 - 調査測線 (海上保安庁水路部: スーパー・シングルチャンネル)
 - 右図記録範囲

地質時代		地層名	
第四紀	完新世	A層	
	更新世	後期	B層
		中期	C層
第三紀	鮮新世	D層	
	中新世		
	古第三紀	D ₁ 層	
先第三紀	D ₂ 層		

・この図面は海上保安庁水路部(現、海上保安庁海洋情報部)の海上音波探査の記録を北陸電力が独自に解析・作成したものである

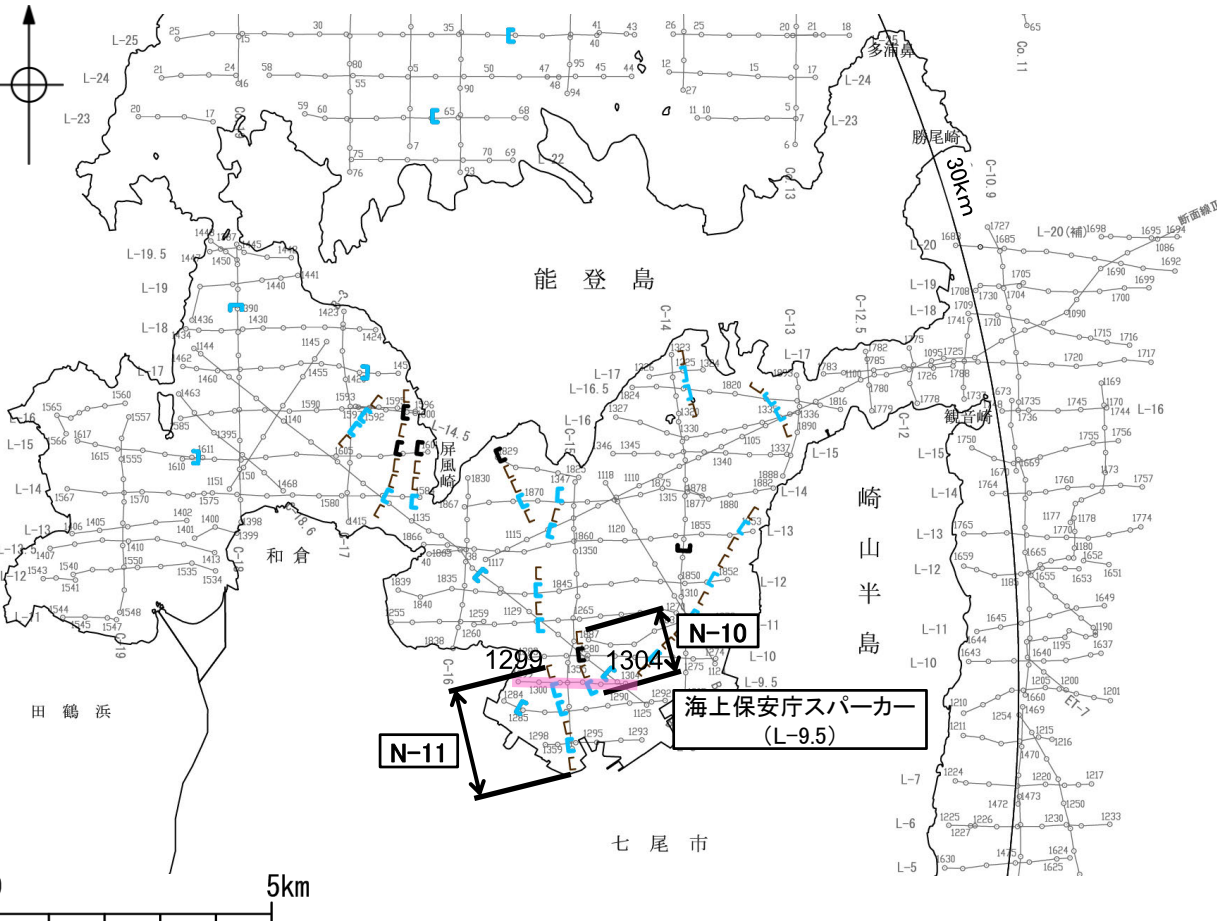


断層

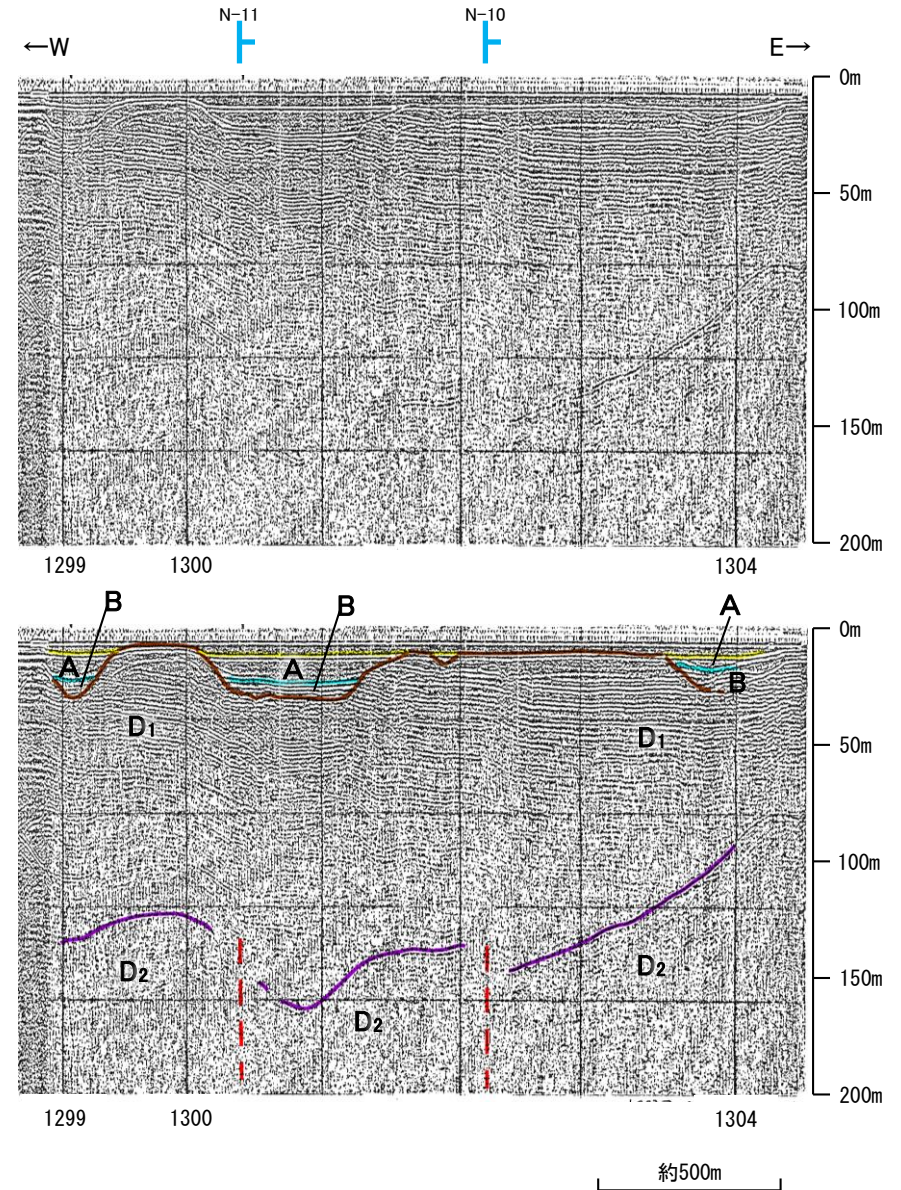
2.4.5.1.2 (2) 七尾湾調査海域の断層の活動性 -L-9.5測線-

○L-9.5測線において、測点1300.5付近でD₁層下部及びD₂層に東落ちの変位が推定されることから断層(N-11)を推定した。変位、変形はA層、B層及びD₁層上部に及んでいないことから、B層以上に変位、変形が認められないと判断した。

○また、測点1302付近でD₁層下部及びD₂層に東落ちの変位が推定されることから断層(N-10)を推定した。変位、変形はD₁層上部に及んでいないことから、B層以上に変位、変形が認められないと判断した。



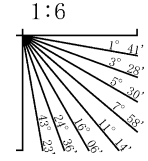
位置図



- 凡 例
- 音波探査記録から推定した断層
 - 伏在断層
 - 連続性のない断層
 - (測線位置における活動性)
 - B層以上に変位、変形の可能性が否定できない
 - B層以上に変位、変形が認められない
 - 調査測線 (海上保安庁水路部: スパーカー・シングルチャンネル)
 - 右図記録範囲

地質時代		地層名
第四紀	完新世	A層
	後期	B層
	中期	C層
新第三紀	鮮新世	D ₁ 層
	中新世	D ₂ 層
古第三紀		D層
先第三紀		D ₀ 層

・この図面は海上保安庁水路部(現、海上保安庁海洋情報部)の海上音波探査の記録を北陸電力が独自に解析・作成したものである

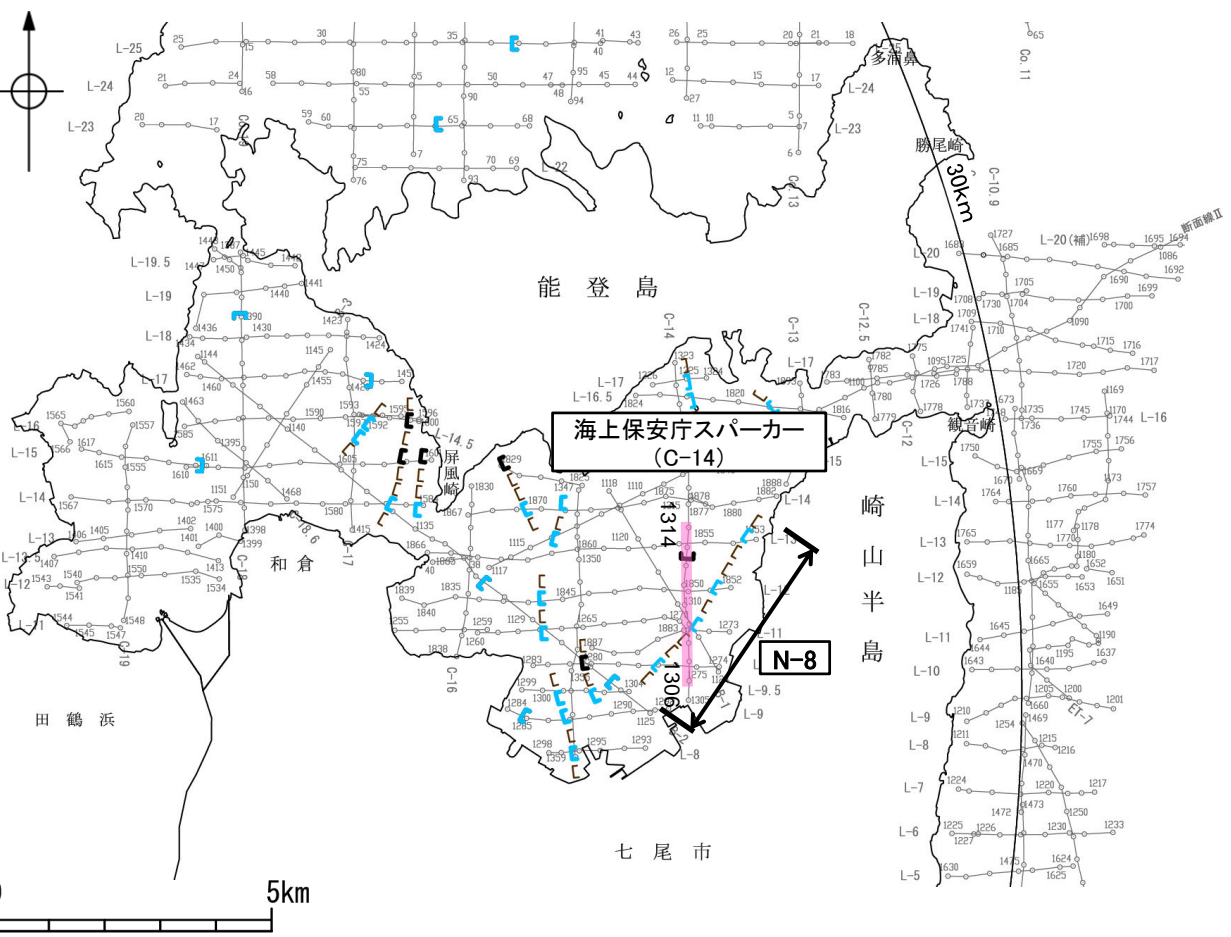


断層(破線は推定)

2.4.5.1.2 (2) 七尾湾調査海域の断層の活動性 -C-14測線-

○C-14測線において、測点1308付近でD₁層下部及びD₂層に南落ちの変位が認められることから断層(N-8)を推定した。変位、変形はA層及びD₁層上部に及んでいないことから、B層以上に変位、変形が認められないと判断した。

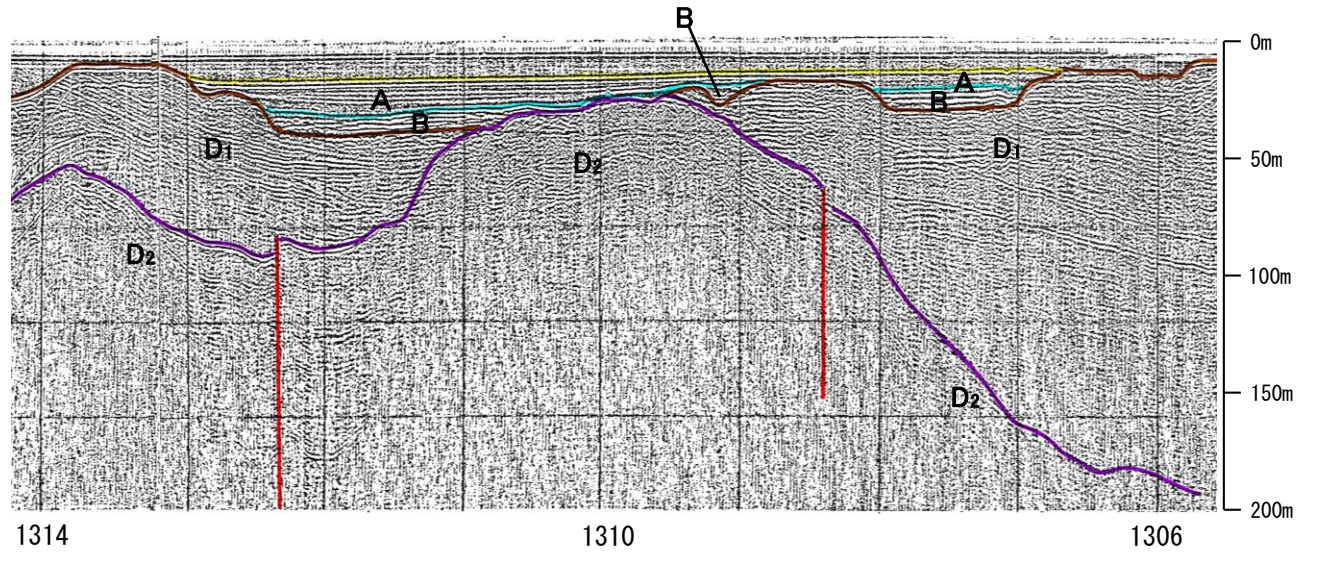
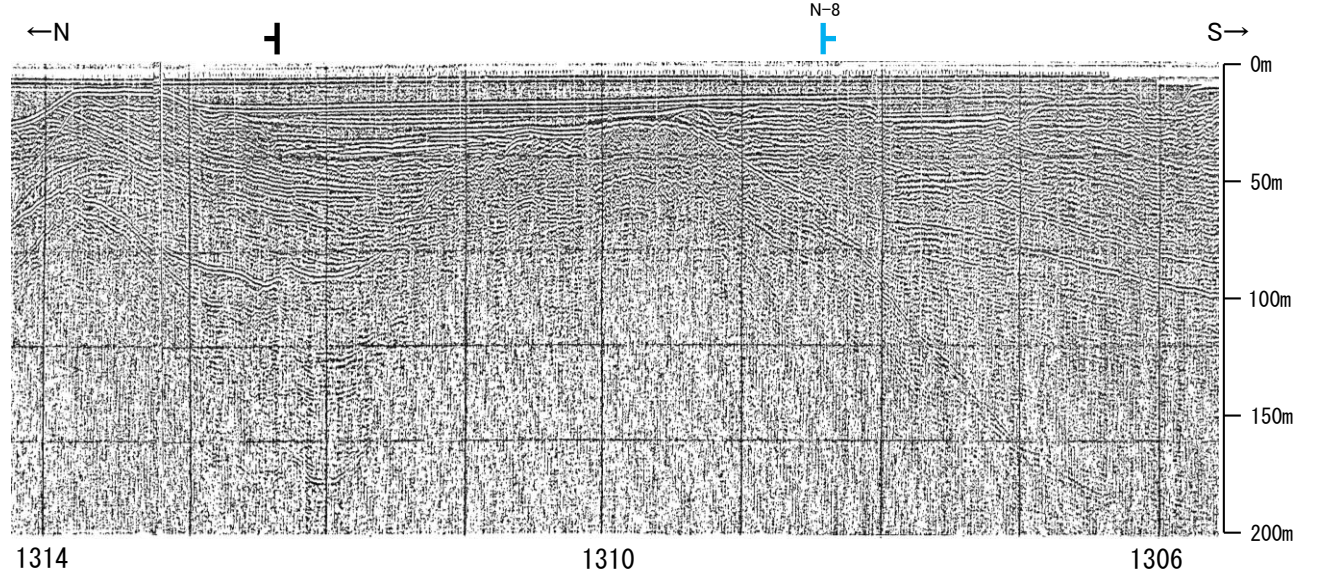
○また、測点1312付近でD₁層下部及びD₂層に北落ちの変位が認められることから断層を推定した。B層基底及びD₁層上部に南落ちの緩やかな撓みが認められ、D₁層下部D₂層の変位と逆方向であるが、断層の影響による変形の可能性が否定できないことから、B層以上に変位、変形の可能性が否定できないと判断した。



位置図



- 凡例
- 音波探査記録から推定した断層
 - 伏在断層
 - 連続性のない断層
 - (測線位置における活動性)
 - B層以上に変位、変形の可能性が否定できない
 - B層以上に変位、変形が認められない
 - 調査測線(海上保安庁水路部: スーパー・シングルチャンネル)
 - 右図記録範囲



地質時代	地層名	
第四紀	完新世	A層
	後期	B層
	中期	B層
更新世	前期	C層
	鮮新世	D層
新第三紀	中新世	D層
	古第三紀	D層
先第三紀	D層	

この図面は海上保安庁水路部(現、海上保安庁海洋情報部)の海上音波探査の記録を北陸電力が独自に解析・作成したものである

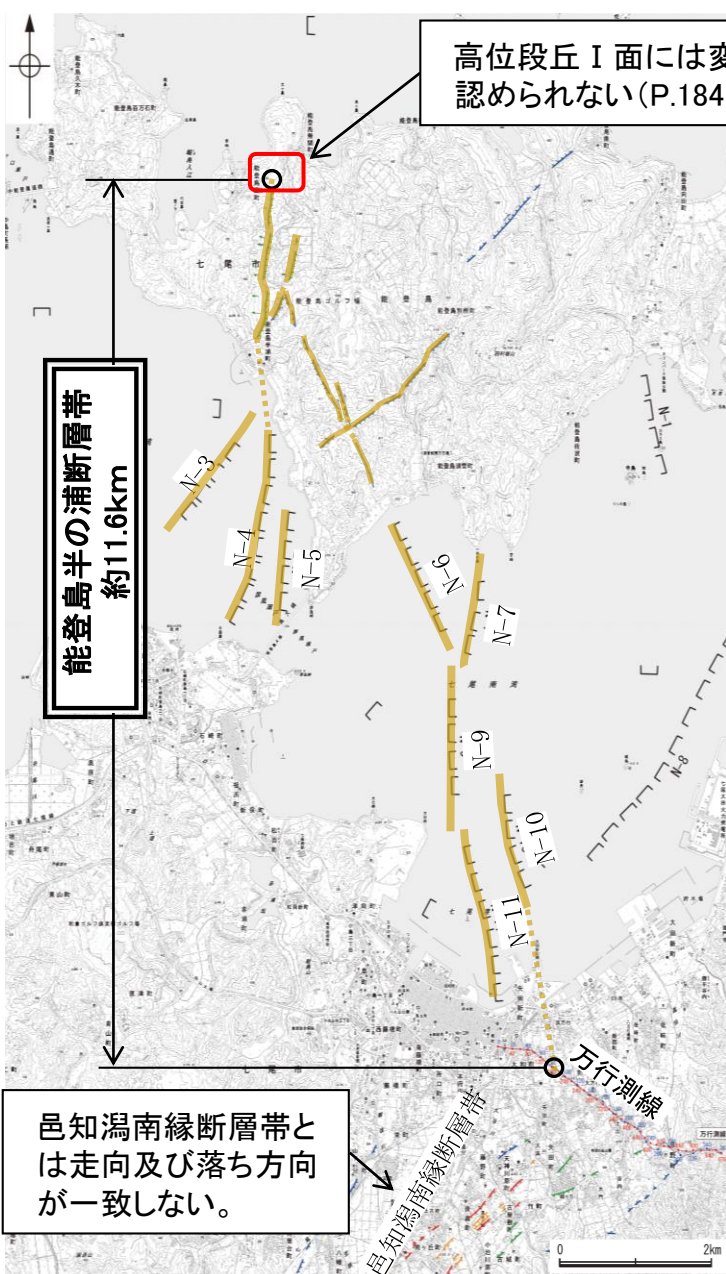
1:6

断層

2.4.5.1.3 能登島半の浦断層帯の端部

2.4.5.1.3 能登島半の浦断層帯の端部

- 半の浦西リニアメント及び半の浦東リニアメントは後期更新世以降の活動の可能性があること、これらの南方延長の海域に分布するN-3～N-7, N-9～N-11断層は、いずれもD層に伏在する断層であるが、走向及び落ちの方向が一致していることから、安全側に判断して、一連の構造(能登島半の浦断層帯)と考える。
- 能登島半の浦断層帯の北方延長に広く分布する高位段丘 I 面には変位、変形は認められない。
- 能登島半の浦断層帯の南方延長については、陸域で実施した反射法地震探査結果(万行測線)により、平野下では新第三系及び第四系に相当する反射パターンは連続しており、明瞭な断層や撓曲は認められないこと、その周辺に位置する邑知潟南縁断層帯とは走向及び落ち方向が一致しないことから、陸域には延長しないと考える。
- 以上を踏まえ、能登島半の浦断層帯の長さとして、高位段丘 I 面に変位、変形が認められない地点から反射法地震探査測線(万行測線)までの約11.6km区間を評価した。
- なお、須曽リニアメントについては対応する断層が認められず、島別所南リニアメントは組織地形である可能性が大きい。しかし、これらは能登島半の浦断層帯に近接し、さらに須曽リニアメントはN-6と同走向であることを踏まえ、安全側に判断し、能登島半の浦断層帯の断層活動に伴う副次的なものとして評価した。

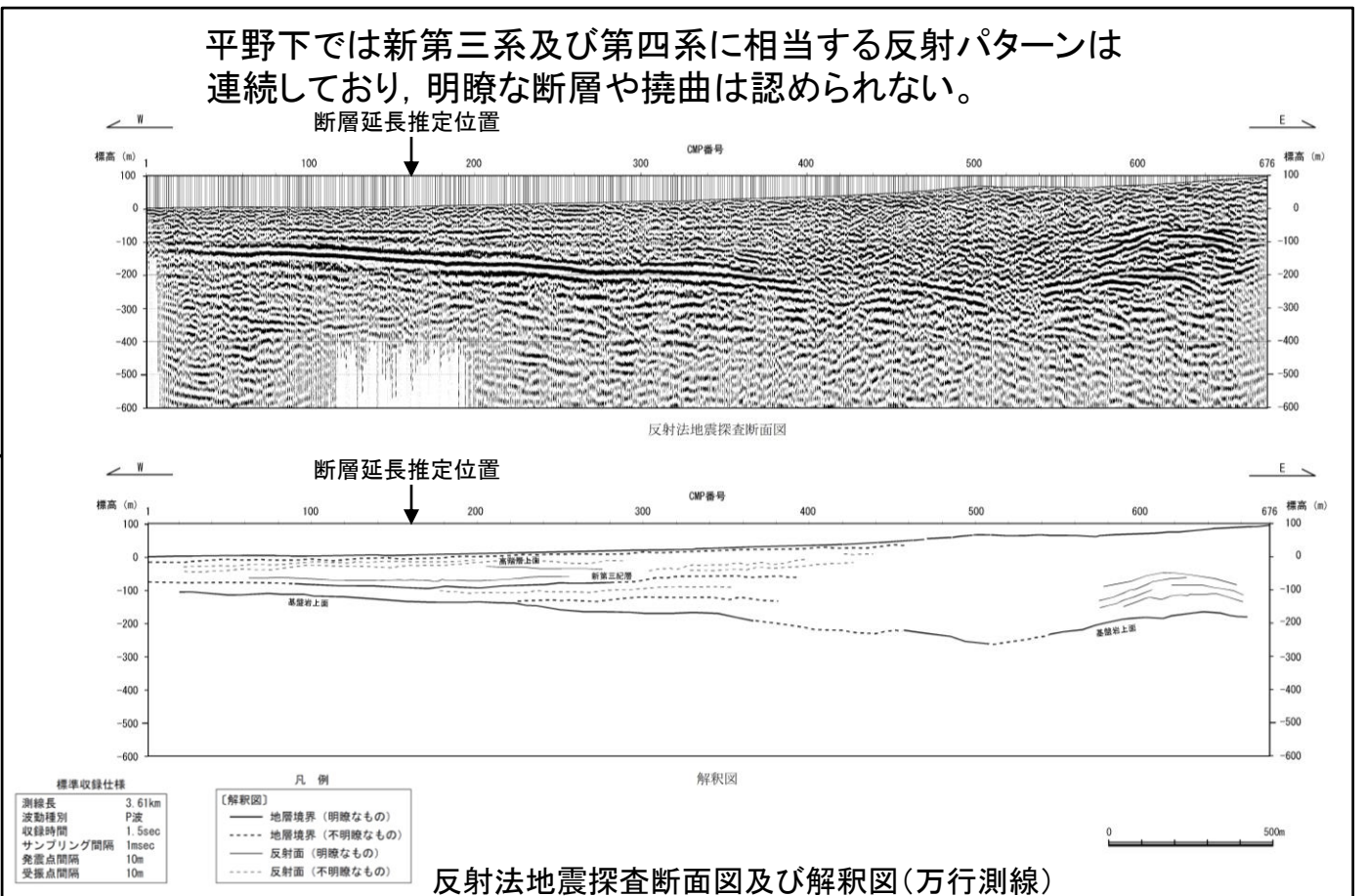
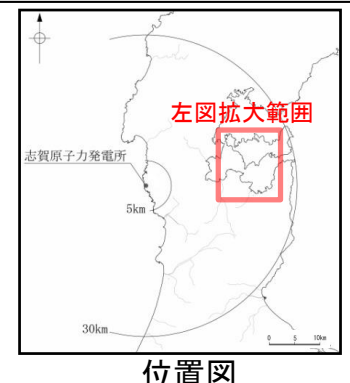
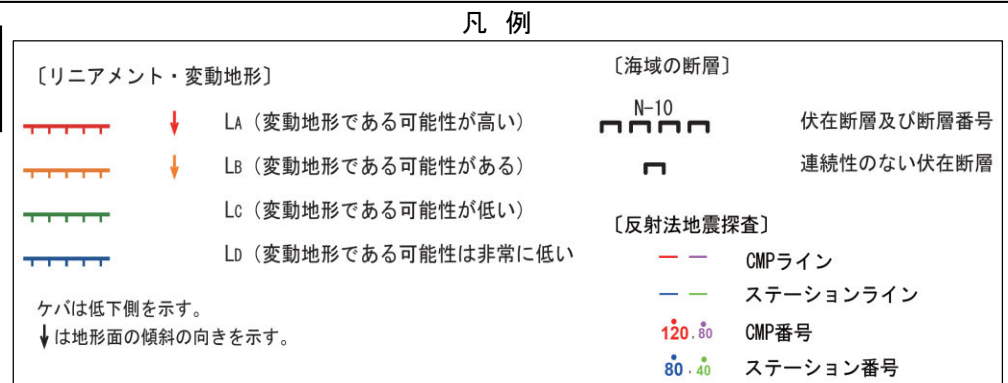


高位段丘 I 面には変位、変形は認められない(P.184, 185)。

能登島半の浦断層帯
約11.6km

邑知潟南縁断層帯とは走向及び落ち方向が一致しない。

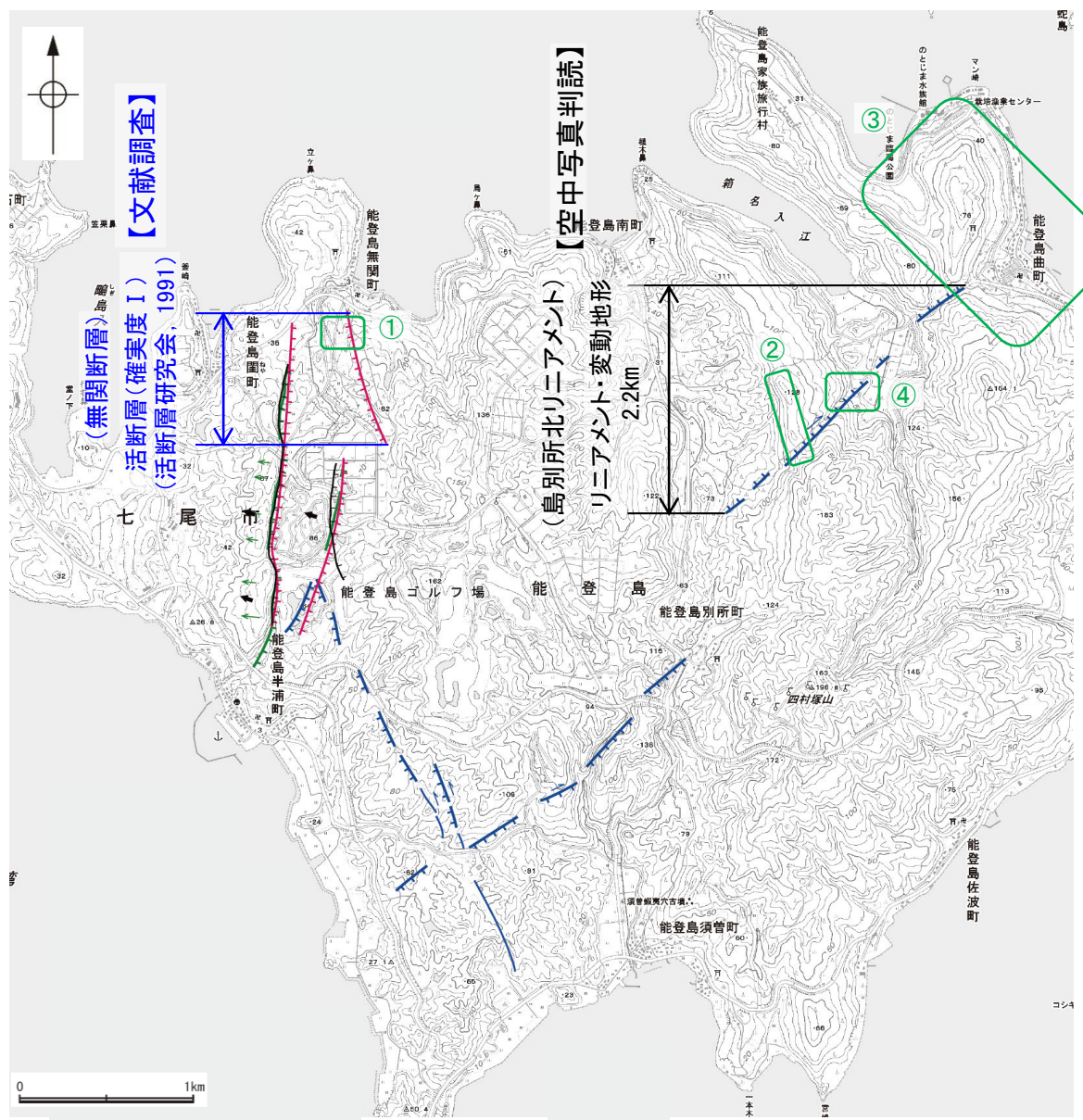
調査位置図



2.4.5.2 無関断層・島別所北リニアメント

2.4.5.2 (1) 無関断層及び島別所北リニアメントの評価結果

【文献調査】(P.215)
 ○活断層研究会(1991)は、無関断層(確実度 I)を図示し、長さ0.5km、活動度C、東側の海成段丘H₃面が12m隆起と記載している。
 【空中写真判読】(P.216)
 ○文献が図示している半の浦西断層及び半の浦東断層付近より東方の約2.2km区間において、小起伏面における北側低下の急崖、鞍部からなるDランクのリニアメント・変動地形(島別所北リニアメント)を判読した。



調査位置図

位置図

凡例

〔リニアメント・変動地形〕

- LA (変動地形である可能性が高い)
- LB (変動地形である可能性がある)
- LC (変動地形である可能性が低い)
- LD (変動地形である可能性は非常に低い)

〔活断層研究会(1991)他〕

- 活断層*
- 推定活断層*

〔今泉ほか(2018)〕

- 活断層
- 活断層(位置不確か(人工改変・侵食崖))
- 活断層(位置不確か(延長部に崖あり))
- 活断層(断層崖)
- 活拗曲
- 傾動
- 活断層(横ずれ)
- 推定活断層
- 推定活断層(断層崖)
- 推定活断層(横ずれ)

短線は縦ずれの低下側、矢印は横ずれの向きを示す。
 * 活断層研究会(1991)の他、太田ほか(1976)、加藤・山(1985)、日本第四紀学会(1987)、太田・国土地理地理調査部(1997)及び小池・町田(2001)による。

無関断層・島別所北リニアメントに関する調査一覧表

内容	位置	目的	参照頁
① 段丘面調査	無関断層周辺	断層の活動性評価	P.216, 217
② 段丘面調査	島別所北リニアメント周辺	断層の活動性評価	P.216, 217, 219
③ 段丘面調査	島別所北リニアメント北東方	断層の活動性評価	P.216, 217
④ 表土はぎ調査	島別所北リニアメント周辺	断層の活動性評価	P.220, 221
⑤ 地表踏査	無関断層・島別所北リニアメント周辺※	広域的な地質分布を確認	P.220
⑥ 重力探査	無関断層・島別所北リニアメント周辺※	断層の深部構造を確認	P.223

※:⑤, ⑥は断層周辺の全域で実施

活動性評価(無関断層)

○図示された位置に崖地形が認められるものの、その崖面は開析され、ほぼ高位段丘I面とII面との段丘崖に位置するとともに、北部では、崖地形の両側に分布する高位段丘I面に高度差は認められないことから、リニアメント・変動地形は判読されない(図中①)。

活動性評価(島別所北リニアメント)

○島別所北リニアメントとして判読した急崖やその延長位置を挟んで高位段丘面に高度差は認められない(図中②③)。

○リニアメント・変動地形に対応する断層は認められず、リニアメント・変動地形として判読した急崖直下及び近傍では、中新世の和倉珪藻泥岩層がほぼ水平に分布する(図中④)。

活断層研究会(1991)に図示された無関断層の位置を挟んで段丘面の高度差が認められず、後期更新世以降の活動は認められない。

島別所北リニアメントとして判読した北側低下の急崖等は、急崖やその延長位置を挟んで段丘面の高度差が認められず、またリニアメント・変動地形に対応する断層は認められず、急崖直下及び近傍では中新世の和倉珪藻泥岩層がほぼ水平に分布することから、後期更新世以降の活動は認められない。

・なお、重力探査の結果、無関断層、島別所北リニアメントに対応する重力異常急変部は認められない(P.223)

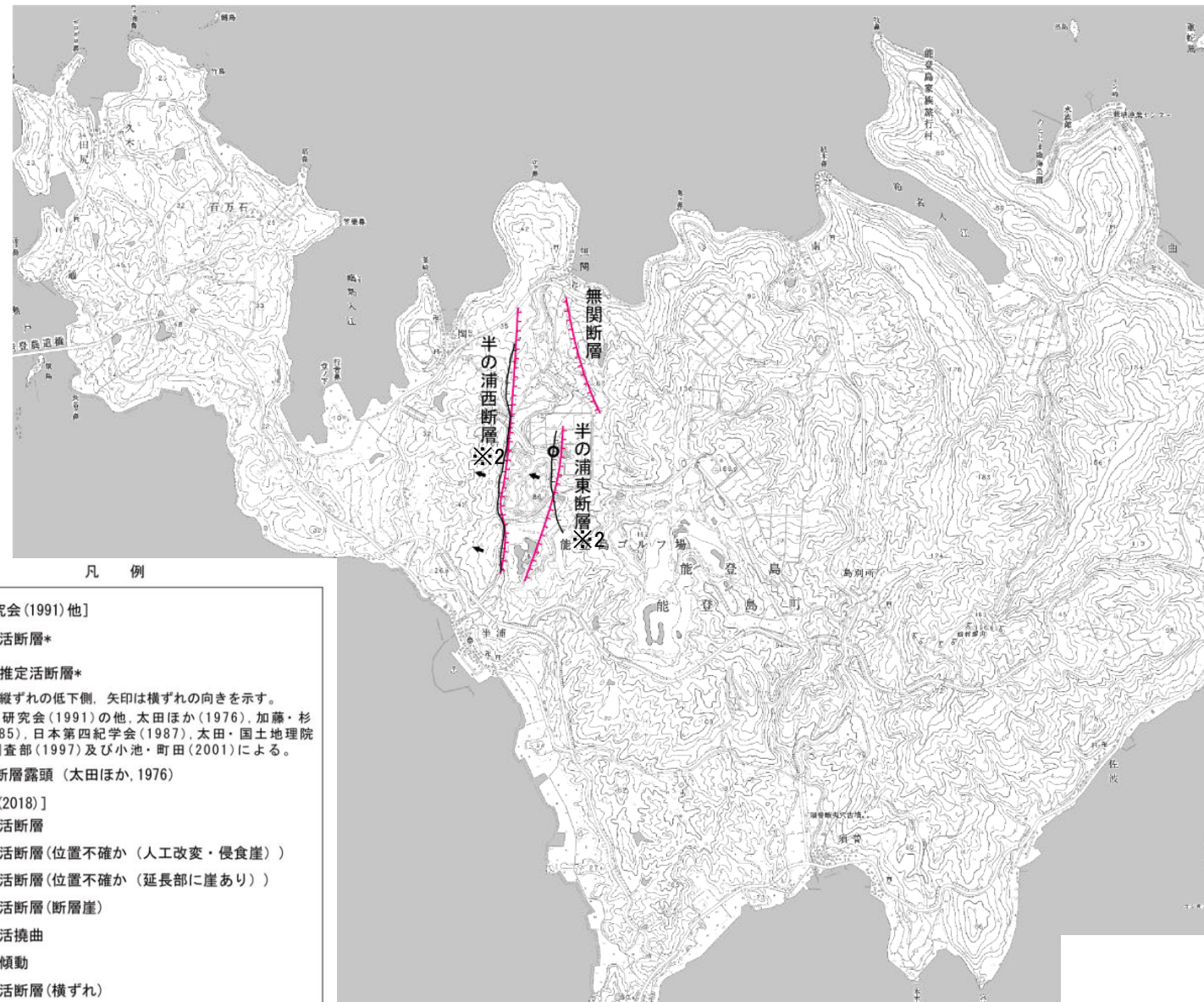
2.4.5.2 (2) 無関断層及び島別所北リニアメントの文献調査

- 太田ほか(1976)は、無関断層を図示し、長さ1km、東側の海成段丘M₁面※1が12m隆起、活動度Bとし、安山岩質角礫岩を切る断層露頭を記載している。
- 「新編 日本の活断層」(活断層研究会, 1991)は、敷地から約21km北東に、無関断層(確実度 I, 西側低下)を図示し、NNW-SSE走向、長さ0.5km、活動度C、東側の海成段丘H₃面※1が12m隆起と記載している。
- 「活断層詳細デジタルマップ[新編]」(今泉ほか, 2018)は、無関断層に対応する活断層等を図示していない。
- その他、加藤・杉山(1985)は、無関断層とほぼ同じ位置に、主として第四紀後期に活動した活断層を図示し、南西側落下、平均変位速度1m/10³年未満としている。日本第四紀学会(1987)は、無関断層とほぼ同じ位置に第四紀後期に活動した活断層を図示し、それぞれ北西側落下としている。太田・国土地理院地理調査部(1997)は、無関断層とほぼ同じ位置に活断層を図示している。小池・町田(2001)は、無関断層とほぼ同じ位置に西側落下の活断層を図示している。
- 「活断層データベース」(産業技術総合研究所地質調査総合センター)は、無関断層及び島別所北リニアメントを起震断層・活動セグメントとして示していない。

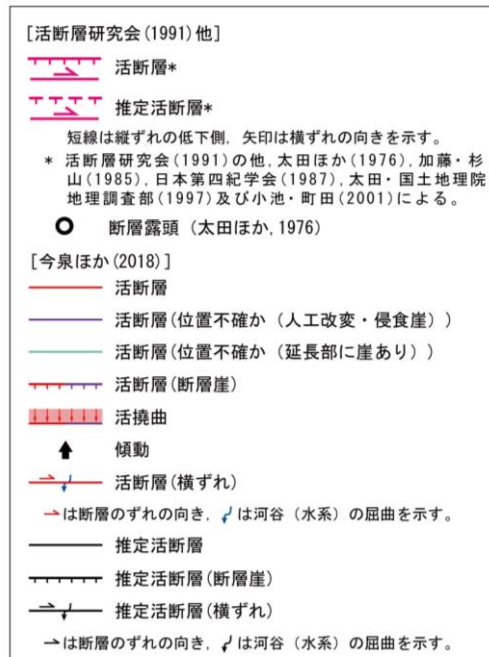
※1: 太田ほか(1976)ではM₁面を下末吉面(最終間氷期)に対比して12万年前、H₃面をM₁面のもう一つ前の間氷期として22万年前、H₁面、H₂面、T₁面などのそれより古い面は>22万年前としている。



位置図



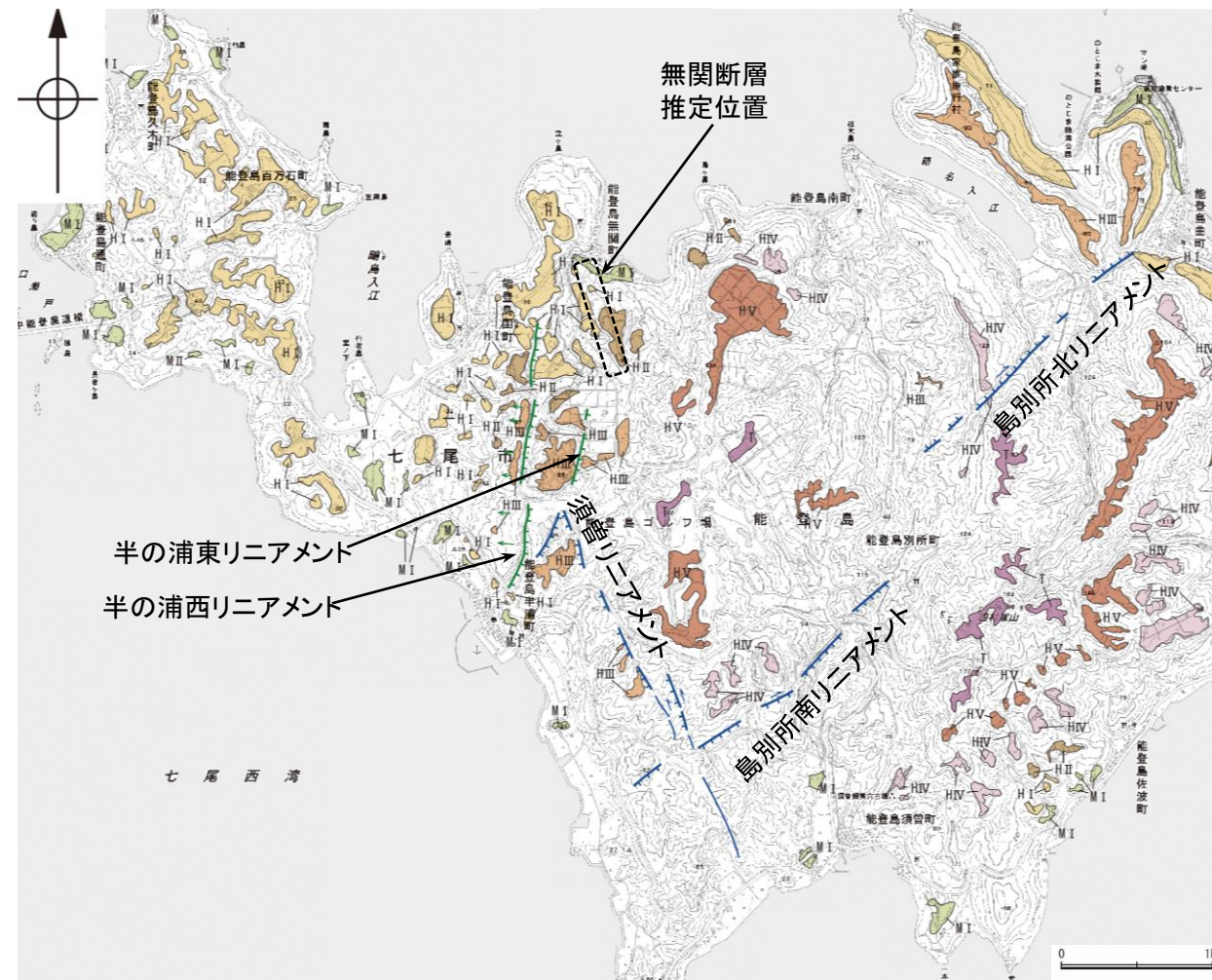
※2 半の浦西断層, 半の浦東断層の詳細は「2.4.5.1 能登島半の浦断層帯(半の浦西断層, 半の浦東断層, 七尾湾調査海域の断層, 須曾リニアメント, 島別所南リニアメント)」



位置図

2.4.5.2 (3) 無関断層及び島別所北リニアメントの地形調査

- 無関断層については、図示された位置に崖地形が認められるものの、その崖面は開析され、ほぼ高位段丘Ⅰ面とⅡ面との段丘崖に位置するとともに、北部では、崖地形の両側に分布する高位段丘Ⅰ面に高度差は認められないことから、リニアメント・変動地形は判読されない(次頁)。
- 島別所北リニアメントは約2.2km区間に判読され、これは小起伏面において北側低下の急崖、鞍部からなるDランクのリニアメント・変動地形である。島別所北リニアメントを挟んで分布する高位段丘Ⅳ面には、高度差は認められず、また、島別所北リニアメントの北東方延長位置を挟んで、高位段丘Ⅰ面に高度差は認められない(次頁, P.219)。



リニアメント・変動地形分布図



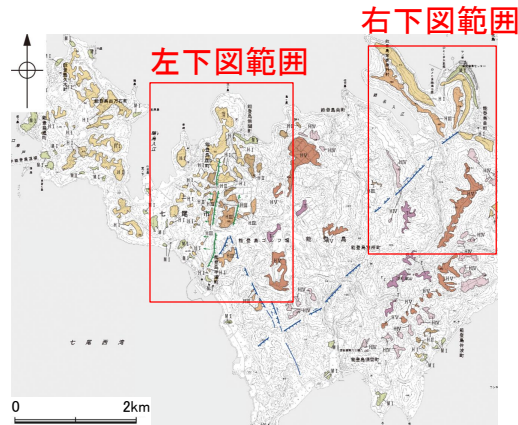
位置図

凡例

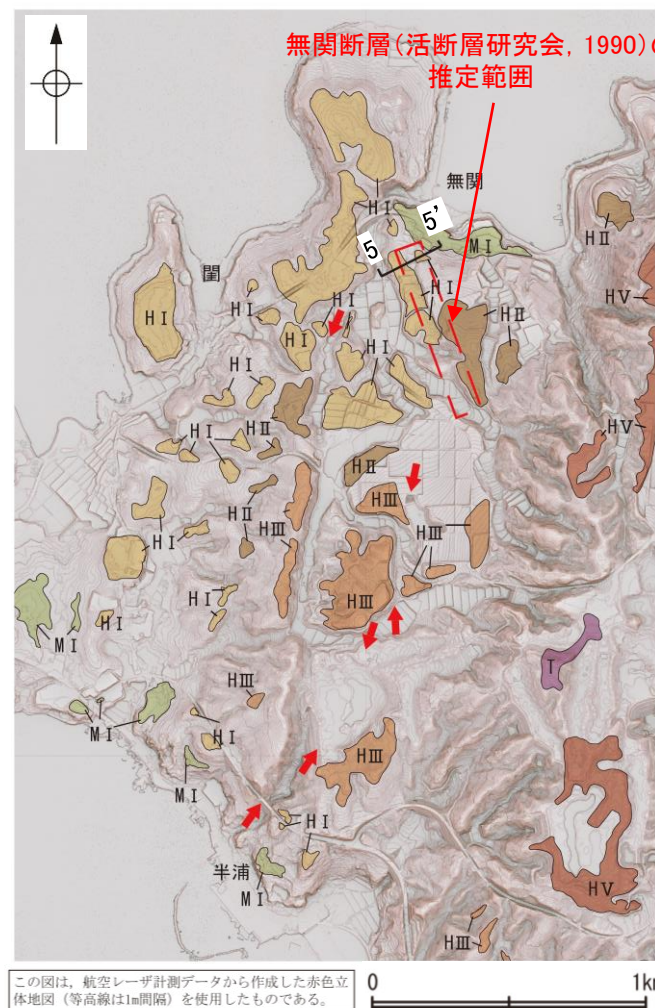
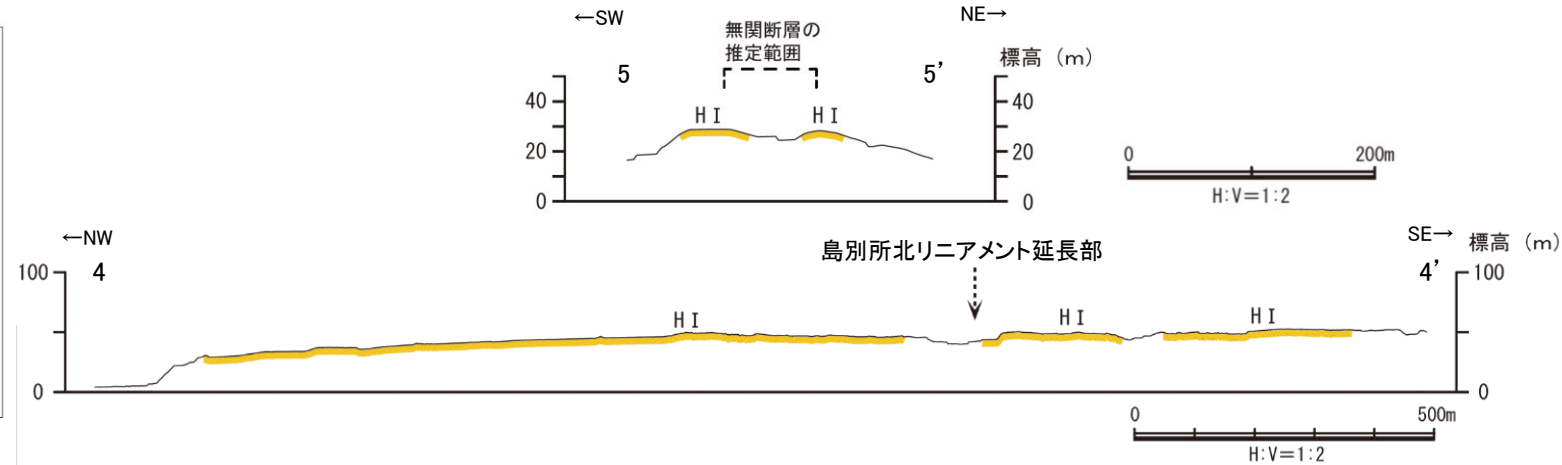
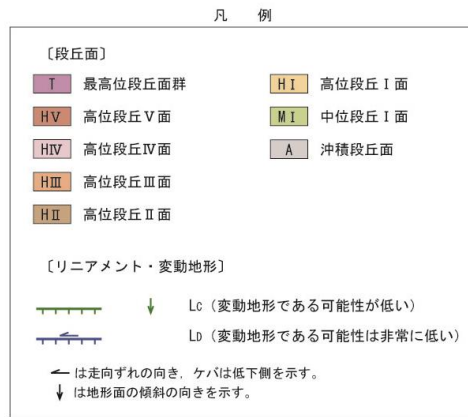
〔段丘面〕	
 最高位段丘面群	 高位段丘Ⅰ面
 高位段丘Ⅴ面	 中位段丘Ⅰ面
 高位段丘Ⅳ面	 沖積段丘面
 高位段丘Ⅲ面	
 高位段丘Ⅱ面	
〔リニアメント・変動地形〕	
	Lc (変動地形である可能性が低い)
	Ld (変動地形である可能性は非常に低い)
← は走向ずれの向き、ケバは低下側を示す。	
↓ は地形面の傾斜の向きを示す。	

無関断層
島別所北リニアメント

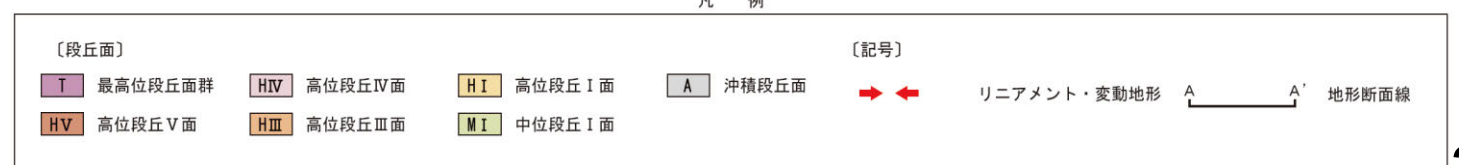
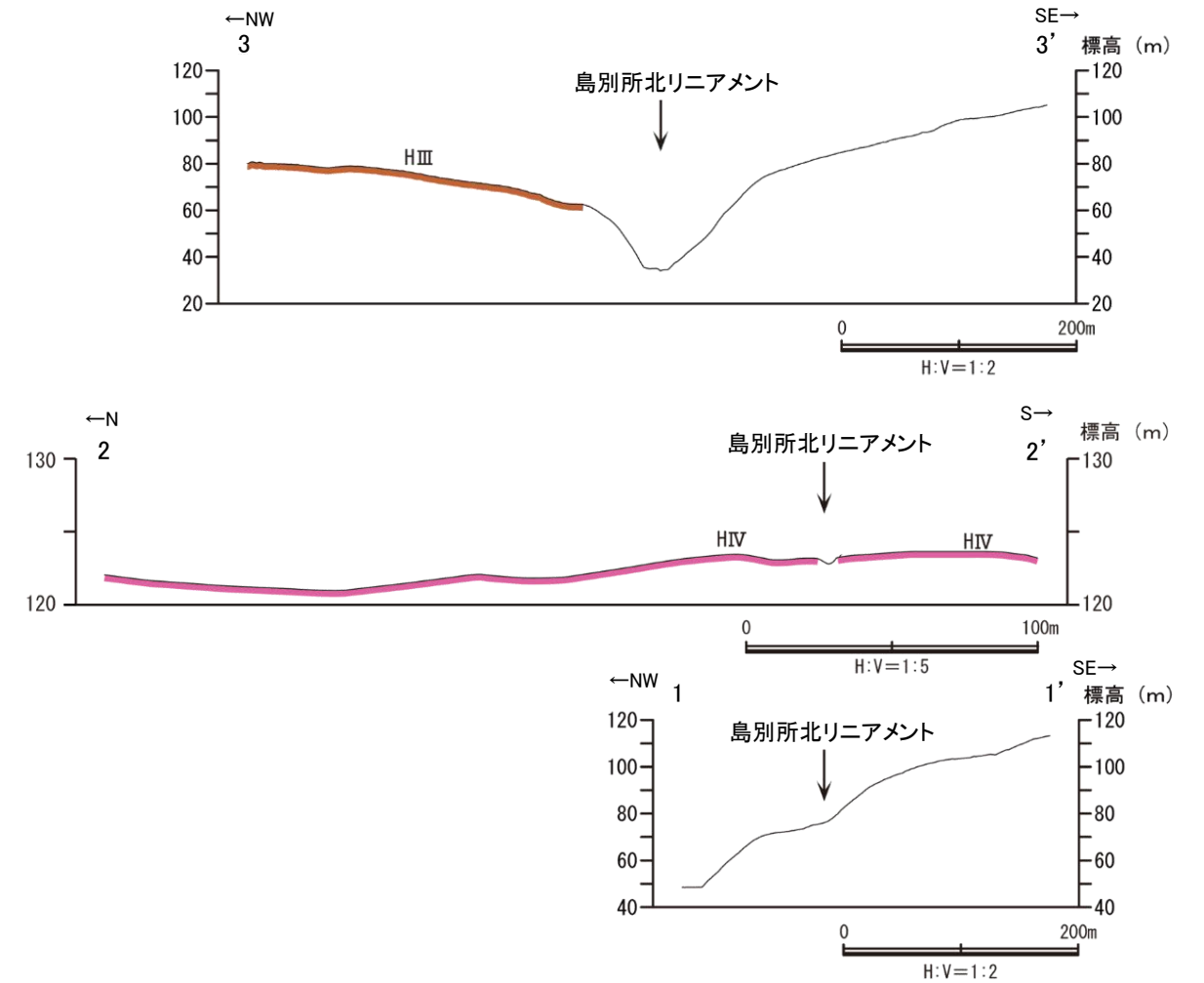
【無関断層及び島別所北リニアメント周辺の赤色立体地図, 地形断面図】



位置図



赤色立体地図(航空レーザ計測データにより作成)



地形断面図(航空レーザ計測データにより作成)